

大宮遺跡第3次発掘調査概報

1980

広島県教育委員会

目 次

I はじめに	(1)
発掘調査日誌抄	(2)
II 遺構	(3)
1 溝	(3)
2 土塙、ピット群など	(6)
3 住居跡	(8)
III 遺物	(10)
1 土器	(10)
2 石器	(19)
3 その他	(24)
IV おわりに	(25)
付1 出土土器観察表	(26)
付2 出土石器計測表	(30)

挿 図 目 次

- 第1図 大宮遺跡地区割図 (1:2000) (34)
第2図 第1～3次調査区遺構配置図 (1:200) (巻末折込)
第3図 S D001断面図 (1:40) (4)
第4図 S D001 1・2区遺物出土状態実測図 (1区:Ⅶ層相当層,
2区:Ⅷ層) (1:50) (5)
第5図 S K3007実測図 (1:30) (7)
第6図 S K3011実測図 (1:40) (8)
第7図 住居跡実測図 (1:50) (9)
第8図 S D001Ⅻ層出土土器実測図 (1:3) (35)
第9図 S D001Ⅻ(9～14), Ⅹ・Ⅺ(15～18)層出土土器実測図 (1:3) ... (36)
第10図 S D001Ⅸ・Ⅹ(19～22), Ⅺ(23～29)層出土土器実測図 (1:3) ... (37)
第11図 S D001Ⅷ層出土土器実測図 (1:3) (38)
第12図 S D001Ⅶ層出土土器実測図 (1) (1:3) (39)
第13図 S D001Ⅶ層出土土器実測図 (2) (1:3) (40)
第14図 S D001Ⅶ層出土土器実測図 (3) (1:3) (41)
第15図 S D001Ⅵ～Ⅶ層出土土器実測図 (1:3) (42)
第16図 S D001Ⅱ下～Ⅵ層出土土器実測図 (1) (1:3) (43)
第17図 S D001Ⅱ下～Ⅵ層出土土器実測図 (2) (1:3) (44)
第18図 S D001Ⅱ下～Ⅵ層出土土器実測図 (3) (95はⅦ層) (1:3) (45)
第19図 S D001Ⅱ下～Ⅵ層出土土器実測図 (4) (1:3) (46)
第20図 S D001Ⅱ下～Ⅵ層出土土器実測図 (5) (1:3) (47)
第21図 S D001Ⅱ下～Ⅵ層出土土器実測図 (6) (1:3) (48)
第22図 S D001Ⅲ(134～142), Ⅲ・Ⅳ上(143～148), Ⅳ下(149～153)
層出土土器実測図 (1:3) (49)
第23図 S D001Ⅱ下(154～156), Ⅱ上(158～167)層出土土器実測図
(157はⅦ層) (1:3) (50)
第24図 S D001Ⅱ上(168～170), Ⅰ・Ⅱ上(172～181)層出土土器,
S D001出土土製品(182～184)実測図 (170はⅢ層) (1:3) (51)

第25図	S D001 (185~192), S K3011 (193) 出土土器実測図 (1 : 3) ... (52)
第26図	S K3011 (194, 195), S K3007 (196~201), S X3004 (202), S X3007 (203~205) 出土土器実測図 (1 : 3) (53)
第27図	S K3007 (206, 207), S K3008 (208~210), S X3004 (212), S X3007 (211), 調査区 (213~215) 出土土器実測図 (1 : 3) ... (54)
第28図	調査区 (216~219), 住居跡内 (220~227) 出土土器実測図 (1 : 3) (55)
第29図	S D001, ピット出土土器実測図 (1 : 3) (18)
第30図	石器実測図 (1) (1 : 2) (56)
第31図	石器実測図 (2) (1 : 2) (57)
第32図	石器実測図 (3) (1 : 2) (58)
第33図	石器実測図 (4) (1 : 2) (59)
第34図	石器実測図 (5) (1 : 2) (60)
第35図	出土石鎌の重さと長さ・幅の比 (21)

図 版 目 次

- 図版 1 a 22区調査区全景（南より）
b 同上（北西より）
- 図版 2 上 S D001（東より）
中 S D001断面（C—C'）
下 同上（D—D'）
- 図版 3 a S D001, 1区遺物出土状態（VII層相当層）
b 同上 2区遺物出土状態（VII層）
- 図版 4 a S K3003（北より）
b S K3007（南より）
- 図版 5 a S K3011（北より）
b 住居跡（西より）
- 図版 6 S D001出土土器 (1)

- 図版7 S D001出土土器(2)
- 図版8 S D001出土土器(3)
- 図版9 S D001, SK3008(209)出土土器
- 図版10 S D001, SK3007(207)出土土器
- 図版11 S D001, SK3011(193)出土土器
- 図版12 S D001出土土器
- 図版13 a S D001出土土器(底部)
b 同上(段, 削出突帯, 貼付突帯)
- 図版14 a S D001出土土器(削出突帯)
b 同上(貼付突帯)
- 図版15 a S D001出土土器(貼付突帯)
b 同上(沈線)
- 図版16 a S D001出土土器(沈線, その他)
b 同上(無文, 段)
- 図版17 a S D001出土土器(削出突帯, 沈線)
b 同上(沈線, 貼付突帯, 植描文)
- 図版18 a S D001出土土器, 土製品
b 調査区出土土器
- 図版19 a 調査区出土土器
b 住居跡出土土器
- 図版20 弥生土器の文様(1)
- 図版21 弥生土器の文様(2)
- 図版22 弥生土器の文様(3)
- 図版23 弥生土器の文様(4)と調整
- 図版24 a S D001出土石鏃
b 同上
- 図版25 a 調査区出土石鏃
b 同上出土石鏃, 石錐
- 図版26 a 住居跡出土勾玉, 調査区出土不整形石器

- b 調査区出土不整形石器
- 図版27 a 調査区出土石庖丁
- b 同上
- 図版28 a 調査区出土石斧
- b 同上

図 表 目 次

第1表 S D001 出土土器 層位・文様別一覧表	(16)
第2表 S D001 出土土器 層位別ヘラ描沈線条数表	(17)
第3表 22区出土石鎌・型式別一覧表	(20)

例 言

- 1 本書は、昭和54年度の国庫補助金を得て広島県教育委員会が行った大宮遺跡（広島県深安郡神辺町湯野）の第3次発掘調査概報である。
- 2 本概報の執筆は、I, II, III-1, 3, IVを中田 昭が、III-2を桑田俊明が担当し、中田が編集した。
- 3 出土遺物の整理は、中田、桑田が中心となって行い、遺物の実測・製図は執筆者の他、桧垣栄次、向田裕始、桑原隆博が行い、写真撮影は中田が担当した。
- 4 出土石器の石材同定にあたっては、県教育委員会指導課福原悦満氏から御教示を得た。
- 5 本概報に使用した遺構表示記号は、溝をS D、土塙をS K、ピットをS P、その他をS Xとした。

I はじめに

大宮遺跡のある大宮地区一帯は、かなり以前から弥生土器が出土しているが、昭和48年この地域に土地区画整理事業が計画され、周辺一帯で大規模な街路工事が進行する中で新たな遺構や遺物の発見が相ついだ。そのため広島県教育委員会では、昭和52年度から国庫補助金を得て、遺跡の規模、内容を把握し保存対策を講ずるため年次的に発掘調査を実施しているもので、今年度が第3次調査にあたる。

昭和52年度の発掘調査は、草戸千軒町遺跡調査研究所が担当し、13~15、27の各区において実施した。しかし27区以外の他の区では遺構は検出されなかった。27区からはS D001・002の大溝2本の他、多數の土塙やピットなどが検出された。S D001は、幅1.9~2.3m、深さ0.9~1.1mを測り弧状をなすことから、環濠の可能性が考えられた。S D001溝内からは多量の弥生土器や石器などが検出され、特に弥生土器は層位的に把握されたことから、この地域の土器型式編年の基準資料となるものであった。S D002は、S D001の外側に存し、幅3.5m、深さ1.5mを測るもので、より規模の大きな環濠と考えられた。溝内からは弥生前期から中期にかけての土器、石器などが検出された。これらのことにより、環濠は時期が新しくなると共に外側に拡大していくと推定された。

昭和53年度の調査は、27区に隣接する24区の調査を行い、両溝の北側の状態を明らかにすることを主目的とした。S D001については、調査区の北端で幅が狭まり浅くなり、遺物の量も比較的少なくなった。また、西方に折れ曲ることから環濠は長円形を呈するものと考えられた。S D002は、幅1.8~2.2m、深さ0.9~1.2mを測るもので、北端部ではS D001から離れる傾向であった。また、溝内に砂層が堆積していたことから流水があったものと思われ、深水川の旧河床の可能性が考えられた。さらに、奈良時代中葉に比定される須恵器の入った土塙や礫の入ったピットをもつ建物跡の存在などから、備後國府跡との関係を考慮する必要がでてきた。

以上のようなことから、今回の発掘調査はS D001の西側の状態を把握することを主目的にして、22区の南半を調査地とした。

発掘調査は、広島県教育委員会文化課が実施し、福山市教育委員会上田靖士氏、広

島県草戸千軒町遺跡調査研究所の協力を得た。また調査の実施にあたって、神辺町教育委員会、神辺町、土地所有者の神原コトメ氏、柏木順子氏、福田寿美子氏をはじめ、地元の方々から多大の協力を得ることができた。記して感謝の意を表するものである。

発掘調査日誌抄

4月10日（火）～4月23日（月）

22区の調査区の南側部分より耕作土の拂土を行い遺構の検出を行う。

4月24日（火）

遺構検出状態の写真撮影を行う。SD001を掘り始める。約4.5m毎に幅50cmの畔を残し、西側より1～4区とした。

4月25日（水）

1、2区についてⅠ、Ⅱ上層と考えられる部分を掘り下げる。2区の西端部分を土層観察のため、幅50cmで深く掘り下げる。東半部分だけ遺構面全体が更に約30cmぐらい削平されているようなので、掘り下げを開始する。

4月26日（木）

東半部分の耕作土の拂土を繼續する。

4月27日（金）

1、2区の石礫の出土状態の写真撮影と実測を行う。

5月8日（火）

3、4区について土層観察のため一部深く掘り下げる。3、4区ではⅠ層がみられない。

SD001南の土塙、ピット群を掘る。

5月9日（水）

1、2区のⅠ、Ⅱ上層の遺物出土状態の写真撮影を行い、実測する。3、4区の掘り下げを開始する。

SD001北の土塙、ピット群を掘る。

5月10日（木）～5月14日（月）

1～4区について、分層による拂土を行いつつ遺物出土状態の部分的な写真撮影を行う。

5月15日（火）

1、2、4区のⅣ層と思われるところより、土器の完形品が多く出土しているので、写真撮影と実測を行う。

1～4区の遺構全面をⅢ層上面まで掘り下げる。

5月16日（水）

1、2、4区の遺物出土状態の実測を繼續する。住居跡の拂土にかかる。

住居跡周辺と、北東部分の土塙、ピット群を掘る。

5月17日（木）

3、4区について、底面の土器や木器の出土状態の写真撮影と実測を行いつつ、溝底の掘り下げを行う。住居跡の断面の実測を行う。

北西部の土塙、ピット群を掘る。

5月18日（金）

溝内ほぼ底面まで掘り下げ、断面の清掃を行う。住居跡内のピットを掘る。

5月19日（木）

遺構の部分的な写真と全体の写真撮影を行う。

5月22日（火）

溝の断面写真と実測にかかる。

遺構全体に造り方を組む。

5月23日（水）～5月24日（木）

遺構の実測を行う。

5月25日（金）

遺構実測の完了した部分より埋め戻しにかかる。溝底面を清掃し、ピット等の遺構精査を行う。1区より土縛出土する。

5月26日（土）

現地説明会を行う。

5月28日（月）～6月2日（土）

埋め戻し作業を行う。

I 遺構

遺構は、厚さ約20cmの耕作土下の黄褐色粘質土層上面で検出されたが、調査区の東半は西半に比べ大きく削平を受けていたので、遺構の残りが悪く、西半部分に集中している。遺構は、大溝、小溝、土塙、ピット、住居跡などが検出された。大半は弥生時代のものと思われるが、土塙やピットの中に縄文土器や土師器、須恵器を含んでいるものがあり、また住居跡については古墳時代の遺物を出土しているので、遺物の出土していない土塙やピットの中にも、弥生時代以外のものが含まれている可能性がある。以下主な遺構について説明したい。

1 溝

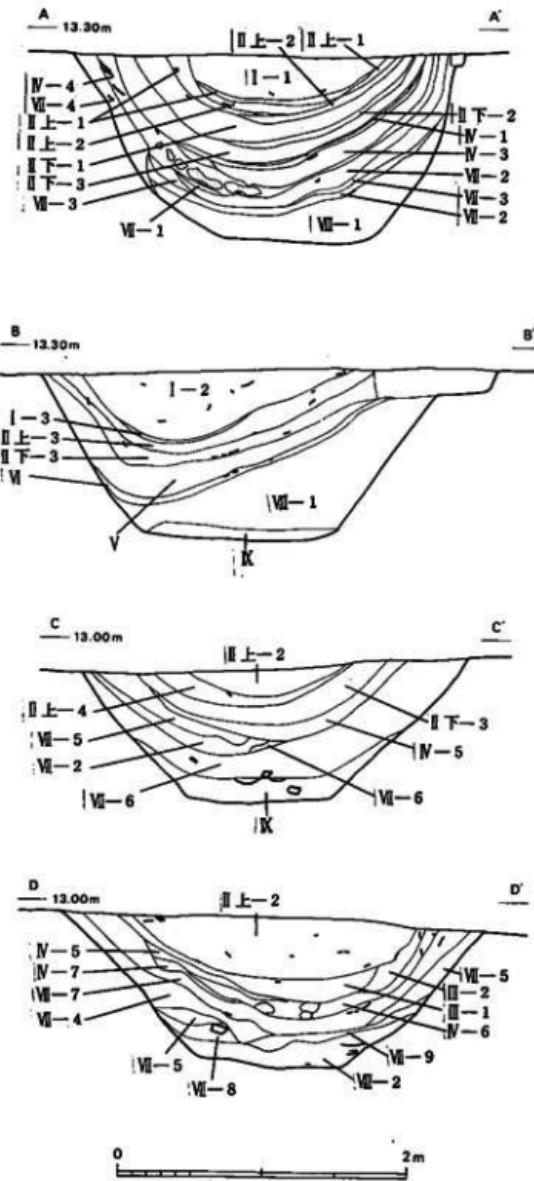
S D 001 溝は昭和51年の22区西端の街路側溝工事の時の試掘調査により、溝状の落ち込みが検出されていたので、昭和52年調査時の西端部に続く形で東西に検出されると予想されていた。発掘の結果、当初の予想どおり南にゆるく湾曲して東西に検出された。

溝の規模は、遺構面の高さが違うため、東半部では幅2.5~2.6m、深さ0.9~1.0m 西半部では幅2.9~3.0m、深さ1.2~1.3mを測り、西半部の方が大きくなっている。

底は平坦面をなし、若干の凹凸はあるがほぼ一定した幅(1.0~1.5m)で、溝底のレベルもほぼ一定している。壁面の傾斜は両壁とも60°前後の直線的な急傾斜である。溝底には調査時において常時深さ約30cmの湧水があった。

溝内の充満土については、調査区内を5m毎に断面観察用の畔を残して掘り下げ、西から1~4区とした。溝内の堆積は全区一様でなく、部分的に含まない層もみられた。今回は、過去において上層とされる暗褐色土を基調とした層が、細分される可能性があると考えられていることから、細かく分層し、結局全体として9層に分層した。全体的に層はレンズ状に堆積している。以下全区を通してみた各層の基準土を説明しておきたい。

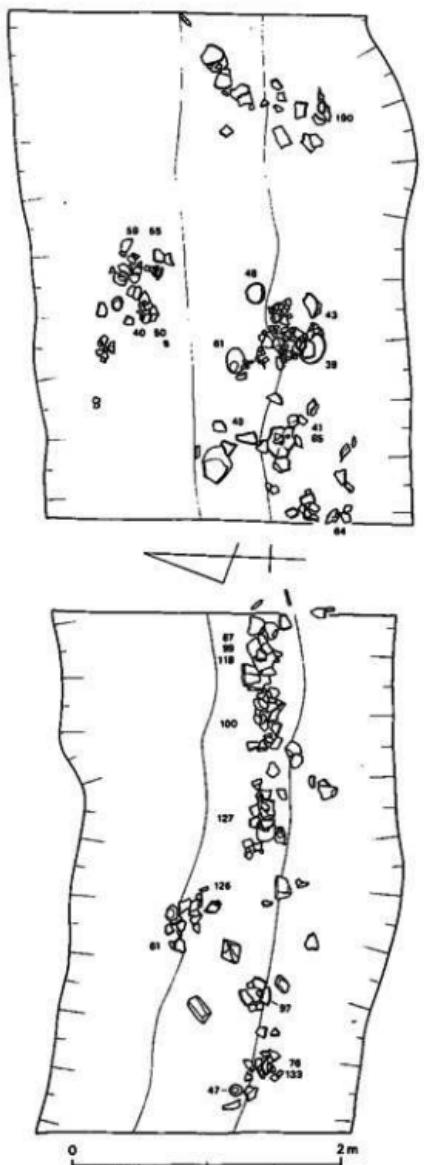
1層は、調査区の遺構面が西半部分に比べ、東半部分が更に深く削平されていたので、1、2区では検出されたが、3、4区ではみられなかった。暗灰褐色土を基調と



土層説明

- I-1 暗褐色土…赤味を含む燒土
小塊多く含む。炭含む。土器片多し。
- I-2 暗灰褐色土…黒味強し、黃色土のブロック入る。燒土塊含む。土器・石器・炭含む。
- I-3 淡黒褐色土…粗い砂含む。
炭・燒土塊・土器含む。
- II上-1 黄色土…暗褐色土粒・燒土小塊含む。遺物・炭なし。
- II上-2 暗灰褐色土…I-2に同じ。
- II上-3 暗褐色土…上層より黄味が強い。
- II上-4 淡黒褐色土…I-3に同じ。
- II下-1 暗褐色土…I-1に類似するが赤味がある。
- II下-2 小円錐層
- II下-3 暗褐色土…II-1と類似するが黄味が強い。
- III-1 黄色土…砂質若干あり。
灰・燒土塊・土器含む。
- III-2 黄色土粒混入暗褐色土層…
炭・燒土塊を含む。
- IV-1 黒色泥層
- IV-2 黄灰色土層・暗褐色土・黃色土
- IV-3 暗褐色土…黒味強く炭・燒土小塊含む。
- IV-4 黑色土(炭屑)…かなり大きな焼土塊が混入。
- IV-5 黄色土混入暗褐色土…灰色土と暗褐色土混入。燒土小塊。炭を含む。
- IV-6 黑色土…炭多く含む。燒土塊・灰混入、黄色土ブロックを含む。
- IV-7 灰色土…炭・燒土塊・小石含む。
- V 黄灰色土…硬質。炭・燒土・土器はほとんど含まず。
- VI 黑褐色土…炭堆積
- VI-1 黄色土…Vと同じ。
- VI-2 黄色土混入灰色粘土…炭は多く含む。燒土塊は含まず。
- VI-3 黄灰色土…硬質。土器・燒土・炭含まず。
- VI-4 黄褐色土…炭若干含む。
- VI-5 明黄色土…地山土に近く硬質。燒土塊・炭含まず。
- VI-6 黑褐色土…炭・燒土含む。
- VI-7 灰色粘土…黄色土・暗褐色土粒少し含む。燒土塊・炭含む。
- VI-8 黄灰色土…角礫・炭含む。
- VI-9 暗灰褐色土…炭含む。燒土塊なし。
- VI-1 黄褐色土
- VI-2 黄灰色粘質土…炭含む。
- K 灰色粘土…炭含む。

第3図 SD001 断面図 (1:40)



第4図 SD001 1・2区遺物出土状態実測図
(1区:Ⅶ層相当層, 2区:Ⅷ層) (1:50)

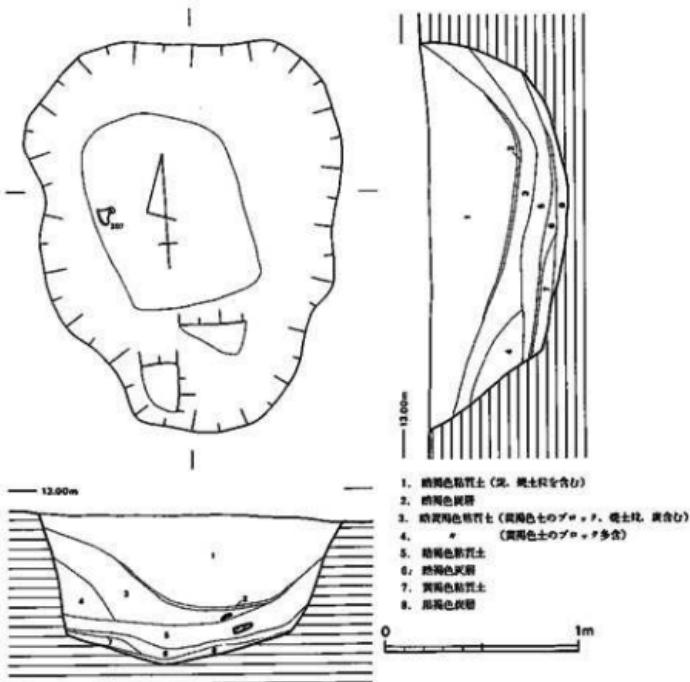
する。Ⅱ層は、暗褐色土を基調とし、下層の方は黃褐色土が混入しているので総じて黃色味が強い。Ⅲ層は、黃色土を基調とし、地山土に近い。この層は、4区の東半分で、検出されたもので、他の区ではみられなかった。Ⅳ層は、淡黒褐色土を基調とし、Ⅱ層に比べて黒味が強く、炭や焼土塊も多く含み、区によっては焼土塊の大きなものを含んでいる。Ⅴ層は、黃色土を基調とし、非常に硬質で地山土に近く、土器はほとんど含まない。この層は、2区の東半部分と3区では西壁寄りが厚く、東半部分で切れてなくなつており、他の区では検出されていない。VI層は、黒褐色土を基調とし、V層が検出される下層部分にあるものである。炭が多い。VII層はV層とVI層が複雑に混り合った層のため各区で同一色でない。黃色土が強いところでは黃灰色土となり、黒褐色土が強いところでは暗褐色土となるようである。VIII層は、黃褐色土を基調とし、炭や焼土はほとんど含まない。下層の粘質土が加わっている部分もある。IX層は灰土で粘質である。以上のうちI

～VII層は炭や焼土塊が多く含まれており、炭が薄く層をなしている部分もみられた。出土遺物はI～VII層に多くVII、IX層は少ない。VII層出土遺物は割とまとまりをもった完形品が多く、南壁から底面にかけての斜面に多くの出土をみる。他の層出土のものが部と細片が多いのに比べて特異であり、遺物の廃棄のされ方からみると、環濠の内部から投げ捨てられたような感が強い。その後の堆積は細片が多く自然的な堆積の仕方を呈している。VII層は、遺物をあまり含まないことや、黄褐色土の地山土に近く、炭や焼土をほとんど含まない点から、過去の調査で言われているように、人為的に、しかも一度に埋められたと思われる。層の状態をみると、環濠の内側にあたる北壁部分に厚く南壁は薄い。このことから考えるならば、この土は環濠の内側からの流れ込みを強く感じさせ、環濠の内側に土壘状のものがあった可能性が考えられる。IX層には自然木がみられた。また小形の片口壺が3区より出土している。形が特異で完形品であり、溝底から出土していることなどから、溝に対する何らかの祭祀的な遺物とも考えられる。

2 土塙、ピット群など

検出したピットは170、土塙11、小溝8である。これらの内部から出土する土器はほとんどが弥生時代のものであるが、少數であるが縄文土器を出土するもの（S P 3132）、須恵器を出土するもの（SK 3003、S P 3021、S P 3042、S P 3055、S P 3120、S P 3149、S P 3153、S P 3157）がある。弥生時代のものには、前期と中期のものがあり、中期の土器を出土するものは（SK 3007、SX 3004、SX 3007、S P 3018、S P 3128）がある。遺構全面が削平を受けているので、ほとんどが深さが浅い。以下主なものについて説明したい。

SK 3003 調査区の中央に位置する遺構で、西半は浅く掘り込まれ、東半に中心部をもつ、東西1.7m、南北1.2mの土塙である。西半の深い部分は深さ0.3mであるが、中心部は約2m掘ったにもかかわらず底面を検出することができなかった。掘り込みは約0.9mまでは約50°の傾斜をもち、以下ほぼ垂直に掘り込まれている。内部の径は約0.7mである。約1.3mの深さで湧水が激しく吹き上げており、井戸とも考えられる。内部の充填土は、上約0.4mは暗褐色土であるが、下層になるにつれて粘質が強くなる灰褐色土を呈する。出土遺物は上部の暗褐色土から、ヘラ描沈線、貼付突帯をもつ

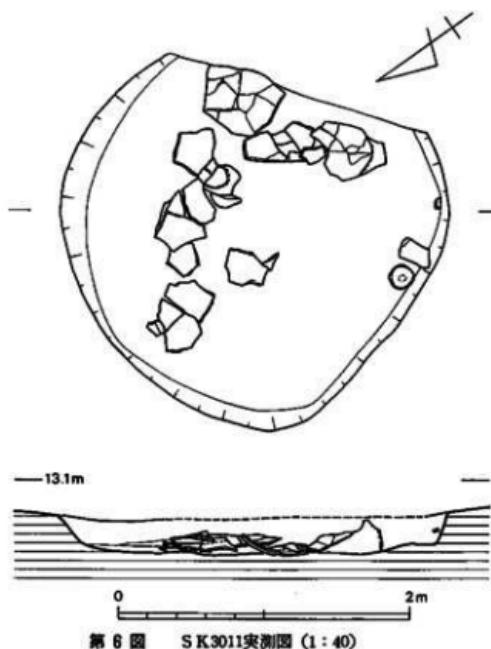


弥生前期土器、粘土塊、石錐、安山岩片、須恵器が出土している。

SK 3007 南北 2m 、東西 1.6m の長円形を呈する土塙で、深さは 0.7m である。最下層に黒色の炭の層が堆積しており、上部に部分的ではあるが、黄褐色土が間層をはさんで二層あり、この堆積の仕方は、SD 001 の堆積の仕方と対応したところがみられ、溝の廃棄と同時に使用機能が停止したものであろう。内部からは、ほとんど上部の1～3層より弥生前期～中期前半の土器、安山岩片が出土している。

SK 3011 南端が若干側溝工事により削られているが、径 1.3m のはぼ円形の土塙で深さは 0.1m と非常に浅い。充满土は暗褐色土であり、塙底に張りついた形で、ほぼ完形の前期の壺、甕が出土した。

S X 3003 長さ 2.8m 、幅 0.6m 、深さ 0.75m の深くて幅の狭い小さな溝状遺構で、最下部からは黒色の炭層が検出され、上部からは黒褐色の地山ブロック土を点々と含



第6図 SK3011実測図(1:40)

み炭が点在する暗褐色土が充満していた。内部からはヘラ描沈線文の壺、貼付突帯の壺の他、火を受けて灰白色となった獸骨片が出土している。

S X3007 幅1.2~1.3m、深さ0.15mの断面U字状の溝状造構で、長さは東側が切断されているが、現長で約5mを測る。暗褐色の充満土からは弥生前期の土器の他、中期の土器が出土している。

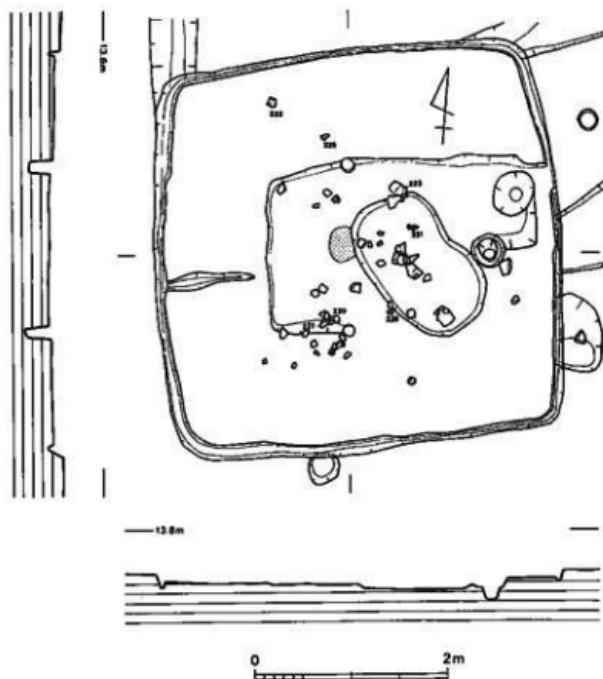
以上述べてきたが、性格の判明しているものは少ない。土塙は深めのものと浅めのものがあ

り、前者については貯蔵用のものが考えられる。後者については多目的があろうが、獸骨片などが出土するものから廐棄用の穴も含まれよう。小溝については、基本的に南北方向と東西方向のものがあり、何らかの方向性がみられ領域や区画の意味が含まれないであろうか。ピットについては柱穴と考えられるものがあるが、柱穴については建物になるような有機的関係はみつけることができなかつた。しかし先の小溝との関係を考慮して検討する必要があるように思われる。

3 住居跡

平面形は一辺4.25mを測る方形を呈する。壁溝は一周しており幅6~16cmで、深さは3~5cmと非常に浅く西辺部分が若干深い。西壁溝のはば中央から東に向って延びる床溝がある。幅8~17cm、深さ2~4cm、長さ90cmを測る。柱穴は南北方向に2個検出され径12~14cm、深さ24~28cmで柱間は1.7mを測る。床面の中央から東寄りに長辺1.6m、短辺0.9m、深さ7~13cmの方形状の土塙がある。その東には径35cm、深

さ15cmと、径45×50cm、深さ21cmのピットがあるが、弥生時代のものとも考えられ住居跡に伴なうかどうかは不明である。柱穴の周囲にはベット状遺構がみられ、南東部分が開いているが、ほぼ全局を巡る。高さは約6cmである。住居跡の中央部分には赤く焼けたところがみられた。住居跡の掘り込みの深さは、遺構面から床面まで10cm内外と非常に浅く、遺構面が削平されたことを考えると、少なくとも遺構面はもう30cmぐらいは高かったものと思われる。住居跡内からは、床面に密着した形で土師器が出土したが、弥生土器や石鎌も混在しており、住居跡が埋没していく過程で、混入していったものと考えられる。また掘り方上面より勾玉1が出土している。



第7図 住居跡実測図 (1:50)

III 遺 物

1 土 器

土器は縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器を出土したが、ほとんどが弥生土器で、特に SD001 から多量に出土した。土師器、須恵器は少片で磨滅したものが多く原形を知れるものはない。

(1) SD001出土土器

過去の調査において、上層とされる土層は細分の可能性があると言われてきているので、今回は細かく分層することによって、形態や文様、調整などの変化を時期的に辿ってみた。各層出土の土器は、区によつては同一的な層序でとらえられないこともあり、画一的にとらえられることもある。従つてここでは、各器種別にみていくことによって、もう少し細かく時期的な変化や特徴をみてみた。出土土器は整理箱で約75箱もあり、個体数にして650～700個体と推定される。器種は壺、甕、鉢、蓋がある。

壺形土器

口縁部の形は口縁の広がりが大きいものと小さいものとがあり、中には頸部で屈曲して折れ曲るもの(6, 20)がみられる。頸部は短頸のものと長頸のものとがある。胴部の形は扁平なものと長胴のもの、球形に近いものがみられる。全体の器形については完形品が少ないので明示することは難しいが、数点の完形品から、扁平で肩が張るものや長胴のものは口縁が小さく、球形のものは口縁が大きく広いものが多くなるようである。なお長頸のものは球形の胴につくようである(24)。層位的には完形品が各層にみられないで明らかでないが、最下のⅦ、Ⅸ層から全ての形態がそろっている。上層にいくにつれて口縁が大きく開くようで、球形のものが多くなる。

成形は粘土円板を底部とし、その上に粘土紐を重ねて成形しており、ほとんどが平底であるが、高台状につくるものもみられる(191)。また焼成後に穿った円孔をもつもの(189)や底部にヘラで×印をしたもの(187)がある。平底の中には中央が若干凹んだものがみられるが、これは粘土円板の上に粘土紐を重ね、外部の合せ目に粘土を足して押えてくっつけるため、凹んだものと思われる。

調整は外面は横方向のヘラ磨きが多く、まれに縦方向のヘラ磨きがみられる。底部近くは縦方向となり、底部もヘラ磨きを加えるものもみられる。内面は横方向のヘラ磨きであるが、全面にわたるものと部分的なものとがある。上層にいくに従って部分的な磨きとなるよう、肩部以下を省略するものが多い。まれに頭部あるいは肩部上半を縦方向に磨いている。大きな製品については間をぬかして縦に磨くものが多い。口縁部に横ナデを加えるものは、最下層のⅧ、Ⅸ層より含まれている。

土器は砂粒を多く含んでいるが、ヘラ磨きにより内部に沈んで目立たない。色調は赤褐色、暗褐色のものが多い。

文様については昨年度報告の分類に従い、頭部と肩部、胴部の施文方法から、(A)無文のもの (B)段をもつもの (C)削出突帯をもつもの (D)貼付突帯をもつもの (E)ヘラ描沈線をもつもの (F)櫛描文をもつものに分類した。

更にこれらは、(1)それのみのもの、(2)ヘラ描沈線と組合うもの、(3)その他の文様が加わるもの(刻目は除く)の3つに細別して検討した。(以下B-1、B-2、B-3というように表現する。)

(A) 無文のもの

今回は出土していない。

(B) 段をもつもの

B-1(134)とB-2(15, 32, 47, 73, 74, 80, 95)があるが、前者は1点のみで非常に少ない。施文場所については頭につくものと肩あるいは肩部につくものの2種類があるが、前者では上方を削るもの(80)と下方を削るもの(73, 74, 95)があり、後者では上方を削り段としている。B-2では、まず沈線を入れその内の最上線あるいは最下線を板状工具のようなもので、上方あるいは下方に削り段としている。このB-2の土器は前回の報告で指摘されているとおり、段のついていない反対側の沈線を更に削り取れば、C-2に移行する形となり、C-2に近いものであり新しい要素といえる。段手法の土器はほとんどの層から出土しているが、B-2が大半をしめている点に特徴がある。なおB-2の土器は前回の報告では、すべて上方を削り段とするとされているが、今回下方を削るものも出土している。

(C) 削出突帯をもつもの

C-2が大半をしめ、つぎにC-1が、そしてC-3は1点のみである。削出突帯

は、まず沈線を引きその上下を板状工具のようなもので上下に削り取り突帯をつくるものである。C-1には幅の狭い突帯(1, 19)と幅の広い突帯(28, 82, 150, 155)があり、前者は頸、後者は頸と肩とに施文がみられる。後者の幅の広い突帯は、突帯の中に沈線を入れればC-2に移行するのであり、C-2に近い要素をもっている。C-2については、頸に施文するもの(18, 24, 38, 39, 67, 75, 76, 79, 87, 158, 165)と肩に施文するもの(7, 16, 17, 29, 42, 46, 78, 83)とがある。突帯内の沈線の数は、1~3条のものがほとんどで、それ以上のものは4条が2区VII層で2点出土している(38)。43は肩部に削出突帯を施し、頸部に沈線1条を施すもので、削出突帯と沈線を併用するものである。C-3は2点出土した。44は頸部に削出突帯を施し、突帯の中にヘラ描沈線1条と綾の刻目を入れ、肩部にヘラ描沈線とヘラ刻目を施すものである。45は肩部に突帯をつくり、その中にヘラで斜格子文を入れているものである。削出突帯の手法はC-1にあっては幅広のものは上の層に多く、C-3も比較的上の層に多いようである。C-2の沈線の数は上層にいくに従って条数が多いということはいえず、下層でも条数が多いものがあり、ほとんどは1~3条を中心としている。

(D) 貼付突帯をもつもの

貼付突帯は、まず突帯を施す場所にヘラ描沈線を引き、その上に突帯を貼付けており、突帯が剥落した部分に沈線が窺われるものがある。これは突帯を付ける場所を決めるのと、突帯を付けやすくするためと思われる。D-1は頸部と胴部に施されている。突帯上には刻目をもつものと、そうでないものがあり、刻目はヘラによるものが多いが、手指あるいは棒状工具のようなもの(143)もみられる。突帯は、それぞれを単独に離して貼付けるものが多いが、中には連続させているものもみられ、幅広い粘土帯を貼付け、その中を分けて突帯を多くつくるものがある。69, 70, 152は中をヘラ状工具のようなもので分け、突帯を2本重ねるものである。140, 163は手指あるいは棒状工具と思われる押えによって分けて突帯をつくるものである。突帯の数は1, 2本が多いが、新しくなると3本以上の突帯が出てくるようであり、また刻目や突帯も大きなものが増えてくる。D-2は貼付突帯の上方に沈線を入れるもの(68, 151, 160)と下方に入れるもの(154)がある。これらはいずれも上の層に多く新しい要素と思われる。この他口縁部内面に貼付突帯を施すもの(106, 165, 175)、胴部に施す

もの（49, 50）がある。

(E) ヘラ描沈線をもつもの

ヘラ描沈線は頭と肩あるいは胴部に施文されているが、2帯にわたってつけられているものがある（34, 40, 92, 161）。これらの土器は頭部につくものは頭が長い器形となり、胴部につくものは大形品である。また同一個体で帶ごとに沈線の条数が異なるものもある（34, 40, 41, 92）。40と95は沈線を引く場合一筆によって描いている。沈線の数は1～7条以上まであるが、大半は2～4条のものが多く各層でもそれぞれ中心をなしている。特に5, 6条の多条のものが上層になるに従って増えているのは注目される。E-3は頭部では、ヘラ描沈線を引きその間に縦のヘラ刻みを入れるもの（4, 5, 135, 149）、竹管あるいは棒状工具により刺突を加えるもの（6, 20, 91）がある。胴部では、沈線間に刺突を加えるもの（94, 174, 178）や、沈線間に山形文を入れるもの（141）、沈線下に継沈線を入れるもの（97）などがある。頭部につく文様は下から上の層までみられるが、胴部の文様については上の層に多く、新しい要素といえそうである。

以上の外に、口縁部に文様をもつものがある。口縁端部にヘラ描沈線を入れるもの（25, 153）、刺突を入れるもの（105, 186）、沈線と継沈線を入れるもの（106）、斜格子文を入れるもの（108, 173）がある。口縁端部は上の層になるにつれてヘラで押え角ばさせており、後には肥厚気味につくっているようで、これらの文様が入る土器は新しい要素といえ、中期の口縁部肥厚につながっていくものと思われる。

彫形土器

口縁部の形は、くの字状に外反するものと、逆L字状に大きく屈曲するもの（36, 119, 176）、逆L字状に屈曲して上部に平坦面をつくるもの（10, 180, 181）（これは直口の口縁部の外方に粘土帯を張りつけて製作している。）がみられるが、大半はくの字状に外反するものであり、逆L字状に屈曲して上部に平坦面をつくるものは、中期のものに多くみられ、新しい要素と考えられる。13は内溝気味の口縁部の外方に貼付突帯を附加する特異なものである。

全体の器形は、口縁部の径が胴部の径より小さいか、ほとんど同じものが多く、胴部の張るものでもやや大きい程度で、倒鐘形を呈する。構造文をもち逆L字状口縁を

もつものは、胸部がまったく張らない器形がみられる（181）。

成形は壺形土器と同じで粘土円板に粘土紐を重ねていく手法をとる。底部は平底がほとんどであるが、高台状につくるもの（190）もみられ、焼成後穿孔のあるもの（58, 192）もある。

調整については、ナデや觸毛目を施したものが多い。ヘラ磨きのもの（35, 123, 145）もあるが数は少ない。層位的には、上の層に觸毛目のものが多く目立つようである。口縁部には横ナデを加えたものが多く、VII, IX層に含まれている。外面は二次的に火を受けたものが多く、完形品から観察すると、胸部と口縁部付近が暗褐色から黒褐色に変異し、底部付近5～10cmぐらいが変異していない。このことは炉内に窯を5～10cmぐらい埋め込んで立て、まわりから火を使用したものと推定されよう。文様については壺形土器と同じく分類した。

(A) 無文のもの

無文の土器はほぼ全層から出土しているが、口縁端部に刻目をもつもの（53, 145）ともたないもの（54, 71, 128, 167）がある。

(B) 段をもつもの

B-1は、頸部に下側を削り段としているものである（51, 137）。B-2は頸部にヘラ描沈線を引き、最上線を板状工具で削り段とするもの（146）と、最下線を削り段とするもの（119）がみられる。個体数が少ないので不明だが、沈線は2あるいは3条である。

(C) 削出突帯をもつもの

C-1は検出されていない。C-2はヘラ描沈線を数条引き、その最上下線を板状工具で削り、突帯をつくるものである（71, 130, 168）。突帯内の条線の数は1～2条が大半で多条のものはない。C-3は2点出土しているが、いずれも削出突帯下に山形のヘラ描沈線を施すものである（9）。

(D) 貼付突帯をもつもの

13は内湾気味の口縁部の外方に貼付突帯と沈線を入れる特異な形を呈するものである。鉢とみるべきかもしれないが、外面にスヌが付着しているので窯としておいた。

(E) ヘラ描沈線をもつもの

沈線の数は、壺形土器と同様に1～6条まであるが、2～4条のものが大半で各層でも中心をなしており、5～6条のものは上の層になって出てくるようである。E-3は沈線の間に棒状工具により刺突を加えるもの(12, 123, 176)と、沈線の下に数条の山形文を施すもの(120～122, 125)、沈線の下に縦沈線を入れるもの(124)がみられた。

(F) 横描文をもつもの

いざれも横により平行沈線文を描くもので、166, 181はその下に三角形の刺突を加えるものである。また口縁部は外面に断面三角形の粘土帯を張りつけた逆L字状口縁をもつものである(180, 181)。

鉢形土器

全体の器形を知れるものが少ないが、(1)口縁部が外方へくの字状に外反するもの(14, 63), (2)口縁部が直口するもの(37, 139, 142, 177, 179), (3)ミニチュアのもの(112～115)がある。

58は口縁部が外反し器高の低い特異なものである。成形は完形のものが少ないので不明の点が多いが、(1)では粘土円板の上に粘土紐を積み上げていくものである。(8)は手づくねである。調整は(1), (2)では内外面ともヘラ磨きのものが多い。文様は(1), (2)では頸部あるいは胴部にヘラ描沈線文や口縁端部に刻目をもつものがある。114, 115の土器には内部に丹痕を残すものがあり、何か祭祀的なものに使用された可能性が考えられよう。

壺用蓋形土器

円板形のもの(110)と笠形のもの(62, 109, 148)があるが、つまみをもつものである。天井部に1個の中心孔をもつもの(110, 148)がある。109は外面に竹管の刺突を施した特異なものである。

壺用蓋形土器(61, 132, 133)

笠形のもので、つまみ部は壺の底部に近い形状を呈す。頸部のところはつかみやすいように底径より若干小さく凹んでいる。口縁部にかけては外反りになり、口縁部は

水平に近くなる。内外面ともヘラ磨きを施している。

以上述べてきたが、Ⅰ、Ⅱ上層より出土しているもののうち、172は口縁部が若干肥厚しており、166、180、181は櫛描文を使用している点で中期前半のものと考えられる。それ以外は全て前期に属するものである。各層から出土している土器は、その前後の層出土のものと極端に変化していないものであり、過去の調査で指摘されているとおり、各層は漸移的で連続して堆積していったことが窺われる。

最下層のⅨ、Ⅹ層から出土する土器には、段をもつもの(B)、削出突帯をもつもの(C)、貼付突帯をもつもの(D)、ヘラ描沈線をもつもの(E)などが出土している。その中でもEが最も多く、Cがそれにつぎ、B、Dは少數である。Bは前述したようにCに近い要素を含んでいるものであり、これは上の層の新しい時期まで残っていく。Eの土器は沈線の条数が2~4条のものが大半をしめるが、1、2条の少条のものが中心ではな

第1表 SD001出土土器 層位・文様別一覧表

Ⅰ(対象数: 344個体)

区 域	型式 層	無文		段	削出 突帯	貼付 突帯	沈線	櫛描文
		A	B					
		1	3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1	3
1区	I・Ⅱ上					13	4	
	Ⅱ下~Ⅸ		7	1 2	4	17	28	3
	Ⅸ					1		
2区	I・Ⅱ上				6	15 1	9 2	
	Ⅱ下	3	3		8 2	14	2	
	Ⅸ	1	2	1	11 3	11		
	Ⅹ	2	3 2	1	9	9		
	Ⅺ	1		3	3			
3区	Ⅱ上			1	2	1	2	
	Ⅱ下・Ⅸ・Ⅺ	1	1 3	7	4	10		
	Ⅸ			4	2	2		
	Ⅺ			1				
	Ⅺ・K			1 4		3	5	
	K			1 2			4 3	
4区	Ⅱ上			1	1	1	3	
	Ⅱ上~Ⅲ			2 1		1	4	
	Ⅲ	1			1	16	3	
	Ⅸ・Ⅺ			1		2	2	
	Ⅸ			1		2		
	Ⅺ			1 2		3	10	
	Ⅺ・K	1	2 1			7	1	
	K					2		

Ⅱ(対象数: 284個体)

区 域	型式 層	無文		段	削出 突帯	貼付 突帯	沈線	櫛描文
		A	B					
		1	3	1 2 3	1 2 3	1 2 3	1	3
1区	I・Ⅱ上	10						2
	Ⅱ下~Ⅸ	12				1		32 6
	Ⅸ	1						3
2区	I・Ⅱ上	2		1	1	1		12 1 1 2
	Ⅱ下	5			3			17
	Ⅸ	4			1			23
	Ⅺ	3			1			11
	Ⅺ	1			2			7
3区	Ⅱ上	1						13
	Ⅱ下・Ⅸ・Ⅺ	2		1				27
	Ⅸ	1		1				6
	Ⅺ	1						
	Ⅺ・K					1	3	
	K					1	5	1
4区	Ⅱ上	1						6
	Ⅱ上~Ⅲ	2		1				10
	Ⅲ				1			11
	Ⅸ・Ⅺ	1				1		6
	Ⅸ				1			4
	Ⅺ				1			5
	Ⅺ・K	1			1			1
	K					1		

い。この1, 2条の少条のものも上の層の新しい時期までみられる。従って最下層のⅦ, Ⅸ層の土器は、E, Cを中心に少數のDが加わっているといえる。しかもEも最も古いものではない。このように考えると時期的には中段階後半頃と考えられよう。

最上層のⅠ, Ⅱ上層では、C, D, Eの土器が出土しているが、E, Dを中心をしめ、Cが若干加わる。Eの沈線の条数は3~5条が中心であり、6, 7条のものも少數含まれているが、8~10条の多条のものはみられなかった。このようにみるとⅠ, Ⅱ上層は新段階中葉頃とみられる。以上のように溝内出土土器は中段階後半~新段階中葉にかけて堆積していったもので、最上部に中期前半のものが加わったといえよう。

なお、以上の弥生土器の他、縄文土器が数点出土している。

228は、外反する口縁部の外面に刻目をつけた貼付突帯をもつものである。内外とも磨滅しているが、突帯付近に横ナデが窺われる。赤褐色を呈し焼成は良好。砂粒を多く含む。外反が大きく赤褐色を呈することから弥生前期のものかもしれない。この種の土器は大官では初出土である。2区Ⅶ層出土。229は、屈曲する胴部をもち内外

第2表 SD001出土土器 層位別ヘラ描沈線条数表 (○印は現状条数。備考は2帯のもの。)

区	層	条 数							備 考	計
		1	2	3	4	5	6	7		
1区	Ⅰ・Ⅱ上	1	1	2	③	①				4
	Ⅱ下~Ⅳ Ⅵ	2	2	14	6	4				28
	Ⅶ		1							1
2区	Ⅰ・Ⅱ上	1	1	2	4	1				9
	Ⅱ下	1	2	3	5	1	1			14
	Ⅳ	2	4	1+③	2+③	1+①			4と6	11
	Ⅵ		2	3	1	1			3と4	9
	Ⅶ								4と5	0
3区	Ⅱ上			1			1			2
	Ⅱ下~Ⅳ Ⅵ			8	1	1				10
	Ⅵ		①	1					③と3	2
	Ⅶ									0
	Ⅷ~Ⅹ Ⅺ	1	2	2						5
4区	Ⅱ上		1	1	1					3
	Ⅱ上~Ⅲ		3		③	1	①			4
	Ⅲ			1	2+③	①				3
	Ⅳ~Ⅵ Ⅷ	2	①							2
	Ⅵ	1	1						③と⑤	2
4区	Ⅶ	1	2	3	2				③と⑤	10
	Ⅷ~Ⅹ Ⅺ	1	4	1	1				4と5	7
	Ⅺ									2
	Ⅻ									0
	Ⅼ									0
要										
区	層	条 数							計	
1区	Ⅰ・Ⅱ上			1+①	1+③	①			2	
	Ⅱ下~Ⅳ Ⅵ	5	5	14	5	3			32	
	Ⅶ	1	1	1	1				3	
2区	Ⅰ・Ⅱ上	1	4	4	2+③			1	12	
	Ⅱ下	1	3	5	3	2	3		17	
	Ⅳ	1	6	8	8				23	
	Ⅵ	1	1	3	5	1			11	
	Ⅶ		4	3					7	
3区	Ⅱ上		1	3	5	3	1		13	
	Ⅱ下~Ⅳ Ⅵ	2	2	14	8	2	1		27	
	Ⅵ	1	3	1	1				6	
	Ⅶ	1	2						0	
	Ⅷ~Ⅹ Ⅺ	3	1	1	1				3	
4区	Ⅱ上			4	2				6	
	Ⅱ上~Ⅲ			9	1				10	
	Ⅲ	1		5	3	1	1		11	
	Ⅳ~Ⅵ Ⅷ	2	1	2	4				6	
	Ⅵ	1	3	1	1				4	
4区	Ⅶ	1		2	1	1			5	
	Ⅷ~Ⅹ Ⅺ	1		1	3	1			5	
	Ⅺ	1							1	
	Ⅻ								0	
	Ⅼ								0	

ともよく磨きがかかる。暗褐色を呈し、小砂粒を含む。2区IV層出土。230は、やや外反する口縁で端部は角ばる。内外とも横の二枚貝条痕をもつものである。黒褐色を呈し、小砂粒を多く含む。2区IV層出土。231は、口縁部がくの字状に折れ、端部が尖る。外面は横の荒い二枚貝条痕をもち内面はナデである。暗褐色を呈し焼成は良い。砂粒を含む。2区I、II上層出土。229は晩期。230、231は後期～晩期に属するものであろう。



第29図 SD001. ピット出土土器実測図 (1:3)

(2) 土埴、ピット群等出土の土器

大半は弥生土器である。耕作土や土塙(SK3003), ピット(SP3021, SP3042, SP3055, SP3120, SP3149, SP3153, SP3157)から須恵器、土師器の小片が出土している。SP3132からは縄文後期～晩期と思われる土器片が出土している。232は、内外面とも横の二枚貝の条痕をもつものである。黒褐色を呈し焼成は良く砂粒を含む。233は、外面は横のヘナタリ条痕をもち、内面は横の二枚貝条痕をもつ。黒褐色を呈し焼成は良い。砂粒を含む。

弥生土器はほとんどが前期のもので、中期前半と思われるものが、SK3007, SX3004, SX3007, SP3018, SP3128から出土している。中には213のように、端部が肥厚し、下方に垂下するもので中期中葉に下ると思われるものがある。

207, 211は高坏であるが、当該地方では出土資料が皆無なため時期比定が難しい。207の脚端部が若干肥厚気味につくられることからすると、中期前半頃のものかと考えられるが、断定はできない。

(3) 住居跡内出土土器

小形丸底壺、壺、高杯が出土している。小形丸底壺(220)は胴部が球形を呈し、口縁部が頸部からくの字状に折れ外傾するものである。壺は口縁部がくの字状に外反し、端部は上方へわずかにつまみ上げ気味のもの(221)と、やや平坦なもの(222)、丸くおさめるもの(223)がみられ、胴部は丸珠をもっている。高杯は、杯部は底部から体部へ移るところで屈曲して稜をつくり、外反して口縁部に移る。端部は丸くおさめている。脚部は長めで、裾部へ移るところで稜をつくるもの(225, 227)と、ないもの(224, 226)がある。

これらの土器は、おおむね布留Ⅱ式に併行でき、221の壺のように若干古手のものも含まれてはいるが、Ⅱ式の中でも比較的新しい部類に属するものと思われる。

2 石 器

今回出土した石器は約200点を数え、量的には一次、二次調査分をはるかに上回っている。とりわけ、SD001については他の調査区に比して分布密度が高く、先の土器の出土状況とあわせてかなりの遺物が集中的に出土している。同溝内では上層からの出土が顕著であるが、逆に下層からの出土量は極端に少ない。これは他調査区においても同様の傾向があるが、今回は特にその差が顕著である。一方、出土品の内容は石鎌・石錐・石庖丁・磨製石斧などで、若干新規の器種もみられるが、大要は前回までの調査例と一致している。しかし、資料の増大により、総量的な分析が可能となった。以下では、1次・2次調査出土品もあわせて各器種の型式分類を行い、さらにSD001については層位的関係から若干の検討を加えた。

石鎌(301~427) 計127点で、うちSD001よりの出土品は86点を数え、全体の約7割を占める。特に今回は上層からの出土が圧倒的で下層からは認められない。この傾向は同溝では他の調査区でも看取できたが、今回は一層顕著である。

これらの石器は、大きくは(Ⅰ)平基式、(Ⅱ)凹基式、(Ⅲ)凸基式に分けられるが、Ⅱ式はさらにいくつかのタイプに細分できる(第3表)。

Ⅱa 三角形を呈すもの。

Ⅱb 側辺が若干湾曲するもの。

Ⅱc Ⅱaより側辺の基部付近が垂直に立ち上るもの。

II d 側辺が2段に湾曲して中央に小さな逆刺をもつもの。

II e II c と II d を合わせたもの。

II f 基部の一方が短く左右対称でないもの。

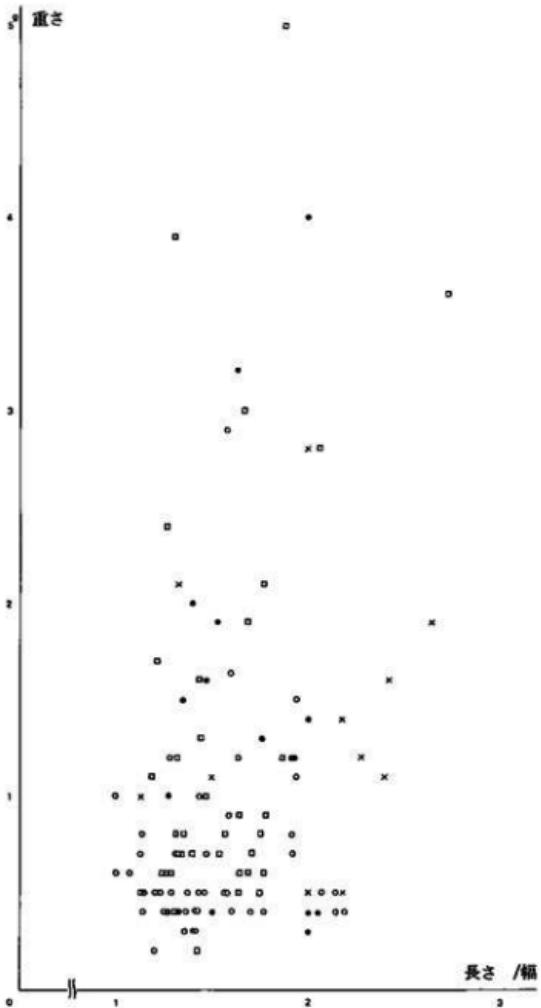
これらは各々でより細かく分類できる。II a は正三角形に近いもの (II a-1) と両側辺の長い二等辺三角形のもの (II a-2) があり、II b は側辺が内湾するもの (II b-1) と外湾するもの (II b-2) に分けられる。また、II d は縱長のもの (II d-1) と小形で扁平なもの (II d-2) がある。

第35図は、第1～3次調査出土の石器を法量的に図化したものである。これによると、石器は重量1kg以下、比率1.1～1.8に集中し、特にII式(凹基式)のものが多くみられる。I～III式では各型式間に分布上の差が認められる。II式は平均に近いがI式(平基式)は比率上はそれらとはば一致しながらも、重量的には上位にある。一方III式(凸基式)は比率・重量ともにI式を上まわっている。また、これらとかけはな

第3表 22区出土石器・型式別一覧表

型式	地點	SD001		計 (%)
		上層	その他	
I 平基式		301～313	406, 407, 408	16 (14.5)
II 凹基式	II a	1 314～319	390, 397	8 (7.3) 9 (8.2) 15.5
		2 320～326	410, 411	
	II b	1 327, 328		2 (1.8) 14 (12.7) 14.5
		2 329～337	389, 392, 393, 396, 404, 413	
III 基式	II c	338～343	414	7 (6.4) (70)
	II d	344～352		9 (8.2)
	II e	1 353～362	417～419	13 (11.8) 4 (3.6) 15.4
		2 363～366		
IV 凸基式	II f	367～373	395, 405, 421, 422	11 (15.5)
		374～386	424～427	17 (15.5)

(注) 表中の()内の数値はパーセントを示す。



第35図 出土石器の重さと長さ・幅の比

- 平基式(I)
- 凹基式(II)
- × 凸基式(III)
- 1次・2次調査出土品

れて、重量2.5kg以上の大形石器が認められる。これは、前回までの調査区でもほぼ同量出土しているので、ここでは一般的にみられる現象と考えよいと思われる。今回の出土品中にも完形に近いものが多く、完成品もしくは使用可能な破損品は全体の70%以上を占めている。これは前回までの調査からも同様の傾向が窺われた。

石錐(428~440) 計13点出土した。材質はいずれも安山岩である。形態的には、(I)細長く両端が尖るものと(II)頭部が大きなふくらみをもつものに分けられる。I型には中央がふくらむものとそうでないものがある。前者のうちには429のように両端が錐部として使用可能な例もあるが、他の同タイプのものからみて、頭部は錐部に用いられたのではないと思われる。II型はI型に比べて錐部が短く、先端部も若干鋭利さを欠いている。また、その断面はI型に対してやや扁平なものが多い。II型も細別でき、頭部が両側に対称的にふ

くらむもの(439・440)と片側にのみふくらんで先端の斜行するもの(436~438)がある。428・429などの錐部後線は磨耗しており、側縁には小さな刃こぼれがみられる。

勾玉(441) 住居址内より出土した。蛇紋岩製の小形品で三日月状を呈す。断面は全体に扁平で頭部はむしろ薄くなっている。孔は精円形をなしその上方には両面とも扭れ痕がよく残っている。

石匙(444~446) 3点ある。柄が刃部に直交する位置にあるもの(445)と平行して側辺につけられたもの(444・446)がある。いずれも縁辺にretouchを加えた程度で全面削離調整は行っていない。特に後者は素材の形状をうまく利用しているが調整は簡素である。類例は前回までの調査区からも出ている。

不整形石器(447~468) S D001を中心に多数出土したが、ここではそのうち主なもの22点をとりあげた。刃部と形態より、(I)1側辺に刃部をもつもの(454~468)、(II)方形で2側辺に刃部をつけるもの(447~453)がある。Iは、456~465のように単なる剥片を利用したものが多く、基本的には一辺に削離調整を加えただけの簡単な石器である。素材は三角形に近いものを選んでいる。これは刃部の一端が必ず鋭角となることと関係しており、機能と関連するものかもしれない。IIは全面が削離調整され、形態に一定の規格性がみられる。Iが素材に大きく規制されるのと対照的である。

磨製石庖丁(442・469~483) 計16点出土した。内訳は、破損品12点(うちほぼ完形のもの3点小破片9点)、未整品4点である。材質は大半が粘板岩である。これらは刃部と背部の形態より、(I a)直刃直背、(I b)直刃湾背、(II a)湾刃直背、(II b)湾刃湾背の4つのタイプに整理できる。I a(470・472)は全体の形状は不明であるが、前回例などより短冊形に近いものと推定される。472では成形時に意識的に側辺を打ちかき直線的に加工している。I b(469・481)のうち469は刃部中央が凹溝している。この部分には一方の面に使用痕が集中的にみられ、おそらく一定の使用後再研磨を加えて用いたものと思われる。また、側辺の一方は大きく削離しているが背部は丸く簡単に磨かれており削落後も再加工—使用されたものである。II aには471・475・476がある。II bは474・477・479であるが、474はいわゆる「杏形」を呈し、側縁は突起して辺をなさない。479は未整品であるがおそらく精円形になると思われる。各タイプの間では、材質・調整などに大差は認められない。

素材は、479のように大形の扁平な剥片を用いた場合と自然面を残す扁平な石塊を使った場合（476・481）とがある。479の裏面では成形のための剥離調整はほとんど皆無であり、1次剥離の状況をよくとどめている。この面は剥離の仕方からみて自然な剥離状況を示している。一方、481は裏面に風化した平滑な自然面を残している。476は次段階の例であるが、研磨の及んでいない面は481同様平滑な自然面をなし、加工前の剥離はないようである。ただ、両者とも他の面は第1次剥離をうけており、母岩より打ち割られた可能性がある。このように素材は部分的には人為的な剥離も加えられているが、基本的には自然石を用いているようである。

組かけ孔の間隔は中心間で2.0～2.3cmである。穿孔には前回同様直接錐で両面よりあける方法と孔の位置にまず敲打を加えて両面に刃面を作りその後で穿孔する方法とがある。研磨は、主に両面は右上り方向、凹部は横方向、背部は横もしくは斜め方向になされる。

磨製石斧（484～493）蛤刃石斧3点、小形柱状石斧1点、小形扁平片刃石斧3点の他、抉入片刃石斧の破片が3点出土している。抉入片刃石斧の出土は当遺跡では今回がはじめてである。3点のうち484と485は凹部の角度が一致することから同一個体と考えられる。484は一方の側面（側面図左側）を残し、他面は節理にそって剥落している。残存する面は、研磨が及んでいるが十分とはいえない、全面に未調整な剥離部を残したままである。この面の研磨方向は長軸に直交するものと思われるが、明瞭でない。他の二面では同様に長軸に直交する擦痕がよく残っている。抉りの稜線は研磨によりごく甘くなっている。486は頭部付近の破片で抉りの部分をわずかに残す。研磨は、側面（側面図右側）では長軸に直交する方向で、他の2面では斜め方向に行われている。研磨は良好である。形態・研磨の違いより上述のものとは別個であろう。489は扁平片刃石斧の破損品で、断面台形を呈す。研磨の方向は3面とも長軸に直交する。各面の境界は明瞭な稜線をなす。488は小形の柱状片刃石斧である。頭部が若干いびつであるが、よく研磨されており稜線もしっかりとしている。489は扁平な片刃石斧である。研磨は4面とも長軸に平行する方向に行われている。側面は比較的よく研磨されているが、他の2面は大部分研磨が及んでいない。490は両端を欠失しているが扁平片刃石斧と思われる。断面はかまぼこ形を呈し、側面はわずかながら平坦面を意識して作られている。

491～493は鉢刃石斧の破損品である。492は器面の風化が著しくごくわずかしか研磨面をとどめない。一方493はよく研磨されているが、両端に剝離調整が加えられており、破損後に転用されたものである。この剝離痕には研磨は及んでいない。

3 そ の 他

SD001より紡錘車1、土錐2が出土した。

紡錘車(184)は、当初から紡錘車の目的で製作されたものである。半欠しているが、推定径5.1cmで厚さは中央部で1.6cm、端部で1.2cmを測りややレンズ状を呈する。中央よりややはざれた位置に径0.7cmの孔を焼成前に、やや斜めに一方より穿っている。全体は磨滅しているが、面取りの跡があるのでヘラ状のもので押えたものであろう。茶褐色を呈し焼成は良い。重さ23.2gである。

土錐 182は欠損しているため、長さ幅とも不明である。管状をなすものであるが、全面指頭により押えつけ成形している。外面黒色、内面茶色で砂粒を多く含み焼成は良い。重さ53.9gである。183は長さ5.6cm、径3cmの管状のものである。穿孔は一方からなされ径0.9cmである。中央に約1/4周ほどヘラ描沈線がみえる。全面指頭により押えつけて成形している。淡褐色を呈し細砂を含み焼成は良い。重さ43.0gである。

184は4区Ⅱ・Ⅲ層、182は3区Ⅱ下・Ⅵ・Ⅶ層、183は1区の溝底より出土した。

この他 SD001からは炭化米が出土しており、溝底からは自然木が数片検出されている。

IV おわりに

本年度の調査は、昭和52年度に調査が行われた27区の西側の22区を対象とし、SD 001溝の西側と、環濠の内側の状態を明らかにすることを目的として実施した。

その結果、SD 001溝の他、土塙、ピット群などや古墳時代の住居跡を検出した。遺構面は全面的に削平を受けており、特に調査区の東半部においては、更に深く掘り込まれていたため遺構の残存状態が悪かった。検出した住居跡の掘込みの深さから考えて、少なくとも30~40cmぐらいの削平があったものと思われる。

溝は、南側にゆるく湾曲する形で検出された。今年度ではほぼ溝を掘ったことになるが、昨年度の調査で指摘されているとおり、長円形を呈すようで、長径80m、短径70mを測るものと推定される。規模は、削平の少ない西半部で幅2.9~3.0m、深さ1.2~1.3mを測るが、削平された深さを考えると、本来は幅約3.2m、深さ1.5m前後と考えられよう。溝内充满土のうち、遺物をあまり含まない黄褐色土については、その堆積状態から人為的に埋められたものと考え、溝に接するように内側に土塙状のものがあったものと推定した。このようにみると、土塙頂部から溝底までは2m前後となり、容易に渡ったりよじ登ったりできない状態であったと思われる。

今回も多くの土塙やピット群を検出したが、遺構面が削平を受けている関係から、相互の有機的な関係や性格を十分把握することができなかつた。ただ内部から弥生土器の他に縄文土器や須恵器、土師器を出土しているものがあるので、時期的な関係も合わせて検討していく必要があろう。

古墳時代の住居跡については、備後南部では福山市ザブ遺跡で検出されているが、内容的に不明確であり、今回の発見は出土土器とともに新資料として注目されよう。溝内出土土器については、9層に細分して取り上げ、形態や文様、調整などについて時期的な変化をみてみた。また石器のうち石鏃については、型式別分類による法量の変化を明らかにし、一つの傾向をつかむことができた。今後の比較資料として基準となるものと思われる。

なお、今回も土師器や須恵器などが検出されたが、この時期の明確な遺構は検出できなかった。周辺部において25区では、地元の人の話によると瓦片などが出土し礎石のようなものもあったと言われており、伝備後国庁跡関係の遺構がある可能性が強くなっている。こういうことから今後広域的に内容や性格を早急に把握する必要があるといえよう。

付1 出土土器観察表

SD001

土器番号	調査区と出土層	器 形	形態・調整・文様などの特徴
1	3-K	壺C-1	口縁部横ナデ、外面横ヘラ磨き。肩部横ヘラナデ後ヘラ磨き。底部近くは成形時のヘラによるナデ上げ。口縁部内面横ヘラ磨き。頸部から肩部に成形時のしづら目と指頭圧痕が残る。頸部横ナデ。底部ナデ。口縁端部にスス付着。黄褐色。炭化物付着。焼成良好。砂粒混入。
2	4-K	壺E-1	外面とも器面の荒れ著しく調整不明。肩部横ヘラ磨き。頸部内面に指頭圧痕。赤茶褐色。焼成は柔らかい。砂粒混入。
3	3-K	壺E-1	口縁部外面横ナデ。頸部横ヘラ磨き。口縁部内面横ヘラ磨き。頸部に成形時の指頭圧痕。茶褐色。焼成良好。砂粒混入。
4	3-K	壺E-3	外面とも横ヘラ磨き。内面部分的に斜め磨き。暗褐色。焼成良好。砂粒混入。
7	3-K	壺C-2	外面横ヘラ磨き。尖帯下に炭化物付着。焼成良好。砂粒混入。
8	3-K	壺E-1	全体的に器面の荒れ著しく剥落部分が多い。外面指頭成形とナデ。内面剥離。黄白灰色。焼成柔らかく砂粒多含。
9	3-K	甕C-3	外面とも磨滅著しく調整不明瞭。口縁外面横ナデ。赤褐色。外面部分的にスス付着。焼成悪く砂粒多含。
10	3-K	甕E-1	外面とも横ナデ。外面スス付着。暗褐色。焼成良好。細砂混入。
11	3-K	甕E-1	口縁部内面とも横ナデ。胴部外面横ナデ。黒色。焼成良好。細砂混入。
12	3-K	甕E-3	口縁部外面横ナデ。底部上半縦の刷毛目。下半は斜めの刷毛目。暗褐色。焼成良好。細砂混入。外面スス付着。
13	3-K	甕D-2	外面上半横ナデ。下半ナデ。指頭圧痕残る。暗褐色。焼成良好。細砂混入。外面上スス付着。
14	4-VII-K	鉢	外面横・斜めのヘラ磨き。成形時の指頭圧痕よく残る。赤褐色。砂粒多含。
18	4-VII-K	壺C-2	外面とも横ヘラ磨き。暗褐色。焼成良好。細砂混入。
19	4-VII-K	壺C-1	外面とも横・斜めのヘラ磨き。口縁外側ナデの後ヘラ磨き。褐色。焼成良好。
20	4-VII-K	壺E-3	外面横のヘラ磨き。褐色。焼成良好。砂粒多含。
22	3-VII-K	甕D-1	外面横ヘラ磨き。暗褐色。外面部分的に丹痕。細砂混入。
23	4-VII	壺E-1	口縁部外面横ナデ。以下横ヘラ磨き。内面横ヘラ磨き。頸部は指頭成形の後ナデ。暗褐色。焼成良好。細砂混入。
24	3-VII	壺C-2	口縁部横ナデ。頸部横ヘラナデ。胴部横ヘラ磨き。底部近くは縦ヘラ磨き。頸部と胴部の境に指頭圧痕。淡赤褐色。部分的に丹痕。黒斑あり。焼成良好。細砂混入。
25	4-VII	壺	外面とも横ヘラ磨き。茶褐色。焼成良好。細砂混入。
26	2-VII	壺	外面とも横ヘラ磨き。暗褐色。焼成良好。細砂混入。
27	2-VII	壺E-1	口縁部内外面とも横ナデ。胴部外面横ヘラ磨き。赤褐色。
30	4-VII	壺E-1	外面横ヘラ磨き。赤褐色。焼成良好。細砂混入。
31	4-VII	壺E-1	外面横ヘラ磨き。内面横ナデの後横ヘラ磨き。指頭圧痕残る。赤褐色。焼成良好。細砂混入。

土器番号	調査区と出土層	器 形	形 態・調 整・文 様 な ど の 特 徴
32	4-VI	壺B-2	外面横・斜めのヘラ磨き。内面成形時の指頭圧痕。部分的にナデ。赤褐色。
33	4-VI	壺E-1	胴下半横ヘラ磨き。赤褐色。焼成良好。砂粒多含。
34	4-VI	壺E-1	胴部外面上半ヘラ磨き。内面ナデの後、部分的にヘラ磨き。頭部近くに指頭圧痕。赤褐色。焼成良好。砂粒多含。
35	1-VI	壺E-1	口縁部外面横ナデ。胴部上半横ヘラ磨き、下半斜めヘラ磨き。内面横・斜めヘラ磨き。口縁部内外面とも指頭圧痕残る。赤褐色。焼成良好。砂粒混入。
36	2-VI	壺E-1	口縁部横ナデ。外面縦ナデ。内面は指頭圧痕が残り、斜めナデ。赤茶褐色。
40	2-VI	壺E-1	外面部分的に横ヘラ磨き。内面上半横ヘラ磨き。赤褐色。焼成良好。砂粒混入。
41	2-VI	壺E-1	外面胴部横ヘラ磨き。赤褐色。胴部スス付着。焼成良好。砂粒混入。
42	2-VI	壺C-2	胴部ヘラ磨き。焼成良好。砂粒多含。
43	2-VI	壺B-2	底部近くヘラでナデ上げ。赤褐色。焼成良好。砂粒多含。
44	2-VI	壺C-3	外面横ヘラ磨き。赤褐色。焼成良好。細砂混入。
47	1-VI	壺B-3	胴部上半横ヘラ磨き。底部指頭成形。頭部近くに成形時のしぶり目。陰褐色。
48	2-VI	無 頭 壺	胴部斜めヘラ磨き。底部近くは横ヘラ磨き。赤褐色。焼成良好。砂粒混入。
51	3-VI	壺B-2	口縁部横ナデ。内面底減。暗褐色。焼成良好。砂粒多含。
52	2-VI	壺E-1	外面上半横ナデ。以下不定方向ナデ。暗褐色。焼成良好。細砂混入。胴部外面スス付着。
53	2-VI	壺A-1	口縁部横ナデ。頭部にヘラで押された跡。胴部最大径まで横・横ナデ、以下縦ナデ。底部ナデ。褐色。頭部附近に炭化物付着。黒褐色。焼成良好。細砂混入。
54	3-VI	壺A-1	口縁部外面横ナデ。胴部縱ヘラ磨き。内面横ヘラ磨き。暗褐色。砂粒多含。
55	2-VI	壺E-1	口縁部横ナデ。頭部に指頭圧痕が残り、後横ナデ。胴部横・斜めの刷毛目調整。胴部指頭圧痕。茶褐色。焼成良好。砂粒多含。
56	3-VI	壺E-1	口縁部横ナデ。頭部は板状工具による縱刷毛目、以下縦刷毛目。内面横ナデ。褐色。焼成良好。外側胴部スス付着。砂粒多含。
57	1-VI	鉢	底部外面横ヘラ磨き。内面横ヘラ磨き。口縁部、底部外面近くに成形時の指頭圧痕。暗褐色。焼成良好。細砂多含。
58	2-VI	壺E-1	外面縦ナデ。口縁部内面横ナデ。胴部ナデ。底部は焼成後穿孔した円孔。赤褐色。胴部外面にスス付着。内面に炭化物付着。焼成良好。細砂混入。
59	3-VI	壺E-1	内外面とも横ナデ。暗褐色。胴部内面炭化物付着。焼成良好。細砂混入。
60	4-VI	壺E-1	口縁部横ナデ。胴部以下斜めナデ。底部近く縦ナデ。頭部内面ヘラナデ。内面下部に炭化物付着。焼成良好。細砂混入。
61	2-VI	壺 用 蓋	外面つまみ近くに指頭圧痕。上半斜め、下半横ヘラ磨き。天井部内面ナデ。以下横ヘラ磨き。茶褐色。外面スス付着。焼成良好。
62	4-N・VI	壺 用 蓋	内外とも横ヘラ磨き。外面暗褐色。内面黒色。焼成良好。細砂混入。
65	2-N	壺D-1	外面一部横ヘラ磨き。赤褐色。焼成良好。細砂混入。

土器番号	調査区と出土層	器 形	形 態・調 整・文様などの特徴
66	4—I・Ⅵ	壺D-1	外面縦ナデ後、頸部下半へラ磨き。灰褐色。焼成良好。砂粒多含。
71	4—I・Ⅵ	壺C-2	口縁部横ナデ。以下縦ナデ。暗褐色。焼成良好。細砂混入。
72	2—I	壺A-1	口縁部横ナデ。胴部縦ナデ。口縁部外面と胴部に炭化物付着。茶褐色。
73	2-II下～Ⅵ	壺B-2	頸部ナデ。後へラ磨き。内面横へラ磨き。頭部に板状工具による段。暗茶褐色。
74	1-II下～Ⅵ	壺B-2	口縁部外面横ナデ。頸部以下横へラ磨き。淡赤褐色。焼成良好。細砂混入。
75	1-II下～Ⅵ	壺C-2	内外面とも横・斜めへラ磨き。淡褐色。焼成良好。細砂混入。
76	1-II下～Ⅵ	壺C-2	内外面とも横へラ磨き。茶褐色。焼成良好。細砂混入。
78	3-II下・Ⅳ・Ⅵ	壺C-2	下半横へラ磨き。光沢あり。黒褐色。焼成良好。細砂混入。
83	3-II下・Ⅳ・Ⅵ	壺C-2	外面横へラ磨き。部分的に横ナデ。赤褐色。焼成良好。細砂混入。
84	1-II下～Ⅵ	壺E-1	内外面とも横へラ磨き。褐色。焼成良好。細砂混入。
85	2-Ⅵ	壺E-1	口縁部横ナデ。以下部分的に横へラ磨き。口縁部内面横へラ磨き。暗灰褐色。頭部・胴下部及び口縁部内面に丹頂あり。底部付近に黒斑。焼成良好。砂粒多含。
86	1-II下～Ⅵ	壺E-1	口縁部外面横ナデ後、横へラ磨き。赤褐色。焼成良好。細砂多含。
87	1-II下～Ⅵ	壺C-2	口縁部横ナデ。以下内外面とも横へラ磨き。淡褐色。細砂混入。
88	1-II下～Ⅵ	壺E-1	口縁部外面横ナデ。頭部沈線下に継ぐ板状工具によるナデ。その上を横へラ磨き。口縁部内面横へラ磨き。頭部以下縦へラ磨き。黒褐色。焼成良好。細砂混入。
89	1-II下～Ⅵ	壺E-1	口縁部外面横ナデ。頭部縦へラ磨き。褐色。焼成良好。細砂混入。
90	1-II下～Ⅵ	壺E-1	外面横へラ磨き。口縁部内面横へラ磨き。頭部以下斜め肩毛調整。黒色。
91	1-II下～Ⅵ	壺E-3	内外面とも横へラ磨き。褐色。焼成良好。細砂多含。
94	1-II下～Ⅵ	壺E-3	外面横へラ磨き。内面上半横ナデ。下半横ナデ。褐色。焼成良好。細砂混入。
95	2-Ⅵ	壺B-2	内外面とも横・斜めへラ磨き。部分的に成形時の指頭圧痕。淡褐色。細砂混入。
96	1-II下～Ⅵ	壺E-1	外面横・斜めへラ磨き。内面口縁部から頭部へは横へラ磨き。以下横肩毛ナデ。淡褐色。焼成良好。細砂混入。
97	1-II下～Ⅵ	壺E-3	外面横へラ磨き。褐色。胴部下半スス付着。一部黒斑あり。細砂混入。
98	3-II下・Ⅳ・Ⅵ	壺E-1	胴部内面上半へラ磨き。下半横ナデ。底部ナデ上げ。褐色。細砂混入。
99	1-II下～Ⅵ	壺D-1	口縁部横ナデ。後横へラ磨き。頭部横へラ磨き。内面横へラ磨き。淡褐色。
100	1-II下～Ⅵ	壺D-1	内面上半磨減。下半へラ状工具による横ナデ。灰白色。焼成良好。細砂混入。
102	1-II下～Ⅵ	壺D-1	口縁部横ナデ。内外面とも横へラ磨き。茶褐色。焼成良好。細砂混入。
103	3-II下・Ⅳ・Ⅵ	壺D-1	外面横へラ磨き。内面横ナデ。暗褐色。焼成良好。細砂混入。
107	1-II下～Ⅵ	壺D-1	内外面とも横へラ磨き。突帯付近横ナデ。暗褐色。焼成良好。細砂混入。
109	1-II下～Ⅵ	壺用蓋	内面天井部は指頭によるナデ。爪の痕跡あり。以下縦へラ磨き。茶褐色。
110	1-II下～Ⅵ	壺用蓋	内外面とも横へラ磨き。つまみ部分に上から下への円孔。黒色。砂粒多含。

土器番号	調査区と出土層	器 形	形態・調整・文様などの特徴
111	1-II下~VII	壺	胴部外面上半横へラ磨き。下半縦へラ磨き。底部へラ磨き。淡褐色。胴部最大径ほぼ全周に炭化物。焼成良好。細砂多含。
112 115	1-II下~VII 3-II下・IV・VII	ミニチュア鉢	全体に指頭による成形痕あり。外面横へラ磨き。内面横ナデ。茶褐色。外周一部黒斑あり。焼成良好。砂粒多含。
117	1-II下~VII	壺	内外面とも横へラ磨き。茶褐色。底部近くに黒斑。焼成良好。細砂混入。
118	1-II下~VII	壺	外面横へラ磨き。胴部内面中位に板状工具によるナデ上げ。後へラ磨き。褐色。胴部中位に黒斑あり。焼成良好。細砂多含。
119	3-II下・IV・VII	壺B-2	口縁部横ナデ。胴部横ナデ。茶褐色。砂粒多含。
123	1-II下~VII	壺E-3	外面横ナデ。内面斜めのへラ磨き。暗褐色。焼成良好。細砂混入。
125	1-II下~VII	壺E-3	口縁部外面横ナデ。以下横ナデ。内面磨滅。褐色。焼成良好。細砂混入。
126	1-II下~VII	壺E-1	口縁部横ナデ。胴部外面継刷毛目。淡褐色。口縁部付近に黒斑。内面底部付近に炭化物付着。焼成良好。細砂多含。
127	1-II下~VII	壺E-1	口縁部外面横ナデ。胴部上半横刷毛目。下半継刷毛目。底部へラ削り。口縁部内面指頭調整後横ナデ。暗茶褐色。全体スス付着。焼成良好。細砂多含。
129	1-II下~VII	壺E-1	口縁部外面横ナデ。胴部紙ナデ。外面茶褐色。内面赤褐色。胴部スス付着。焼成良好。細砂混入。
130	1-II下~VII	壺C-2	口縁部横ナデ。暗褐色。焼成良好。砂粒多含。
131	1-II下~VII	壺E-1	指頭成形痕あり。赤褐色。焼成やや不良。砂粒多含。
132	3-II下・IV・VII	壺用蓋	天井部外面へラ磨き。口縁部にかけては縦へラ磨き。天井部内面指頭成形後ナデ。以下は横へラ磨き。赤褐色。焼成良好。細砂混入。
133	1-II下~VII	壺用蓋	内外ともへラ磨き。つまみの部分は指頭成形。赤褐色。焼成良好。細砂混入。
134	4-II	壺B-1	口縁部横ナデ。他は内外面とも横へラ磨き。頸部に段をつくり、段下端を板状工具により下に削る。茶褐色。焼成良好。細砂多含。
135	4-II	壺E-3	外面横へラ磨き。内面横ナデの後、横へラ磨き。暗褐色。焼成良好。細砂混入。
146	4-III・II上	壺B-2	口縁部外面横ナデ。胴部紙ナデ。内面横ナデ。暗褐色。焼成良好。細砂混入。
147	4-III・II上	壺E-1	口縁部横ナデ。胴部指頭成形痕を残し、下半ナデ。スス付着。焼成良好。細砂混入。
150	2-II下	壺C-1	内外面とも横へラ磨き。赤褐色。焼成良好。細砂混入。
157	2-VII	壺E-1	口縁部外面横ナデ。胴部上半横・斜めナデ。下半縦ナデ。口縁部内面横ナデ。茶褐色。スス付着。焼成良好。細砂混入。
162	3-II上	壺E-1	外面へラ磨き。内面横ナデ後、頸部は紙。胴部は横に凹溝をおいて部分的にへラ磨き。暗褐色。焼成良好。細砂混入。
167	4-II上	壺A-1	口縁部横ナデ。胴部磨滅。内面横ナデ。赤褐色。全体にスス付着。焼成良好。
169	1-II上	壺E-1	口縁部横ナデ。赤褐色。焼成良好。細砂多含。
170	4-II	壺E-1	口縁部横ナデ。外面全面横へラ磨き。口縁部内面横刷毛ナデ。淡茶褐色。
171	4-II上		長円形の筒状を呈するものである。赤褐色。焼成良好。砂粒多含。
181	2-II上・I	壺F-3	口縁部横ナデ。胴部内面上半に若干横へラ磨き。赤褐色。焼成良好。細砂多含。
185	4	壺C-2	外面横へラ磨き。口縁部内面横へラ磨き。以下横ナデ。赤褐色。細砂混入。
187	3	壺(底部)	外面横へラ磨き。底部不定方向へラ磨き。内面横へラ磨き。底部へラにより×印。淡褐色。底部とその周辺に黒斑あり。焼成良好。細砂多含。

土柱・ピット群等

土器番号	出土地点	器 形	形態・調整・文様などの特徴
207	S K3007	高 壕	外面縦へラ磨き。脚端部へラ磨き。脚内面天井部は指頭で押え、まわりはへラで押え気味にナデ。端部近く横へラ磨き。暗褐色。焼成良好。細砂混入。
221	S X3007	高 壕	口縁部横ナデ。口縁部外面縦刷毛ナデ。胴部上半横へラ磨き。下半縦へラ磨き。外面横へラ磨き。口縁部曲面部に小円孔あり。淡褐色。外面口縫近くに黒斑。

付2 出土石器計測表

番号	種別	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	石材	出土地
301	石 簾	3.1	1.9	3.2	安 山 岩	S D001-2-I・II上
302	#	3.2	1.6	4.0	#	S D001-4-II上
303	#	2.4	1.7	2.0	#	S D001-4-II
304	#	2.3	1.7	1.5	#	S D001-2-II下
305	#	2.3	1.5	1.4	#	S D001-2-II
306	#	2.3	1.3	0.8	#	S D001-4-II上
307	#	2.1	1.4	0.9	#	S D001-1-I・II上
308	#	(2.2)	(1.5)	(1.0)	#	#
309	#	2.0	1.4	0.7	#	S D001-2-I・II上
310	#	(2.0)	(1.5)	(1.0)	#	#
311	#	1.4	0.9	0.4	#	S D001-1-I・II上
312	#	1.5	1.0	0.4	#	#
313	#	1.5	1.0	0.3	#	S D001-2-II
314	#	2.3	1.8	1.2	#	S D001-1-II下~III
315	#	(1.7)	(1.1)	(0.3)	#	#
316	#	(1.4)	1.6	(0.4)	#	#
317	#	1.7	1.5	0.5	#	S D001-4-II上
318	#	(1.8)	(1.3)	(0.6)	#	#
319	#	1.5	1.3	0.5	#	S D001-1-I
320	#	3.1	1.6	1.1	#	S D001-4-II上
321	#	(2.4)	(1.4)	(0.7)	#	S D001-2-I・II上
322	#	2.1	1.5	0.6	#	S D001-1-I・II上
323	#	(2.2)	(1.5)	(1.0)	#	#
324	#	(1.8)	1.3	(0.5)	#	S D001-2-I・II上
325	#	(2.1)	(1.1)	(0.6)	#	S D001-1-I・II上
326	#	(1.8)	(1.1)	(0.4)	#	S D001-4-II上
327	#	(2.1)	(1.3)	(0.5)	#	耕作土
328	#	(2.1)	1.4	(0.6)	#	S D001-1-I・II上
329	#	(2.2)	(1.3)	(0.8)	#	S D001-1-II下~III
330	#	1.8	1.3	0.5	#	S D001-4-II上
331	#	(1.6)	(1.8)	(0.9)	#	S D001-1-I・II上
332	#	1.7	1.7	1.0	#	#
333	#	(1.4)	1.5	(0.5)	#	#
334	#	1.8	1.1	0.4	#	#
335	#	(1.6)	(1.2)	(0.3)	#	#
336	#	1.2	1.0	0.2	#	S D001-2-I・II上
337	#	1.4	1.1	0.4	#	S D001-4-II上
338	#	(2.6)	(1.5)	(0.9)	#	S D001-2-I・II上
339	#	2.7	1.7	0.9	#	S D001-1-2セタショナルベルト中
340	#	2.3	1.4	0.6	#	S D001-2-I・II上
341	#	1.9	1.4	0.4	#	#
342	#	(2.2)	(1.4)	(0.6)	#	S D001-3-II下・IV・V
343	#	(2.2)	(1.3)	0.7	#	#
344	#	1.9	1.2	0.5	#	S D001-4
345	#	(1.8)	(1.2)	(0.4)	#	S D001-4-II上
346	#	1.9	1.3	0.5	#	S D001-2-I・II上
347	#	(1.9)	(1.3)	(0.4)	#	S D001-2-II

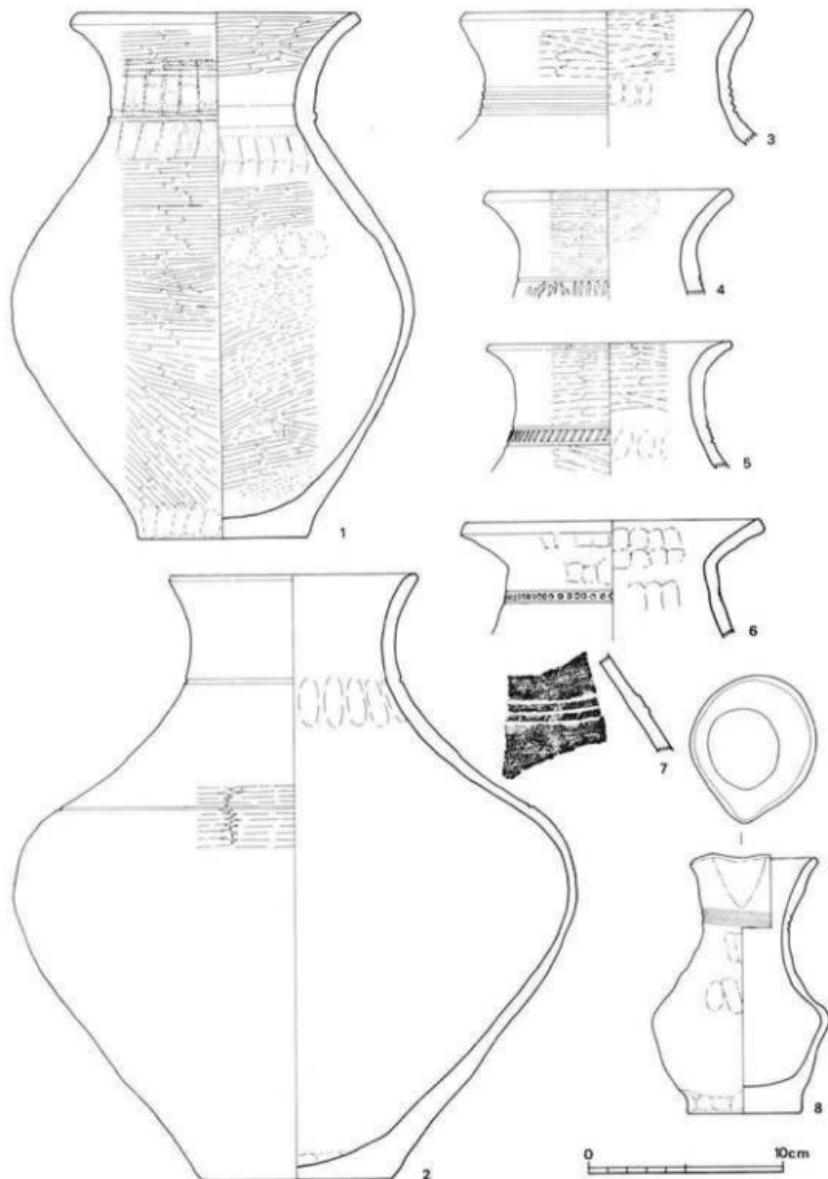
番号	種別	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	石材	出土地
348	石 畫	1.5	1.2	0.4	安山岩	S D001-2-VII
349	"	1.7	1.2	0.3	"	S D001-1-I・II上
350	"	1.6	1.0	0.4	"	S D001-2-I・II上
351	"	1.6	0.9	0.4	"	S D001-2-VI
352	"	(1.6)	(0.8)	(0.4)	"	S D001-4-II上
353	"	2.3	1.6	1.0	"	S D001-1-I・II上
354	"	2.6	1.6	1.2	"	S D001-1-II下～VII
355	"	(2.4)	(1.4)	(0.9)	"	S D001-2-I・II上
356	"	(2.2)	(1.2)	(0.8)	"	S D001-1-I・II上
357	"	2.2	1.3	0.4	"	"
358	"	2.2	1.4	0.5	"	S D001-3-II下・IV・VII
359	"	(2.2)	(1.3)	(0.6)	"	"
360	"	(1.7)	(1.7)	(0.6)	"	S D001-1-I・II上
361	"	(2.1)	(1.3)	(0.7)	"	S D001-2-I・II上
362	"	(1.9)	(1.1)	(0.5)	"	"
363	"	1.6	1.4	0.4	"	S D001-1-I
364	"	1.6	1.4	0.5	"	S D001-1-I・II上
365	"	(1.9)	(1.4)	(0.5)	"	S D001-2-I・II上
366	"	(1.8)	(1.4)	(0.6)	"	S D001-4-II上
367	"	1.5	1.1	0.3	"	"
368	"	(1.5)	(1.3)	(0.4)	"	S D001-2-VI
369	"	1.9	1.5	0.6	"	S D001-1-I
370	"	(1.5)	(1.2)	(0.4)	"	S D001-1-I・II上
371	"	1.6	1.3	0.5	"	S D001-1-II下～VII
372	"	2.5	1.3	0.7	"	"
373	"	1.7	1.3	0.7	"	S D001-1-I・II上
374	"	(2.0)	1.4	(0.6)	"	S D001-1-II下～VII
375	"	(1.4)	(1.4)	(0.5)	"	S D001-1-I
376	"	(1.3)	1.7	(0.6)	"	S D001-3-II下
377	"	(1.1)	1.7	(0.3)	"	S D001-3-II下・IV・VII
378	"	(1.5)	1.5	(0.7)	"	S D001-1-II下～VII
379	"	2.4	1.8	2.1	"	S D001-2-I・II上
380	"	(4.5)	1.4	(4.8)	"	S D001-1-II上
381	"	3.2	1.6	2.8	"	S D001-2-I・II上
382	"	2.9	1.2	1.6	"	S D001-1-I・II上
383	"	2.9	1.1	1.9	"	S D001-4-III
384	"	2.5	1.1	1.2	"	"
385	"	2.4	1.0	1.1	"	S D001-2-I・II上
386	"	2.4	1.1	0.5	"	S D001-4-II上
387	"	(1.8)	1.7	(1.1)	"	S P3146
388	"	(1.7)	1.7	(1.0)	"	S K3007
389	"	1.5	1.4	0.6	"	"
390	"	1.8	1.4	0.5	"	S P3003
391	"	(1.7)	(1.2)	(0.5)	"	S P3010
392	"	1.6	1.2	0.4	"	S P3012
393	"	1.7	1.2	0.4	"	住居跡内
394	"	(1.6)	(1.4)	(0.6)	"	"
395	"	1.6	1.2	0.4	"	"

番号	種別	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	石材	出土地
396	石 簾	1.4	1.1	0.4	安 山 岩	住居跡 内
397	"	1.7	1.5	0.7	"	"
398	"	(1.6)	1.8	(0.9)	"	"
399	"	(2.1)	(1.3)	(0.4)	"	"
400	"	(1.4)	(1.3)	(0.5)	"	"
401	"	2.3	1.6	1.3	"	耕 作 土
402	"	(1.7)	(1.2)	(0.4)	"	"
403	"	(1.4)	1.5	(0.6)	"	"
404	"	1.3	1.3	0.6	"	"
405	"	1.4	1.0	0.3	"	"
406	"	(2.5)	(1.7)	(1.6)	"	"
407	"	1.9	1.5	1.0	"	"
408	"	1.8	1.2	0.4	"	耕 作 土 中 土
409	"	(1.9)	1.6	(1.0)	"	"
410	"	2.3	1.2	0.8	"	"
411	"	1.7	1.2	0.4	"	"
412	"	(1.4)	1.2	(0.4)	"	耕 作 土 中 土
413	"	3.0	1.9	2.9	"	"
414	"	(1.7)	1.4	(0.5)	"	"
415	"	(2.5)	(1.6)	(1.1)	"	"
416	"	(1.9)	(1.5)	(0.8)	"	"
417	"	2.0	1.4	0.5	"	"
418	"	(2.2)	1.5	(0.7)	"	"
419	"	1.7	1.5	0.8	"	"
420	"	(1.1)	1.2	(0.4)	"	"
421	"	1.9	1.5	0.6	"	"
422	"	2.7	1.6	1.9	"	"
423	"	(0.9)	1.3	(0.3)	"	"
424	"	2.1	1.4	1.1	"	"
425	"	2.4	1.1	1.4	"	"
426	"	1.6	0.8	0.5	"	"
427	"	1.7	1.5	1.0	"	"
428	石 繖	4.5	0.8	1.5	"	S D001-3-II
429	"	3.7	0.9	1.2	"	S D001-4-II上
430	"	2.8	1.0	1.1	"	S D001-2-I+II上
431	"	(2.8)	1.1	1.7	"	S K3003
432	"	3.4	0.9	1.1	"	S D001-2-I+II上
433	"	3.7	0.9	1.3	"	S D001-4-II上
434	"	2.4	1.1	0.9	"	S D001-2-I+II上
435	"	2.7	0.7	0.7	"	S D001-4-II上
436	"	3.5	1.4	1.7	"	S K3003
437	"	3.4	1.5	2.1	"	S D001-2-I+II上
438	"	3.2	1.5	2.4	"	"
439	"	2.6	2.0	1.7	"	"
440	"	2.2	1.3	0.7	"	耕 作 土
441	勾 玉	2.0	0.8	(1.3)	蛇紋岩	住居跡 内
442	石 座 丁	(4.0)	(3.7)	(9.2)	粘板岩	"
443	不整形石器	4.4	4.3	31.5	安山岩	S D001-3-II下-N+V

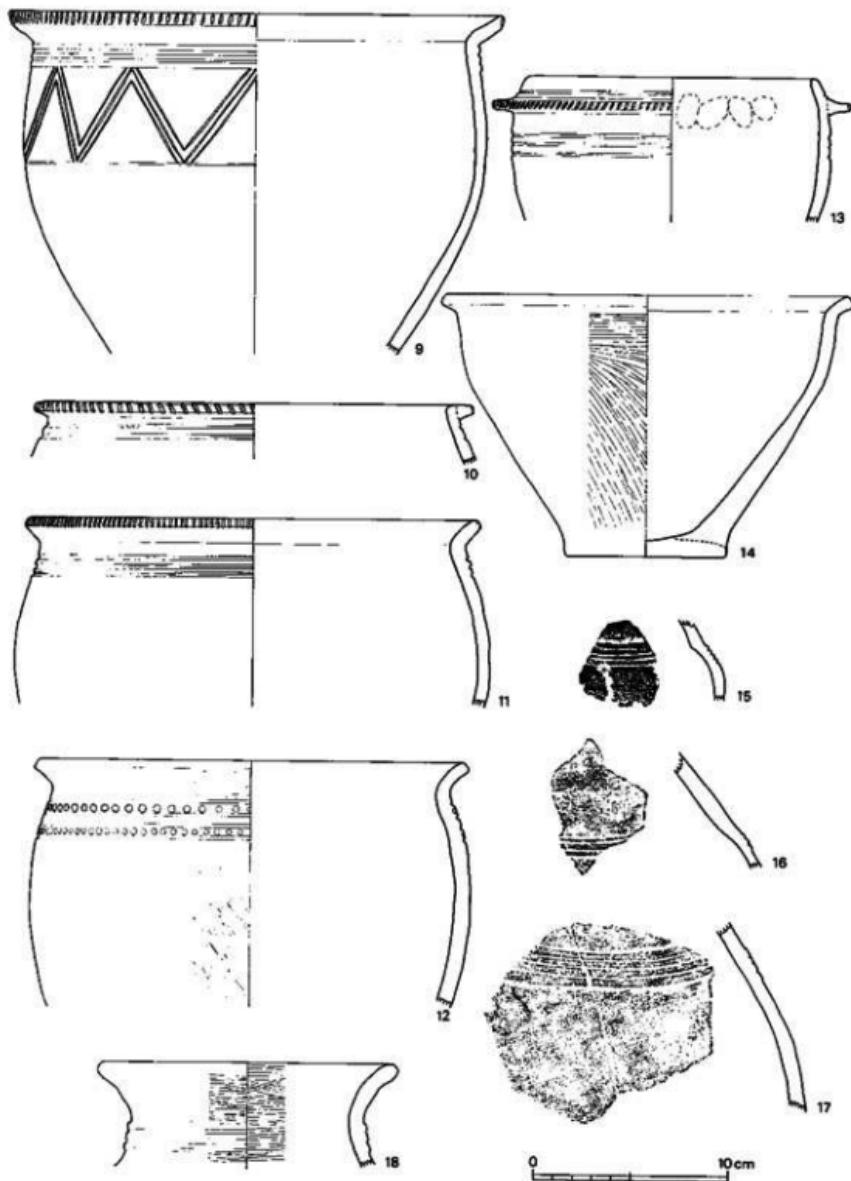
番号	種別	長さ(cm)	幅(cm)	重さ(g)	石材	出土地
444	石匙	7.9	3.9	23.2	安山岩	S D001-2-II下
445	"	5.0	3.7	13.1	"	S D001-4-VI
446	"	8.9	2.0	9.7	"	S D001-3-II下・IV・VI
447	不整形石器	10.4	4.5	104.9	粘板岩	耕作土下
448	"	(6.2)	4.0	(26.9)	安山岩	S D001-1-II下~VI
449	"	3.3	2.1	2.9	"	S D001-1-II上
450	"	6.8	5.8	49.1	"	S D001-1-I・II上
451	"	8.1	4.7	28.0	"	耕作土
452	"	3.0	2.6	5.3	"	S D001-2-I・II上
453	"	2.1	2.7	5.2	"	"
454	"	5.2	2.0	9.6	"	S D001-2-N
455	"	5.8	2.7	8.1	"	耕土中
456	"	6.2	4.2	17.2	"	S D001-2-N
457	"	5.7	4.7	17.0	"	S D001-4
458	"	4.4	3.4	10.4	"	耕土中
459	"	2.9	3.5	5.4	"	S D001-2-N
460	"	5.8	3.1	15.3	"	S D001-4-III
461	"	5.0	2.5	7.7	"	S D001-2-N
462	"	6.0	2.7	15.5	"	S D001-1-II下~VI
463	"	6.7	5.1	23.0	"	"
464	"	4.5	2.4	5.9	"	S D001-2-I・II上
465	"	6.0	4.0	21.5	"	S D001-3-VI~IX
466	石磨丁	(4.1)	(2.8)	(7.7)	安山岩	S D001-2-I・II上
467	不整形石器	3.0	1.7	3.2	"	"
468	"	2.8	1.8	1.9	"	S D001-1-II下~VI
469	石磨丁	(14.4)	3.9	61.6	粘板岩	S D001-2-VI
470	"	(8.1)	5.3	(44.1)	"	S D001-3-VI
471	"	(11.0)	5.2	(52.2)	"	S D001-4
472	"	(3.8)	(4.6)	(17.2)	"	S D001-2-II下
473	"	(5.2)	(3.7)	(11.3)	"	S D001-1-II下~VI
474	"	11.7	4.9	56.4	"	"
475	"	(8.3)	(4.8)	(35.4)	"	S D001-3-II下・IV・VI
476	"	(11.0)	4.7	(78.7)	"	S D001-4-II上
477	"	(4.2)	(3.9)	(10.1)	ホルンフェルス	"
478	"	(3.8)	(3.3)	(4.1)	粘板岩	S D001-1-I・II上
479	"	12.0	7.2	95.4	"	S D001-4
480	"	(5.6)	(4.6)	(25.7)	ホルンフェルス	耕作土
481	"	10.7	5.7	72.3	粘板岩	S D001-3-II下・IV・VI
482	"	(5.1)	(3.2)	(12.3)	"	S D001-1-II下~VI
483	"	(7.1)	(4.3)	(24.7)	"	耕作土
484	磨製石斧	19.9	5.4	(255.3)	緑泥片岩	S D001-2-VI
485	"	(7.3)	(4.5)	(18.1)	"	S D001-2-II下
486	"	(6.4)	(5.2)	(81.3)	"	S D001-3-II下・IV・VI
487	"	(9.0)	(2.8)	(41.2)	"	S D001-2-I・II上
488	"	9.0	1.5	29.4	"	S D001-1-II下~VI
489	"	5.2	3.0	(26.4)	"	耕作土
490	"	(4.9)	(1.9)	(9.4)	"	"
491	"	(3.3)	(5.5)	(41.4)	輝綠岩	S D001-2-VI
492	"	(11.5)	(6.6)	(519.7)	緑泥片岩	S D001-1-II下~VI
493	"	(9.1)	(6.2)	(359.4)	ホルンフェルス	"



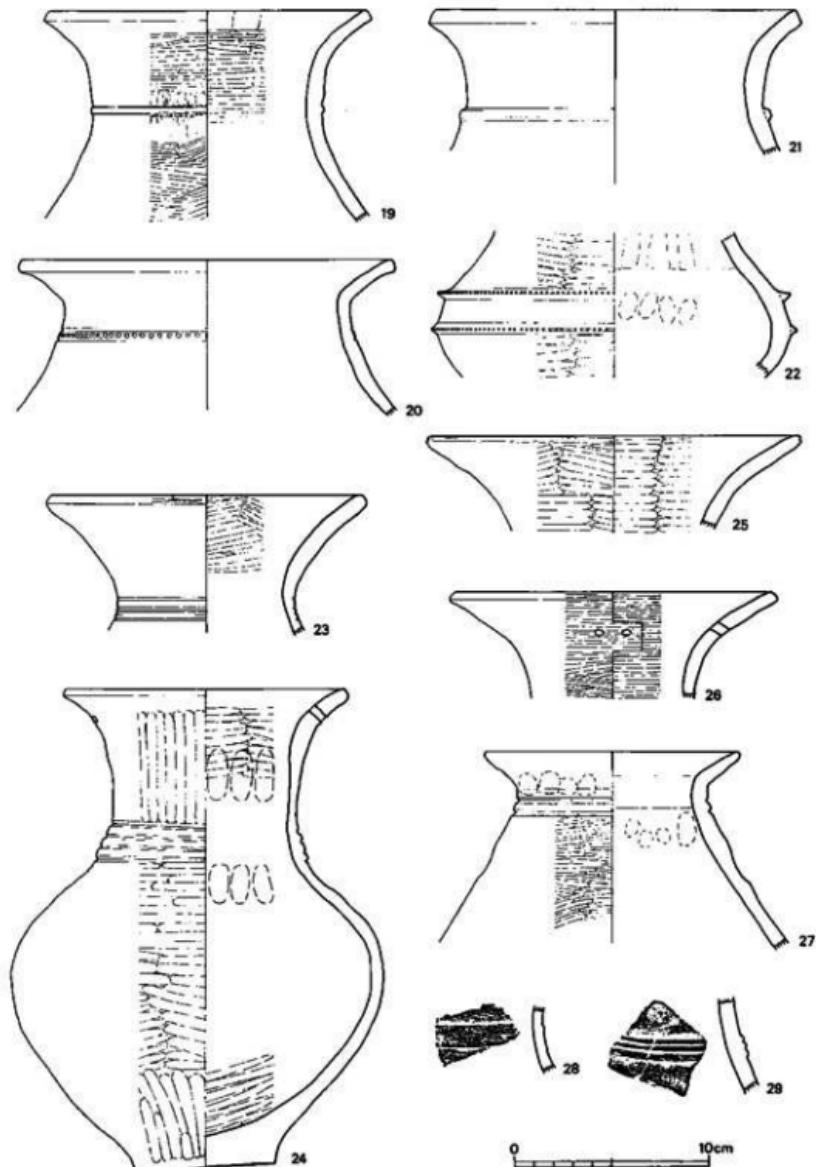
第1図 大宮遺跡地区割図 (1:2000)



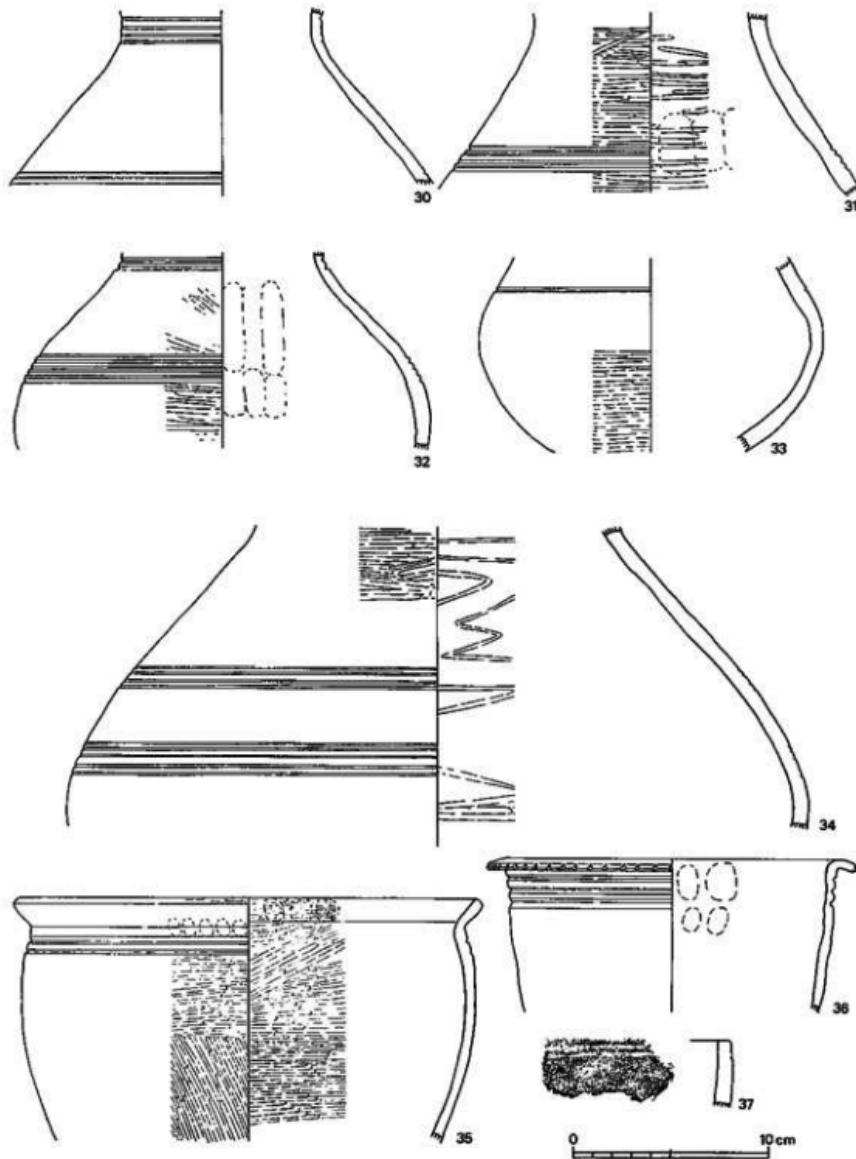
第8図 SD001区層出土土器実測図 (1:3)



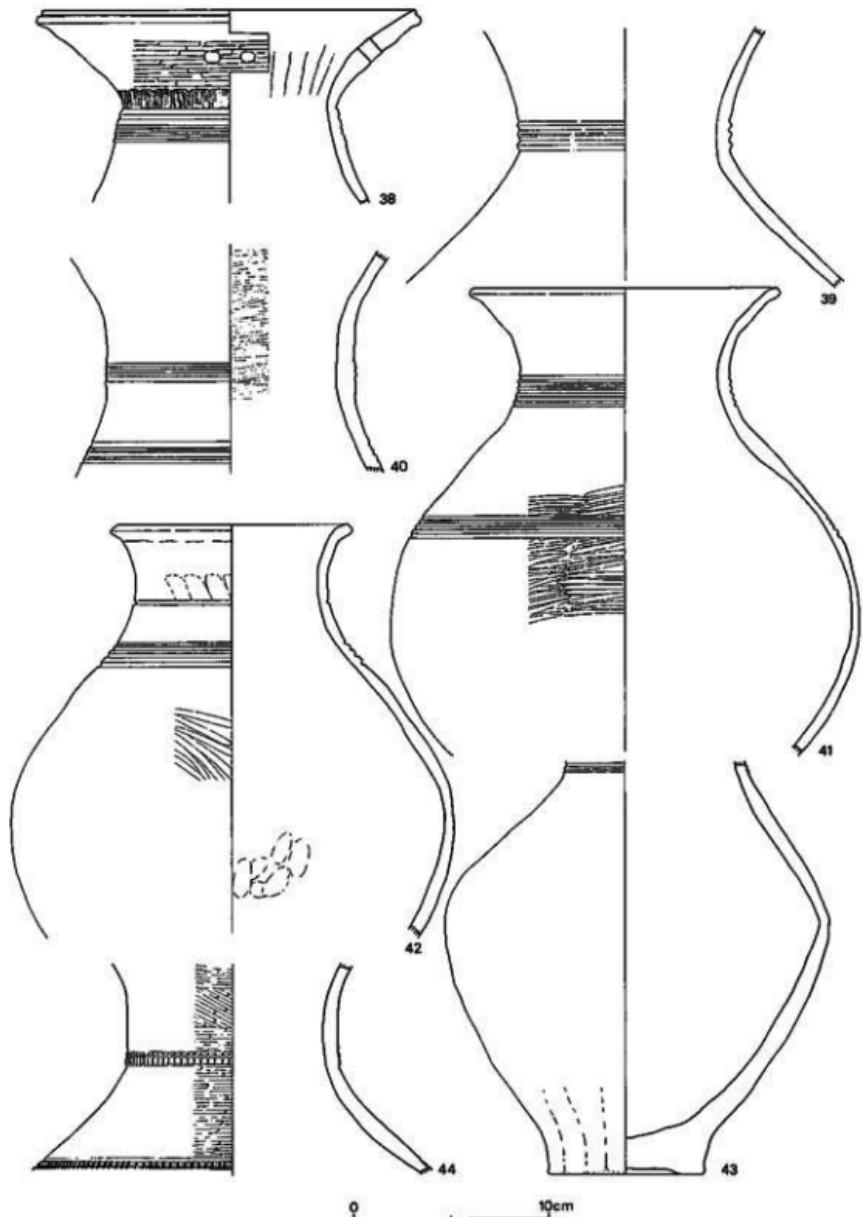
第9図 SD001K (9~14), VII・K (15~18) 層出土土器実測図 (1:3)



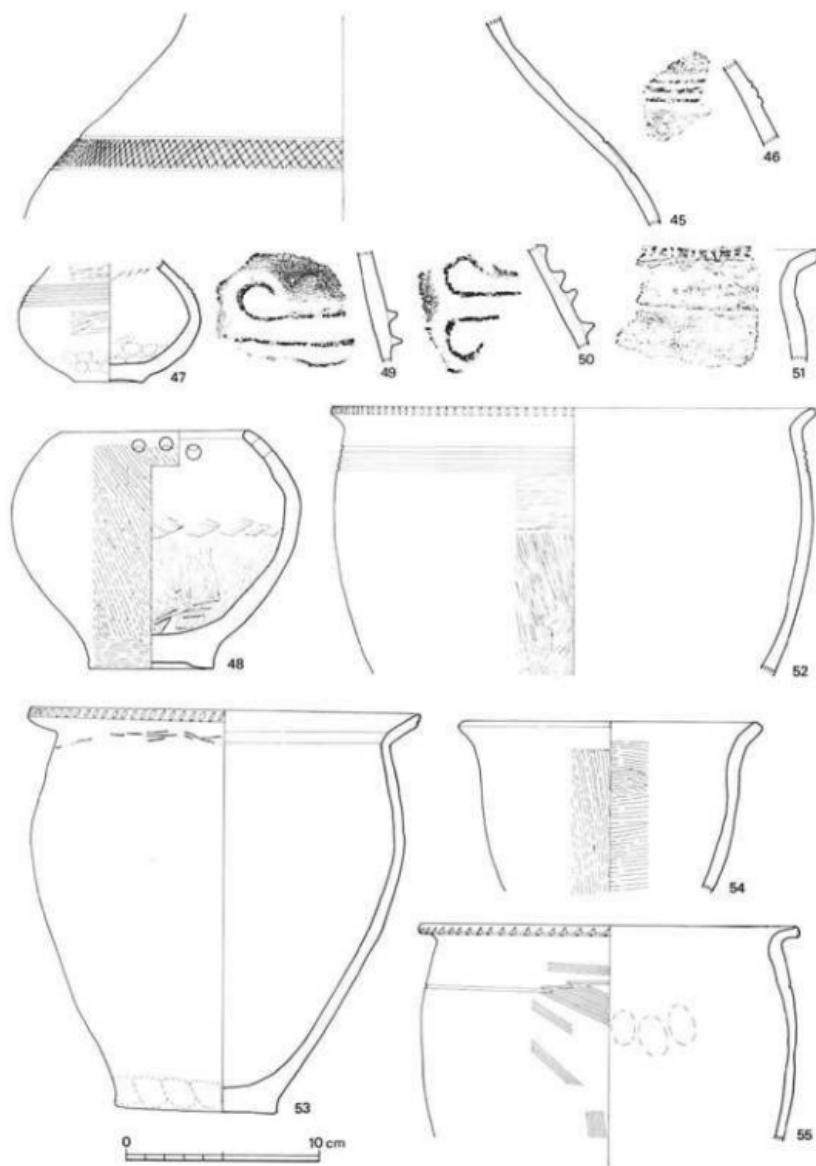
第10図 SD001層・K (19~22), 墓 (23~29) 層出土土器実測図 (1:3)



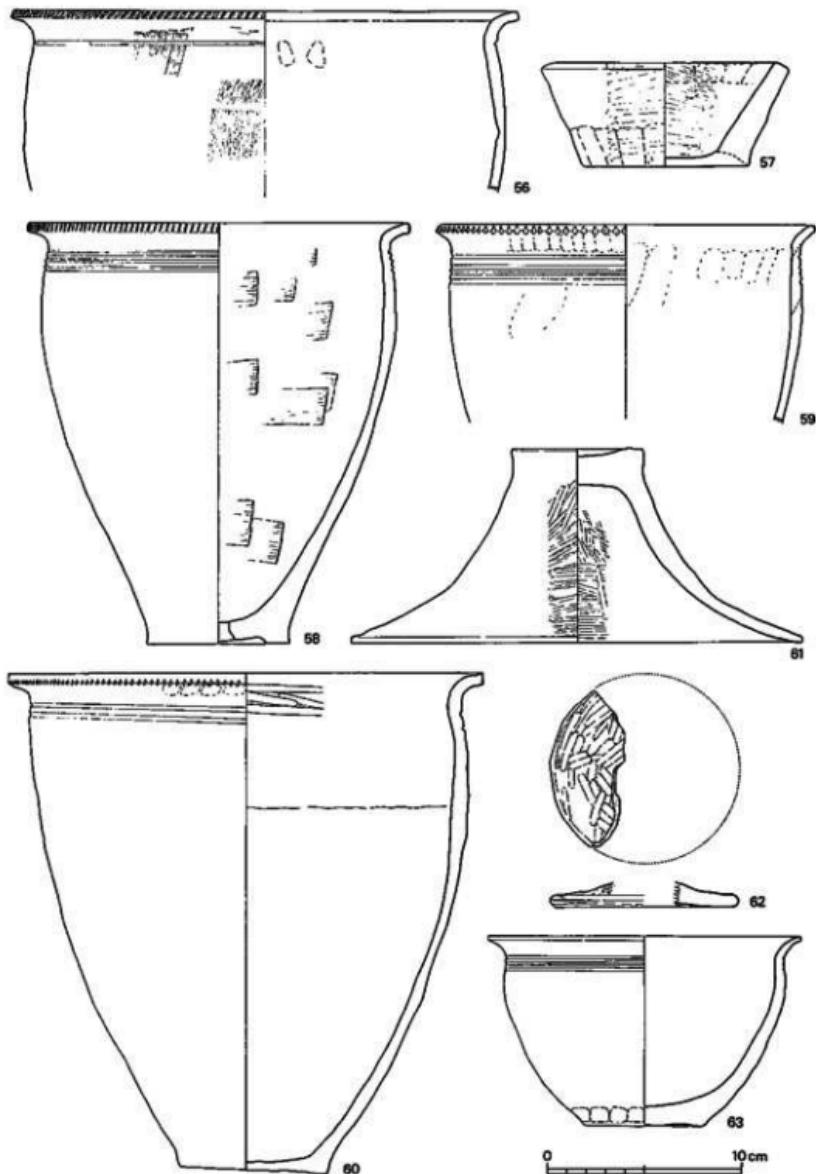
第11図 S D001埴器出土器実測図 (1 : 3)



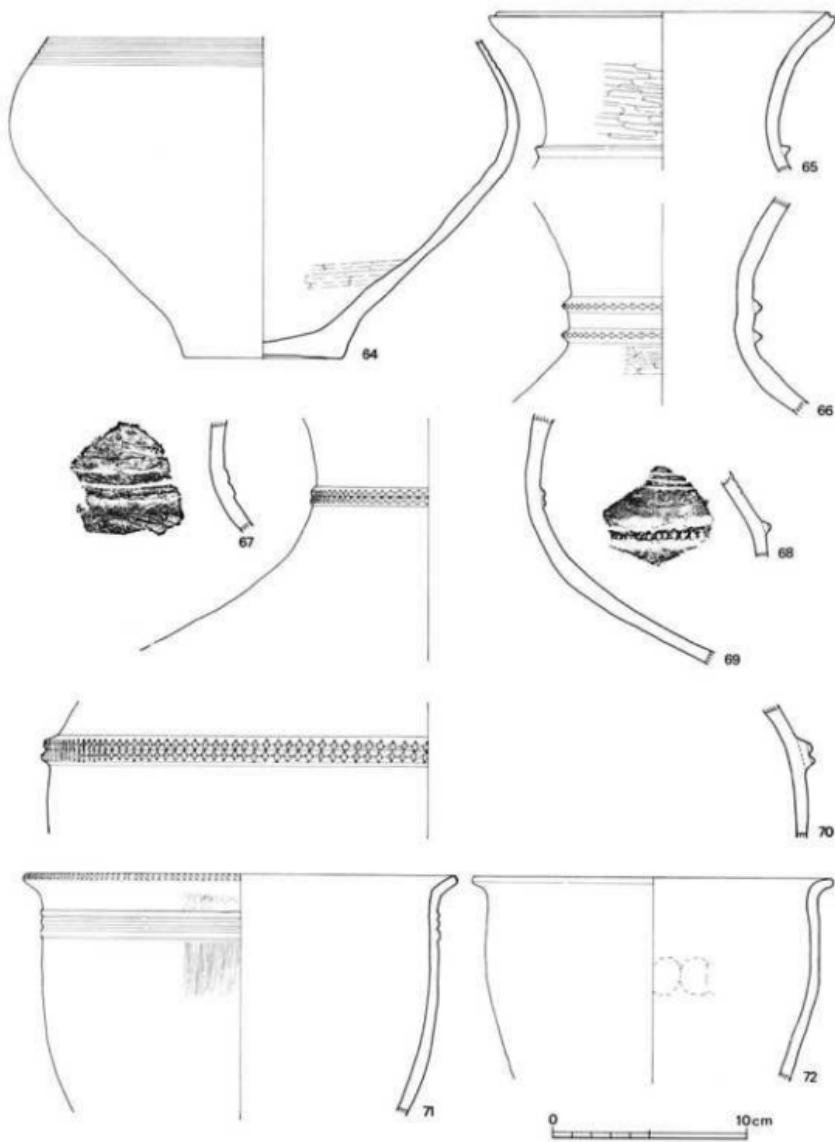
第12図 SD001 VII層出土土器実測図(I) (1 : 3)



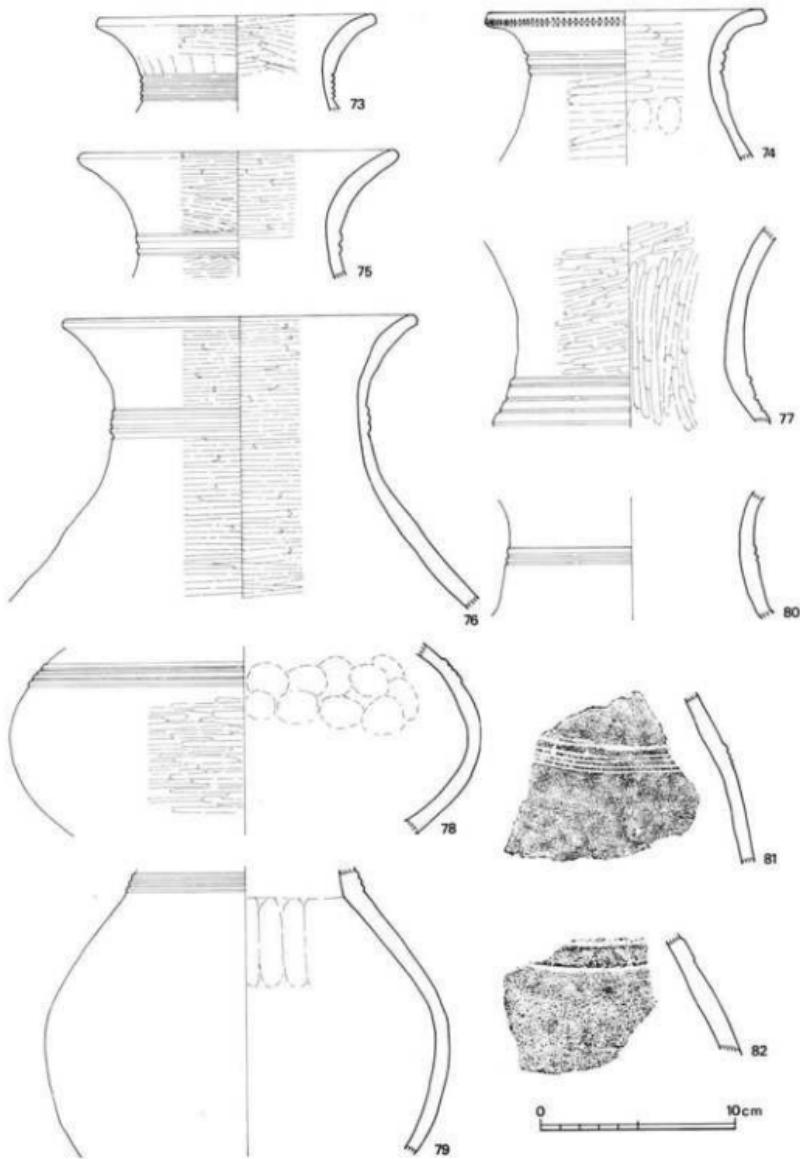
第13図 SD 001 VII層出土土器実測図(2) (1 : 3)



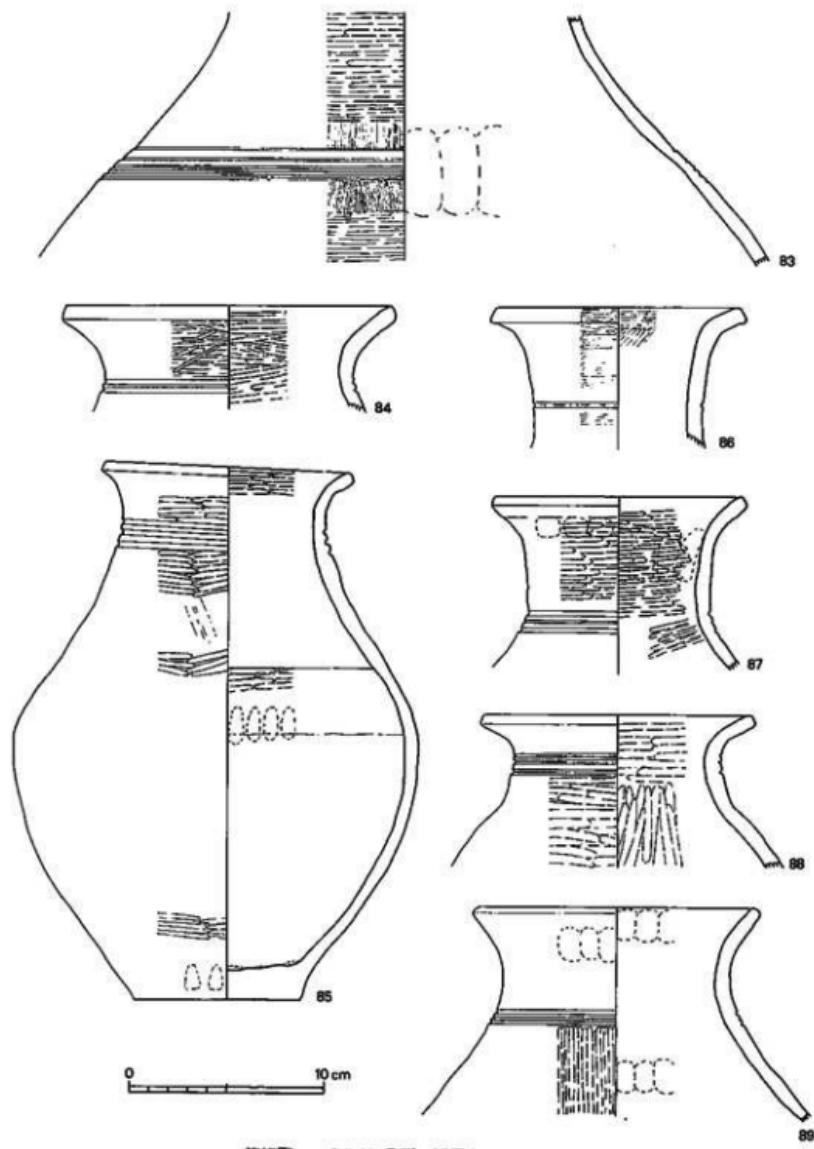
第14図 SD001層出土土器実測図(3) (1:3)



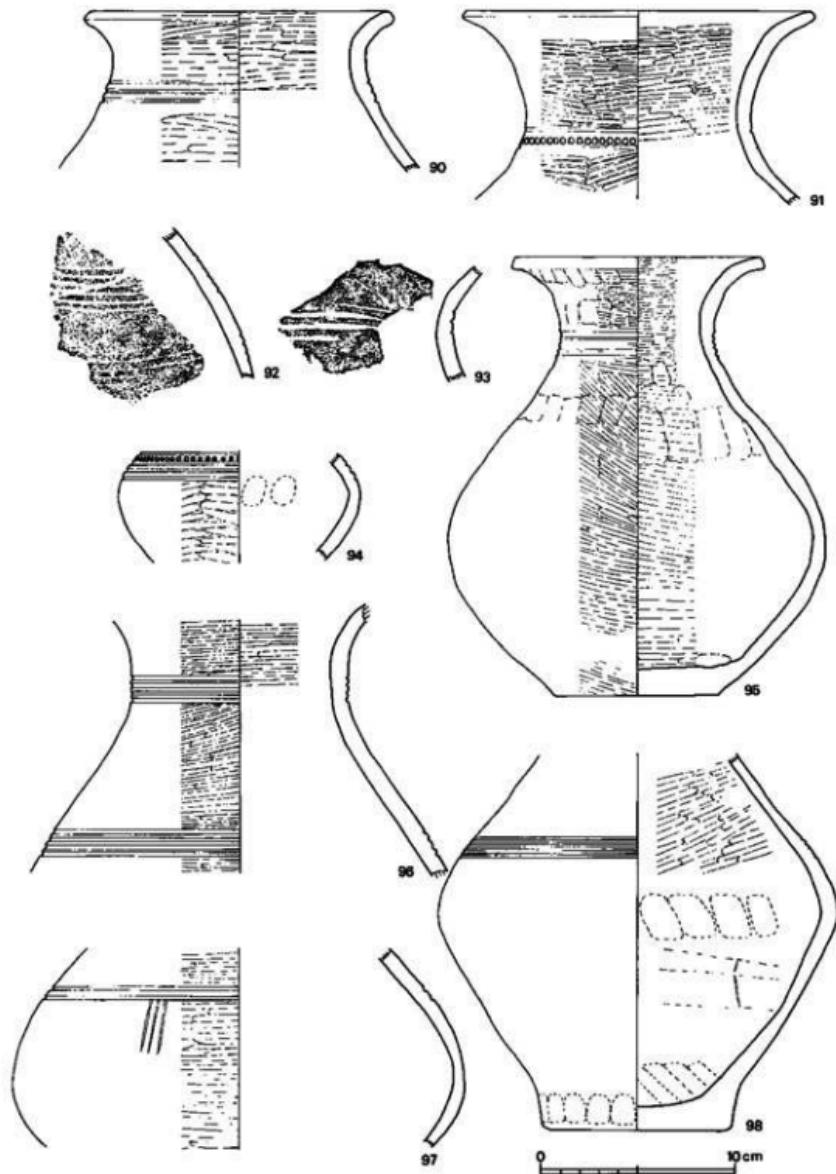
第15図 SD001V～VI層出土土器実測図 (1:3)



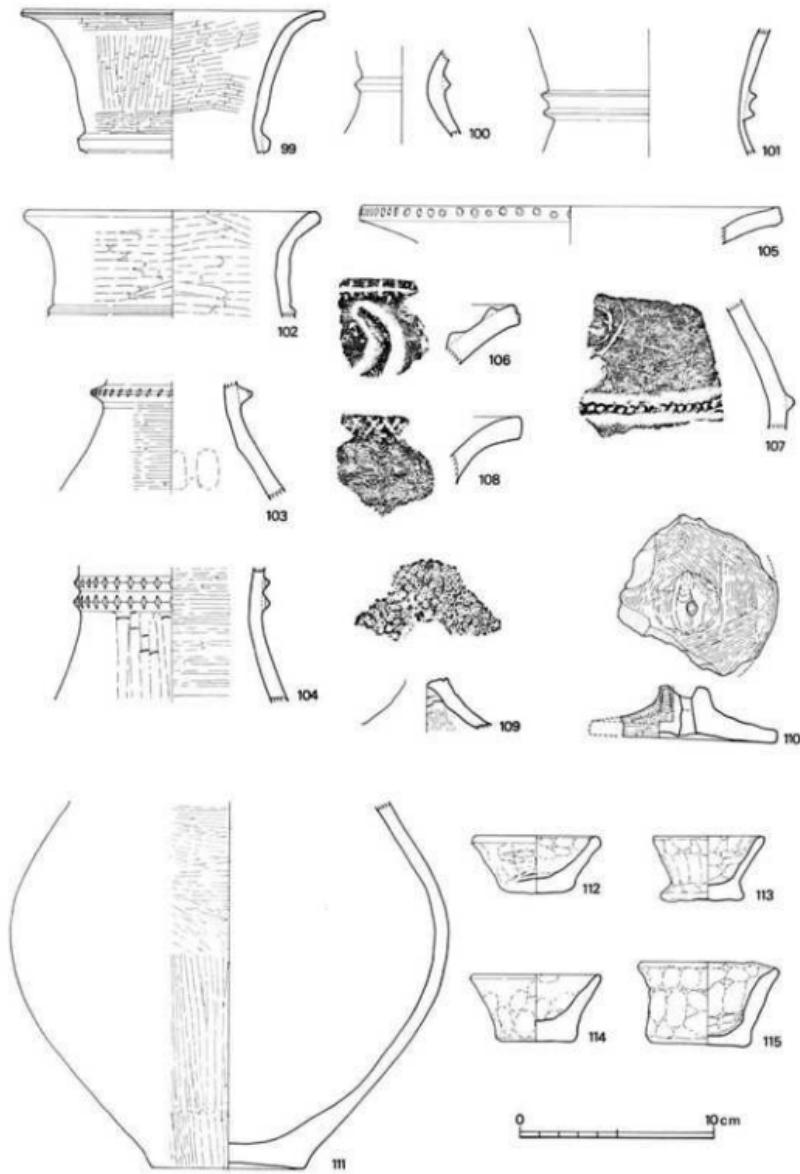
第16図 SD001 II下～Ⅳ層出土土器実測図(1) (1:3)



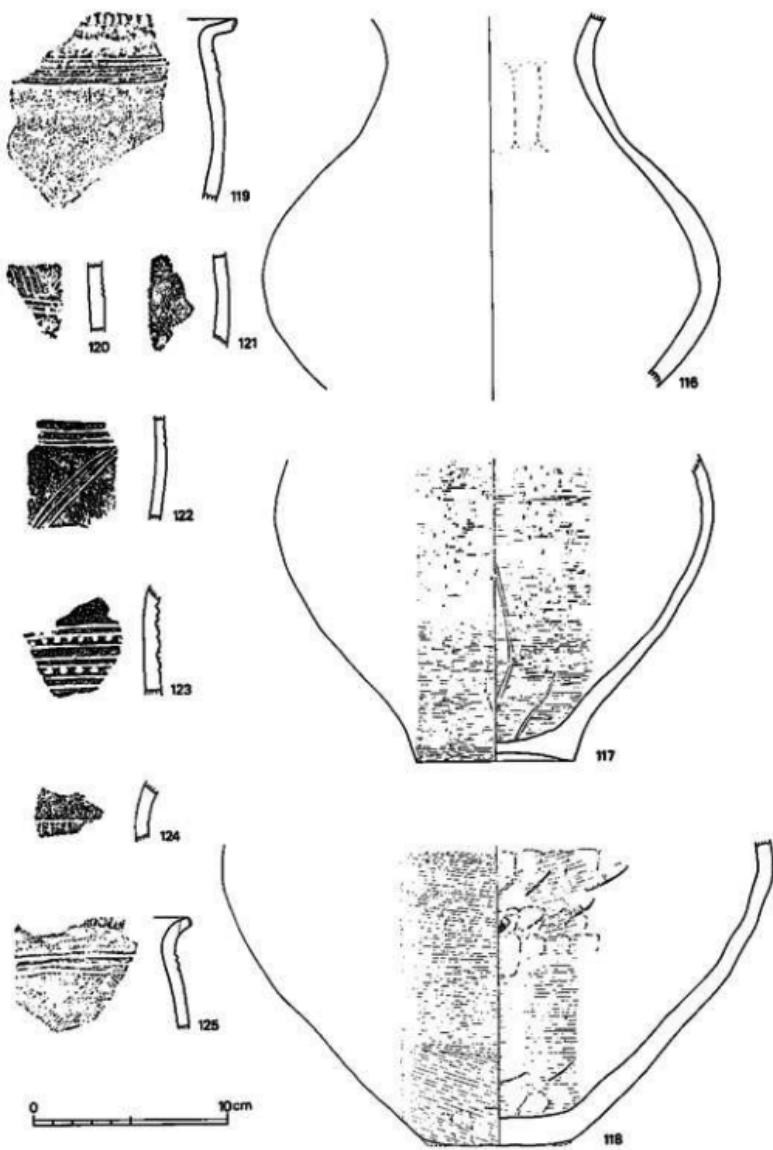
第17圖 SD001 II 下～Ⅳ層出土土器実測図(2) (1:3)



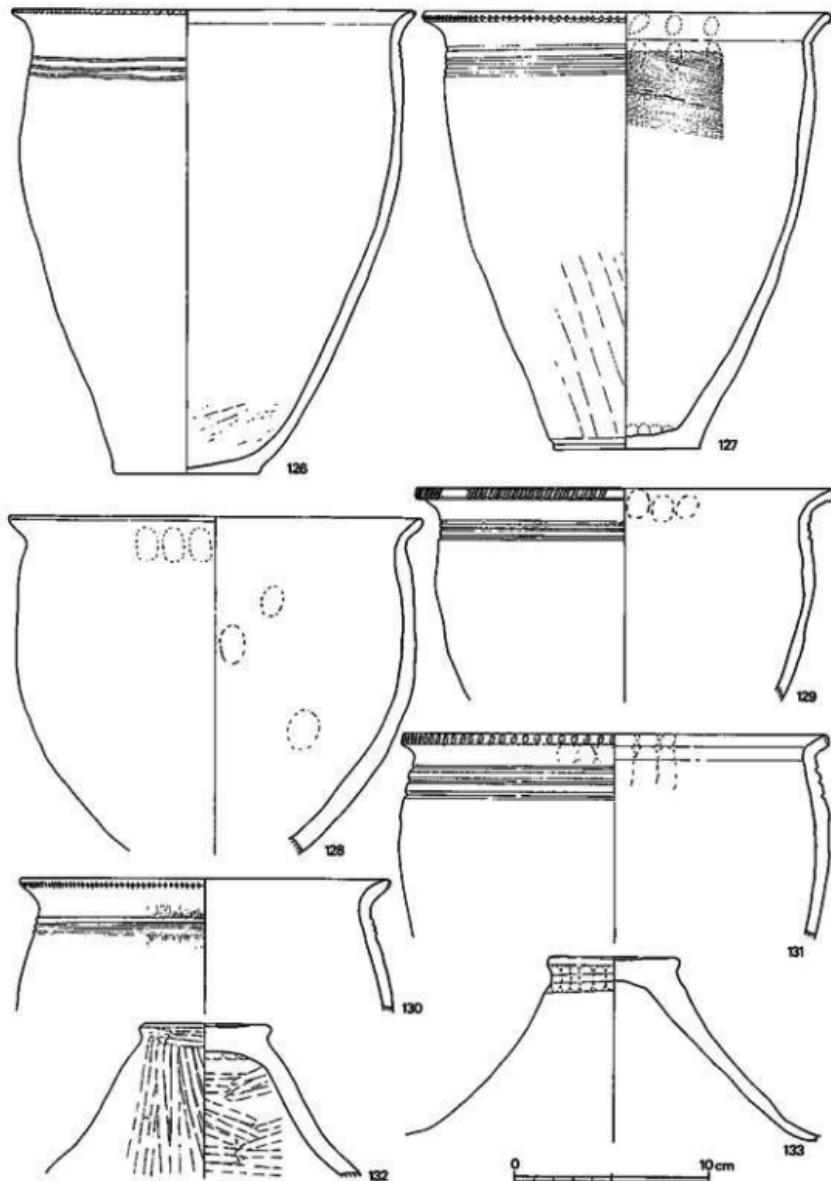
第18図 S D001 II下～Ⅴ層出土土器実測図(3) (95±Ⅴ層) (1:3)



第19図 S D001 II下～VII層出土土器実測図(4) (1:3)



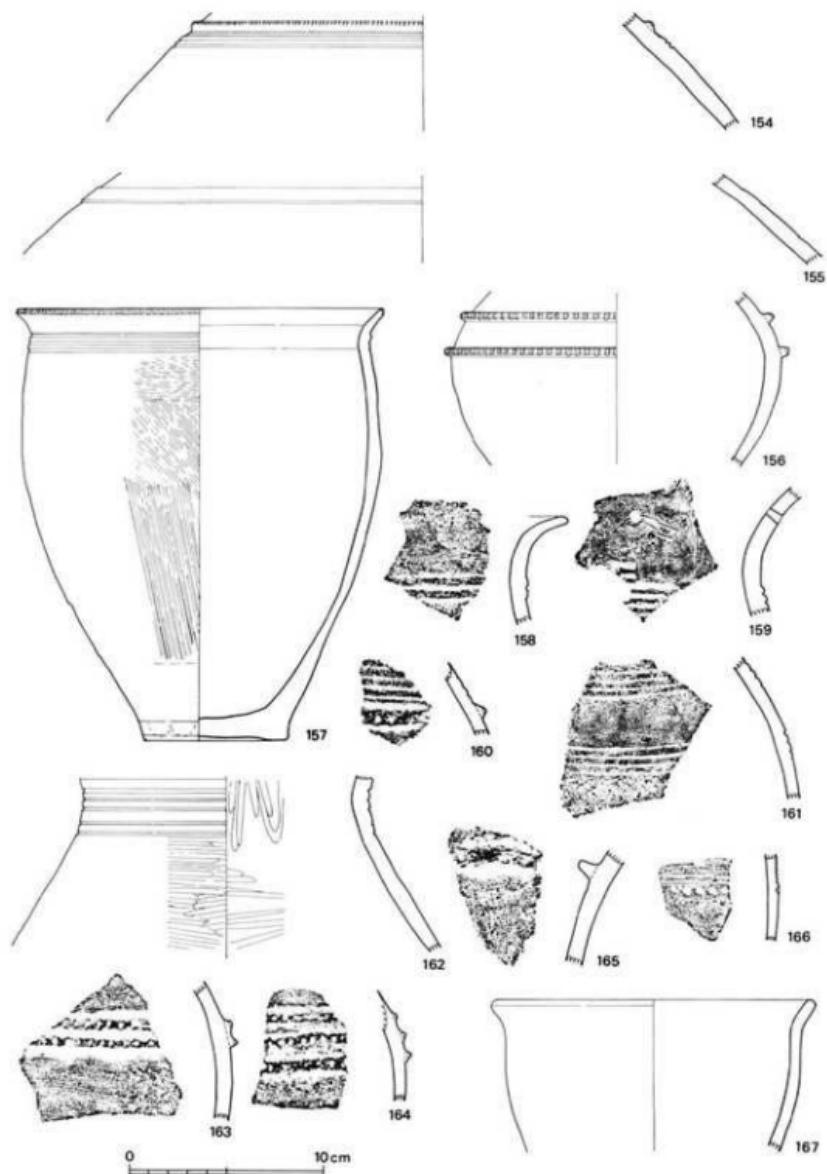
第20図 SD001 II ~ VI層出土土器実測図(5) (1 : 3)



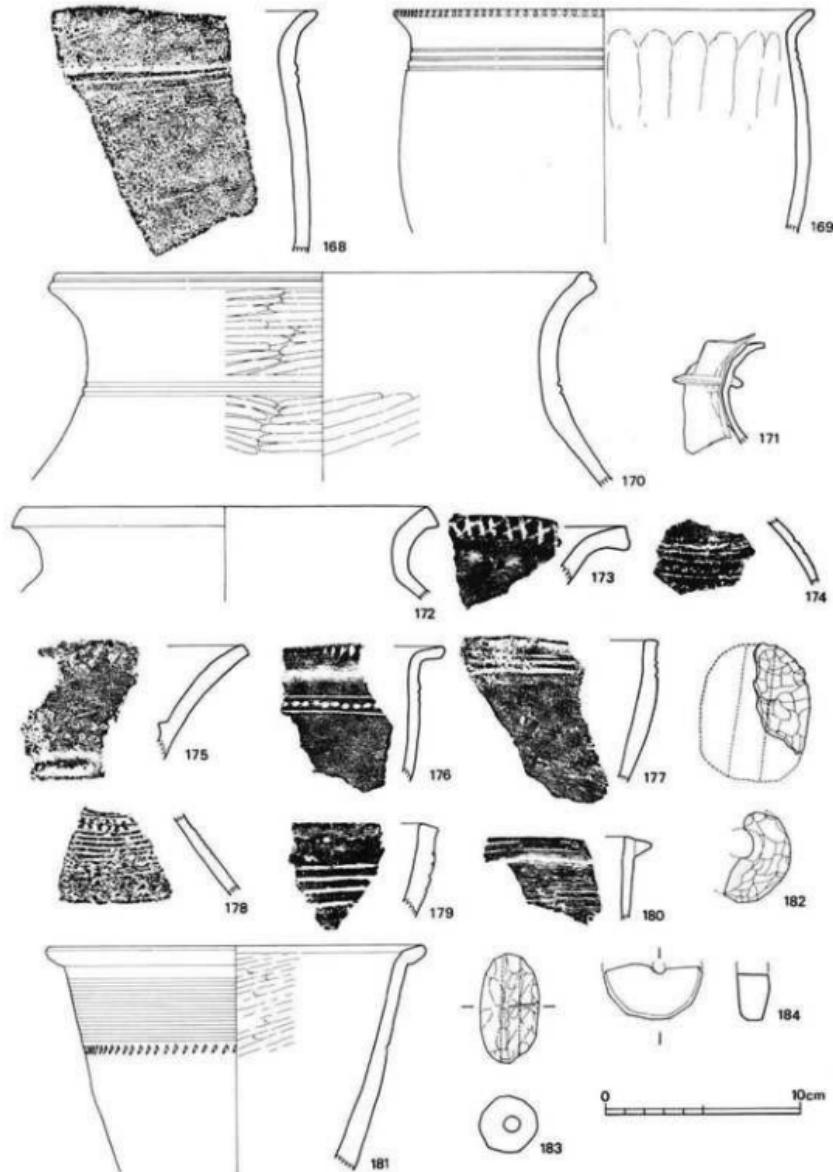
第21図 SD 001 II 下～Ⅶ層出土土器実測図(6) (1 : 3)



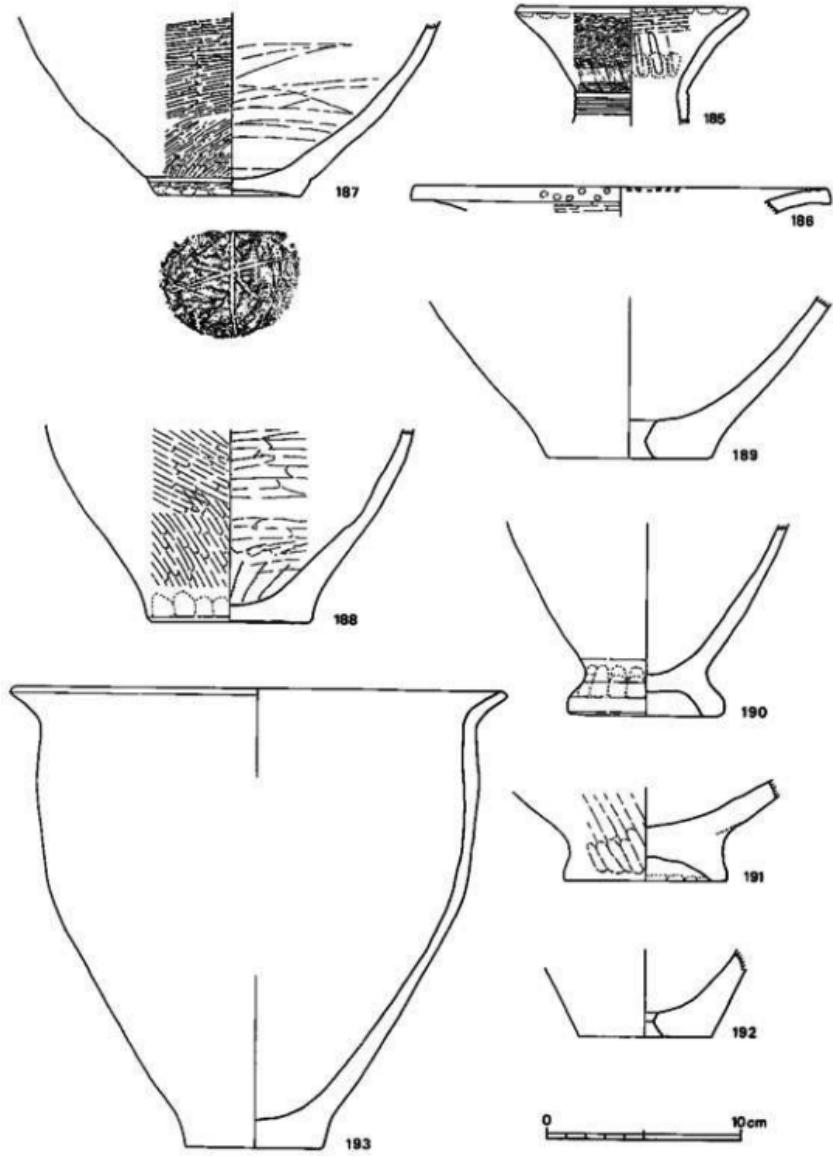
第22図 S D 001Ⅲ (134~142), Ⅲ・Ⅱ上 (143~148), Ⅱ下 (149~153) 層出土土器実測図 (1:3)



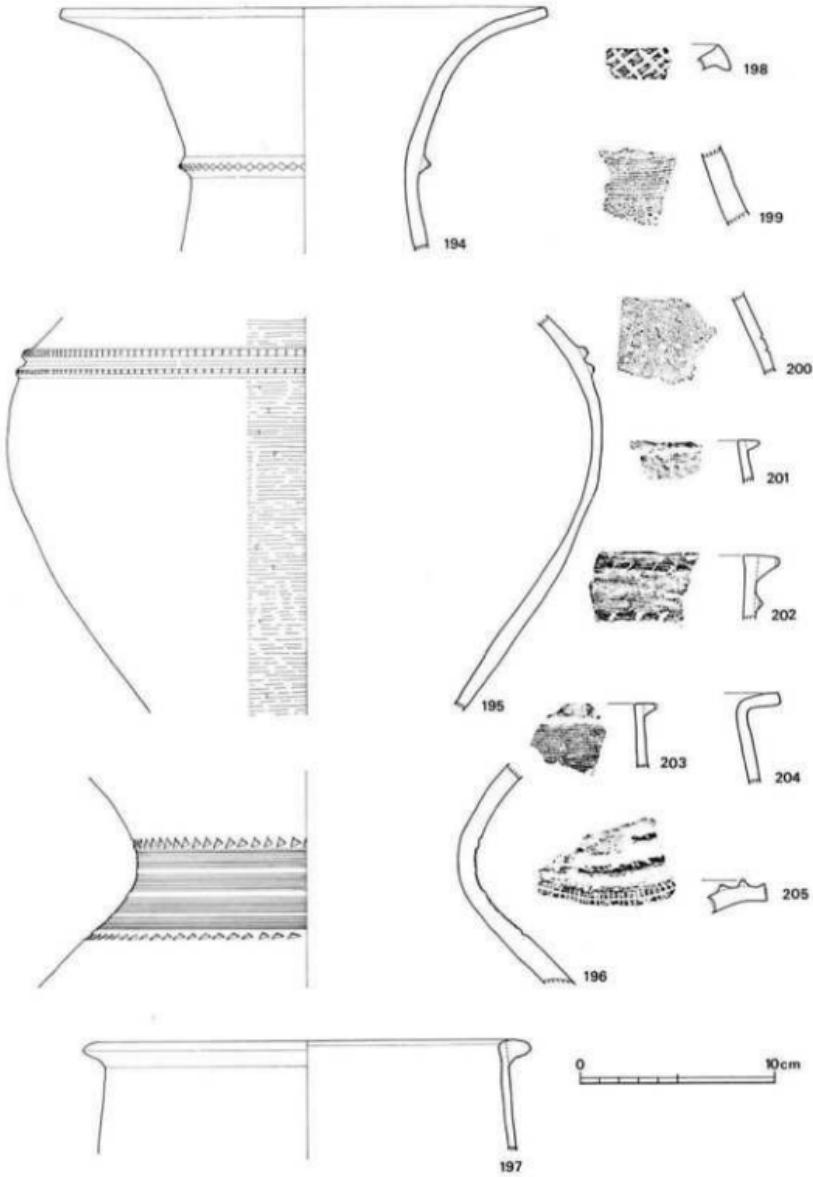
第23図 SD 001Ⅱ下 (154~156), Ⅱ上 (158~167) 層出土土器実測図 (157はⅡ層) (1:3)



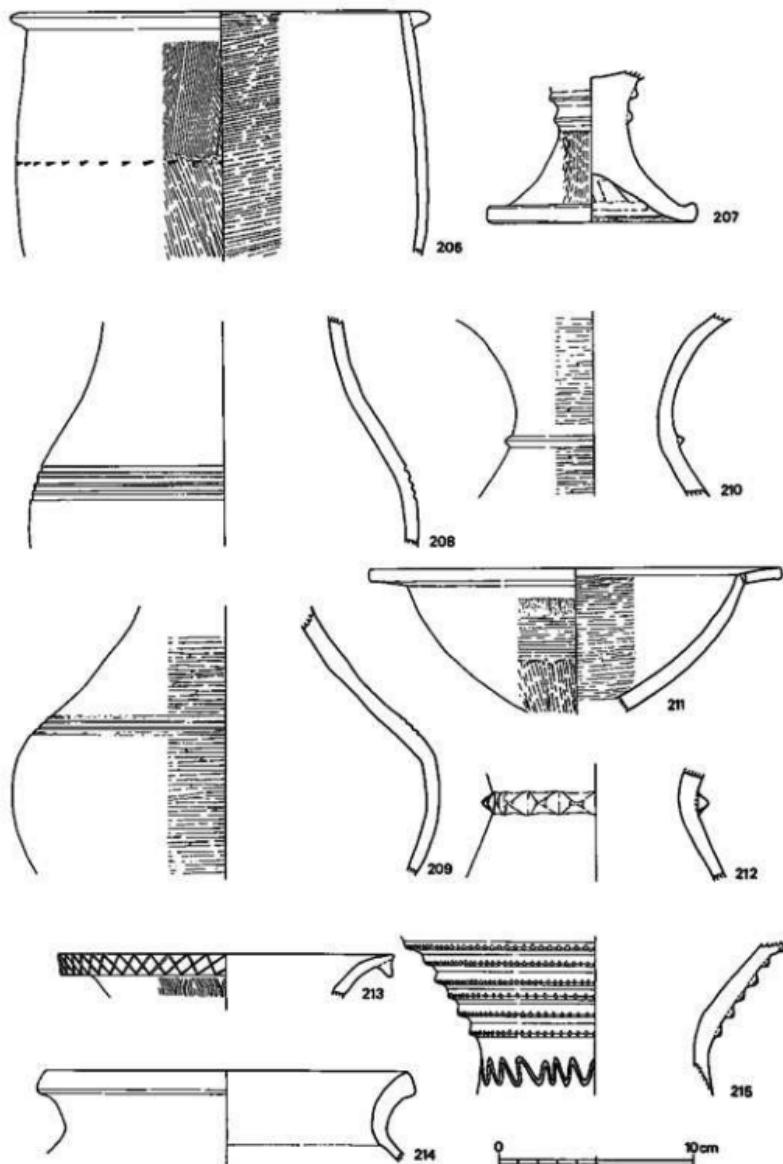
第24図 SD001Ⅱ上(168~170), I+Ⅱ上(172~181)層出土土器, SD001出土土製品(182~184) 実測図(170はⅢ層)(1:3)



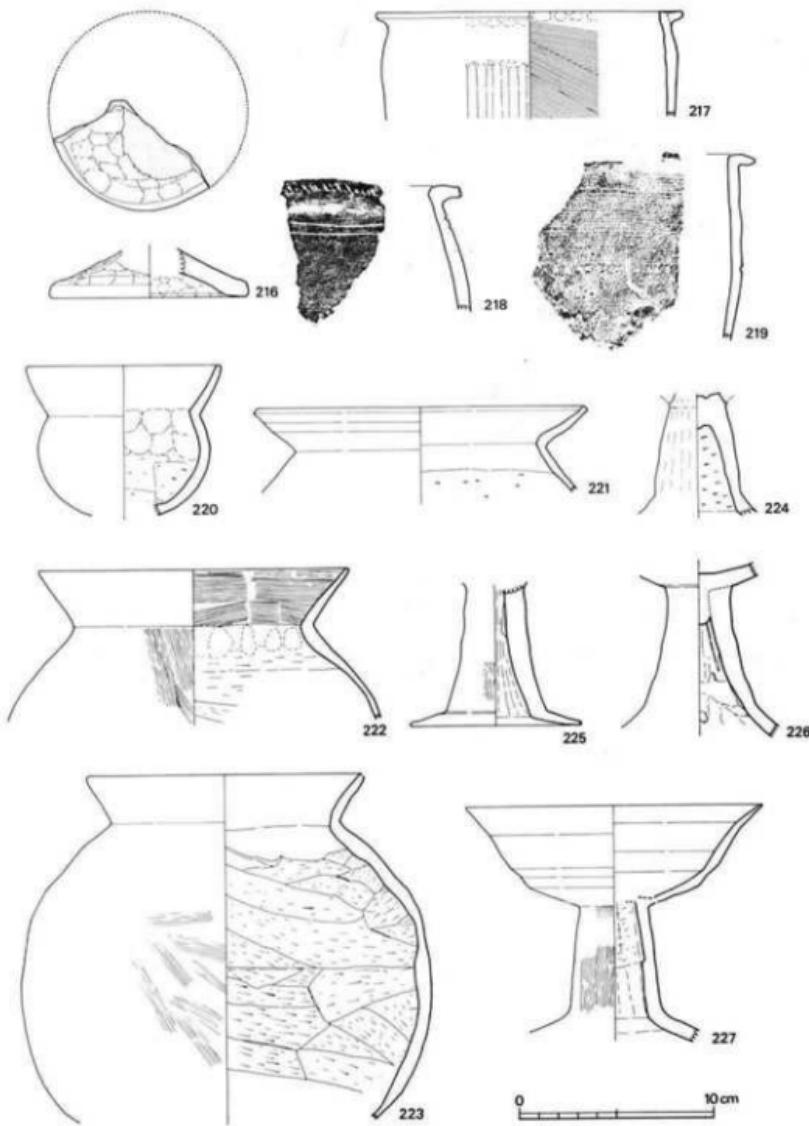
第25図 SD001 (185~192), SK3011 (193) 出土土器実測図 (1:3)



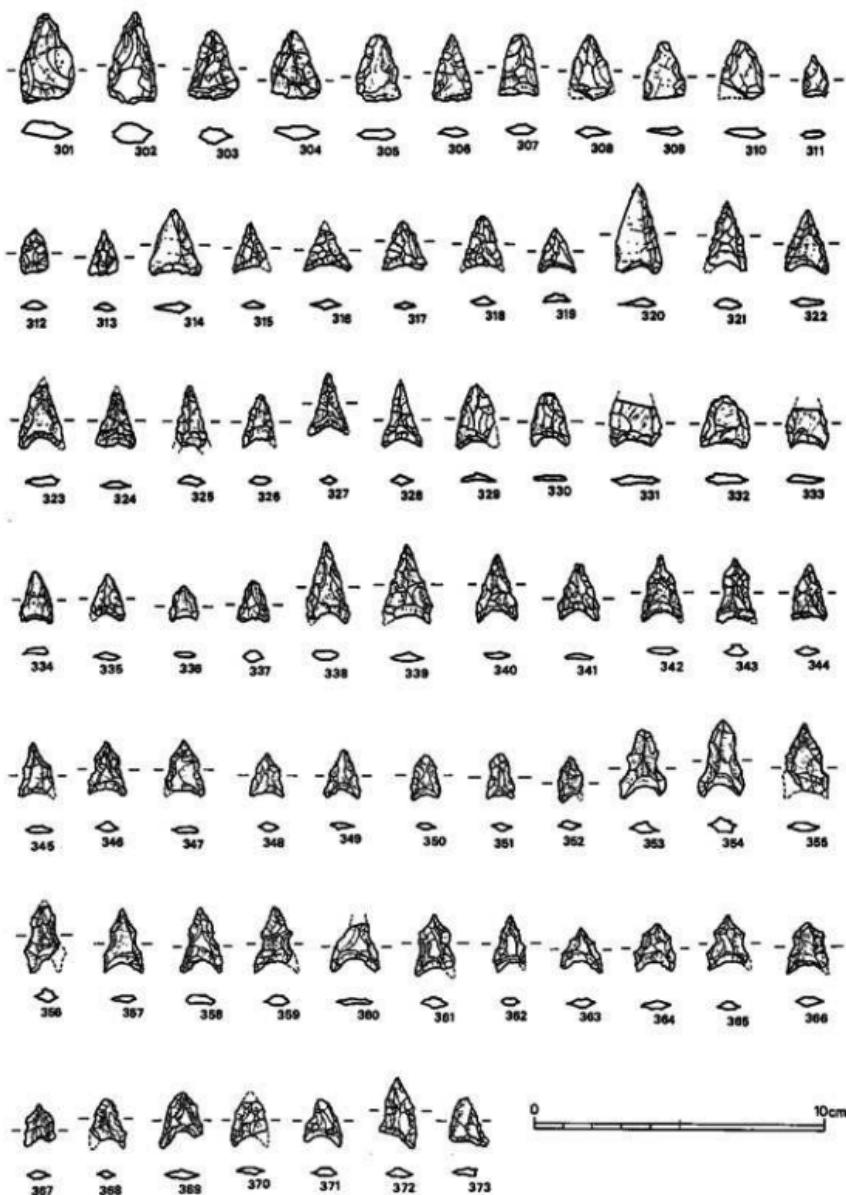
第26図 SK3011 (194, 195), SK3007 (196~201), SX3004 (202), SX3007 (203~205)
出土土器実測図 (1:3)



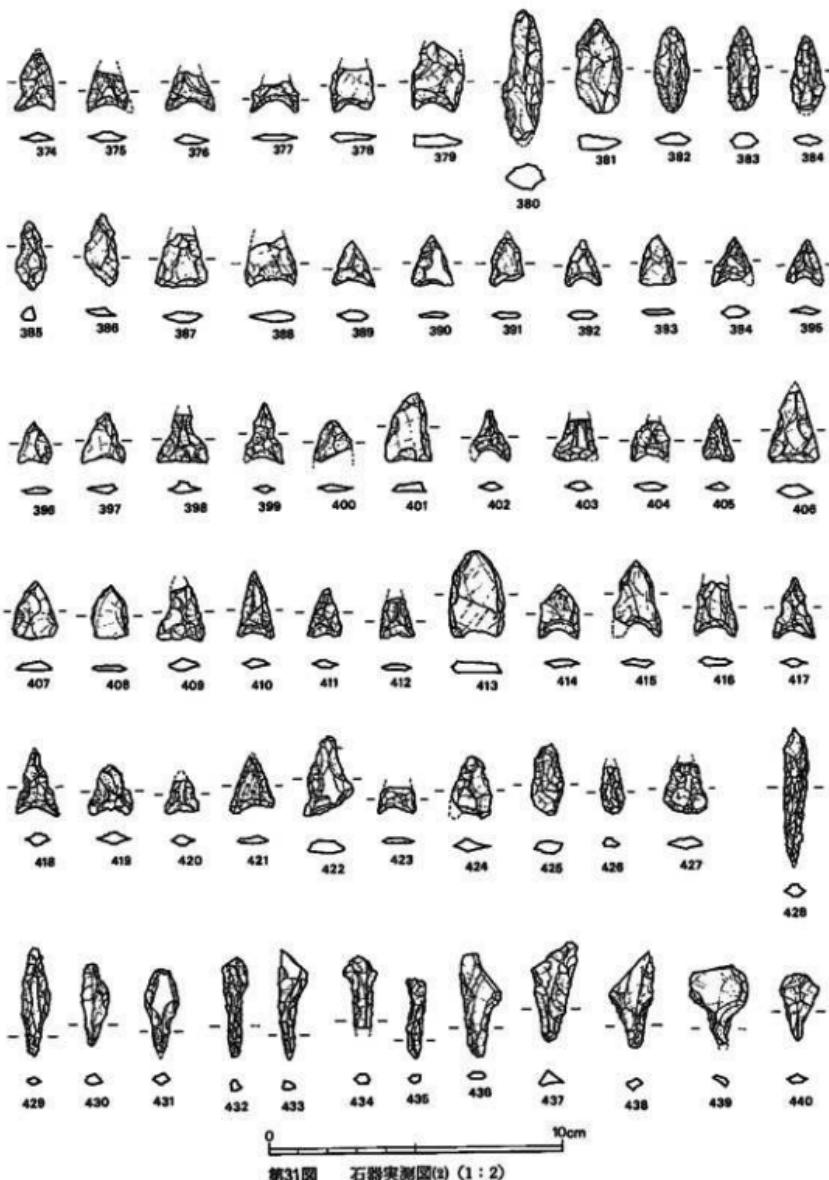
第27図 SK3007 (206, 207), SK3008 (208~210), SX3004 (212), SX3007 (211),
調査区 (213~215) 出土土器実測図 (1 : 3)



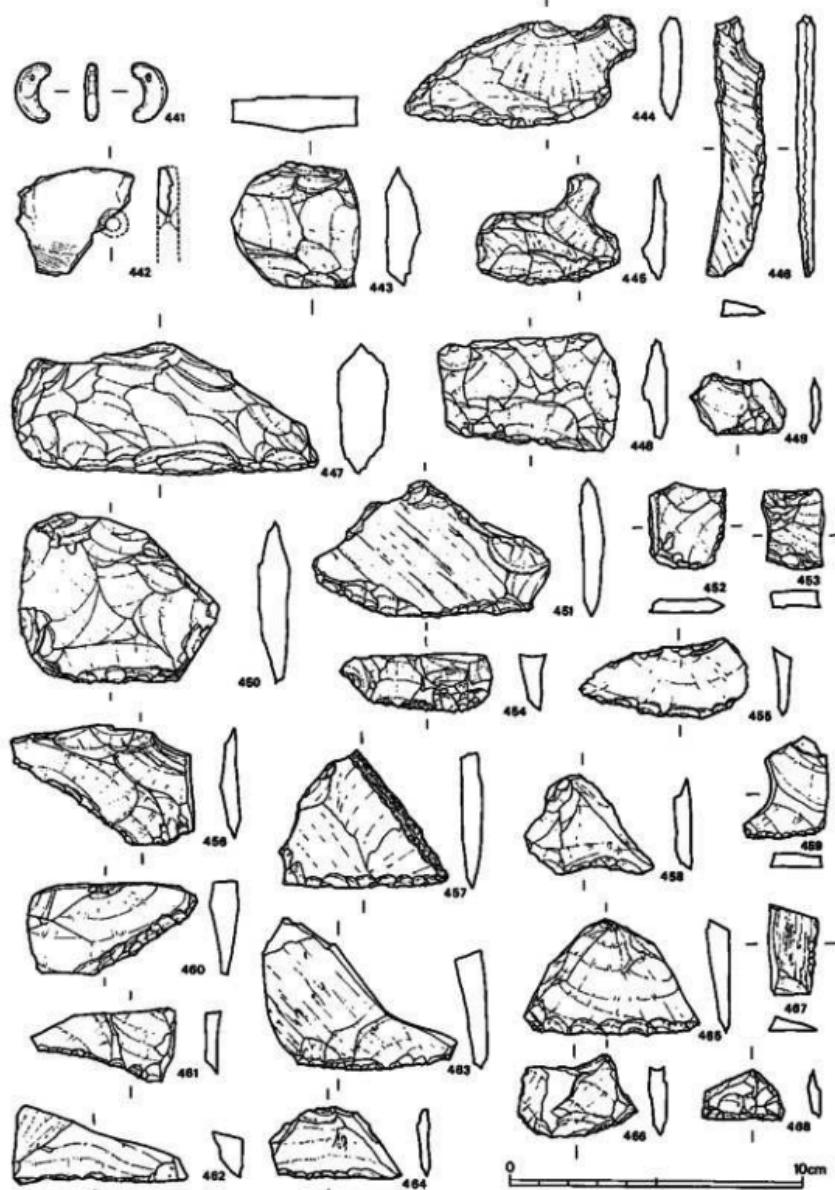
第28図 調査区(216~219)、住居跡内(220~227)出土土器実測図(1:3)



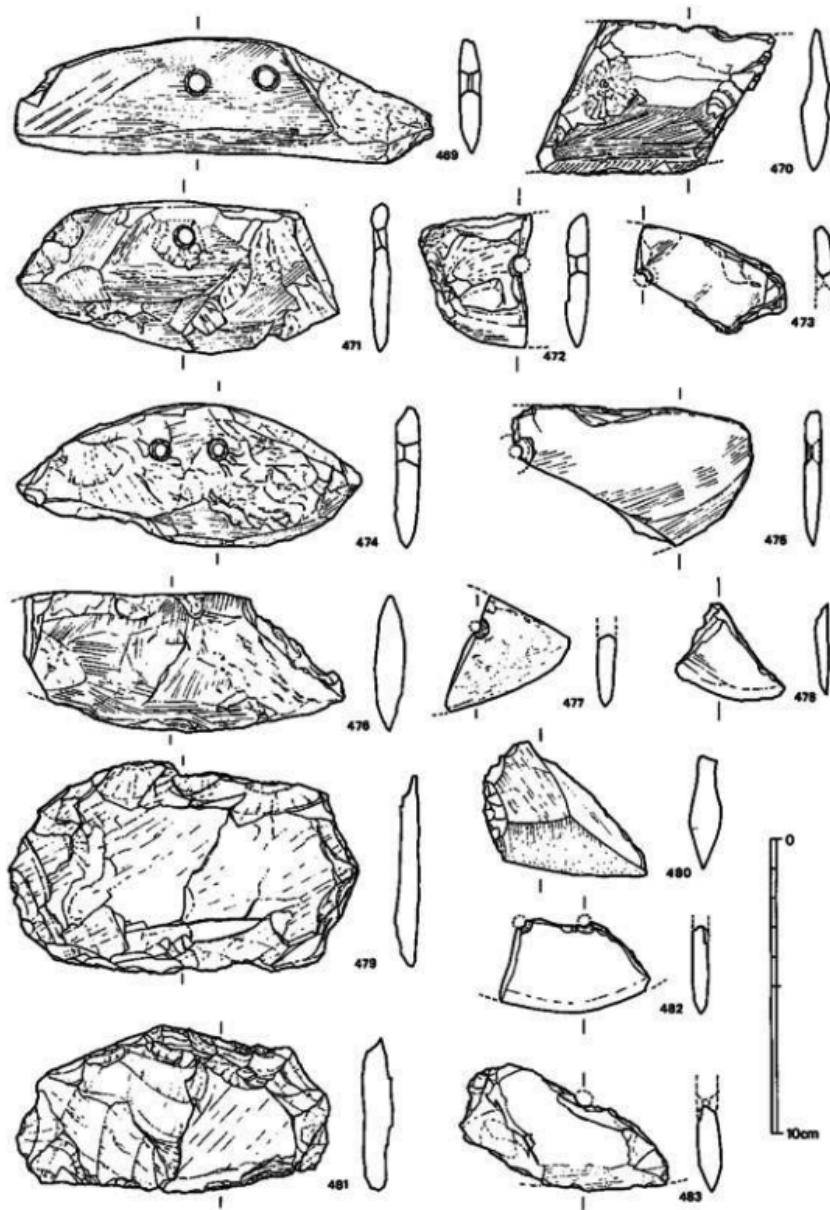
第30圖 石器実測図(1) (1 : 2)



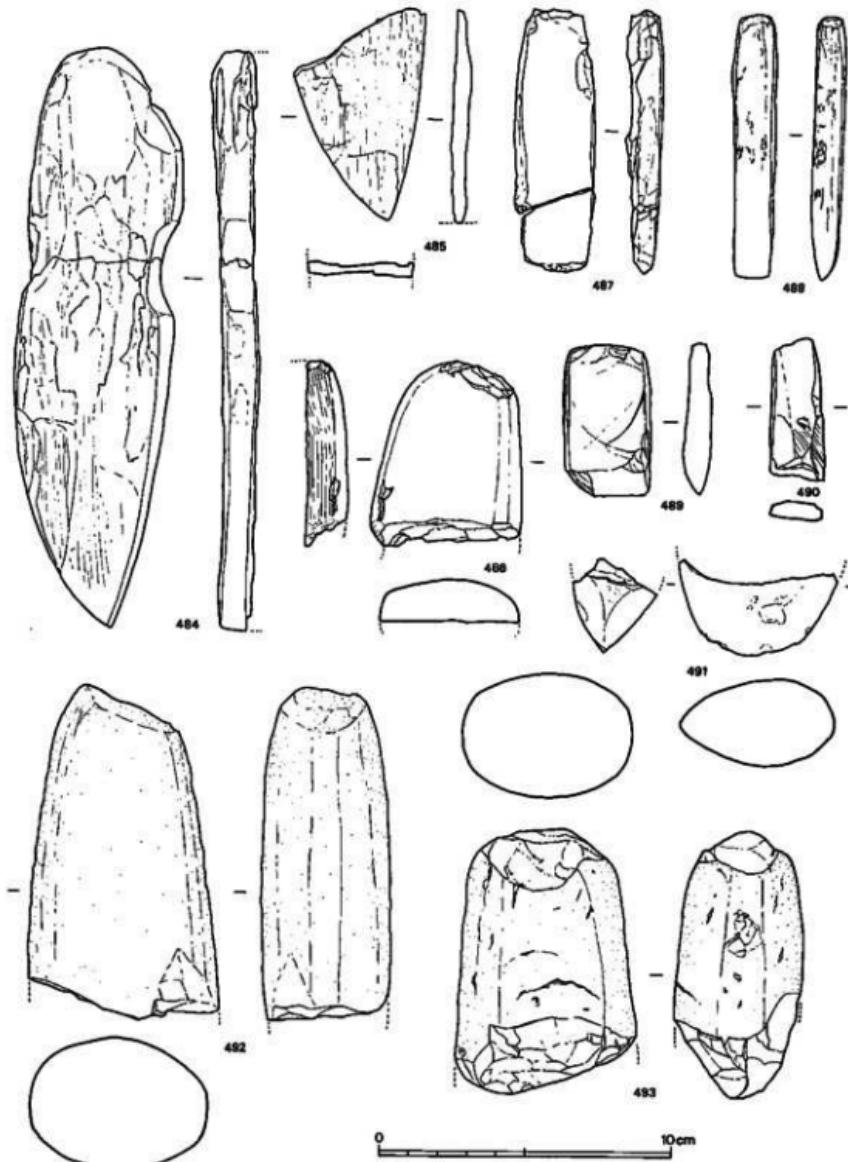
第31図 石器実測図(1) (1 : 2)



第32圖 石器實測圖(3) (1 : 2)



第33図 石器実測図(4) (1 : 2)



第34圖 石器実測図(5) (1 : 2)

図 版



a 22区調査区全景（南より）



b 同上（北西より）



上 SD001 (東より) 中 SD001断面 (C-C') 下 同上 (D-D')



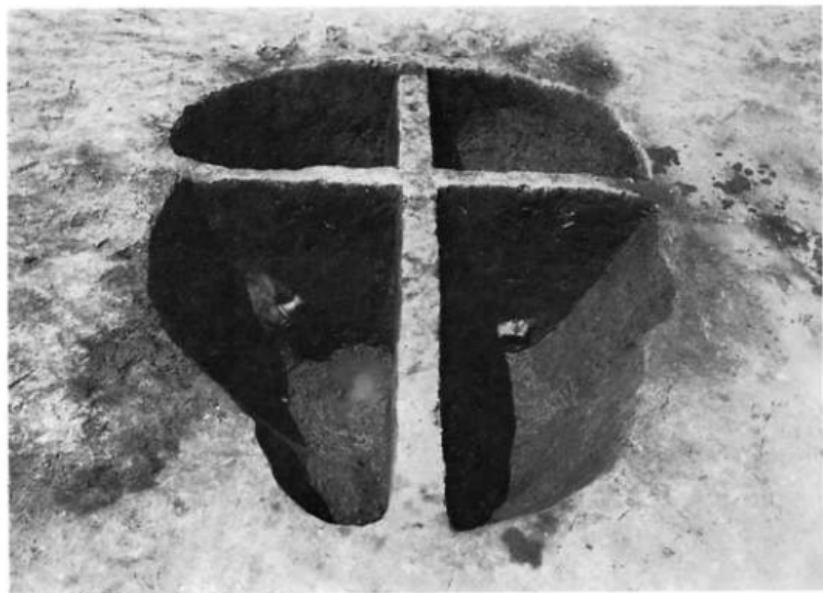
a SD 001, 1区遺物出土状態 (VII層相当層)



b 同上 2区遺物出土状態 (VII層)



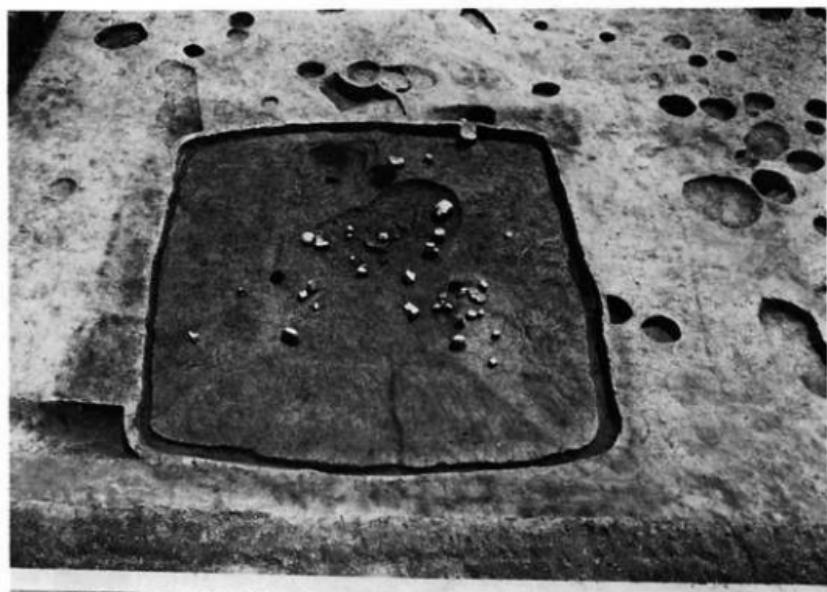
a SK3003 (北より)



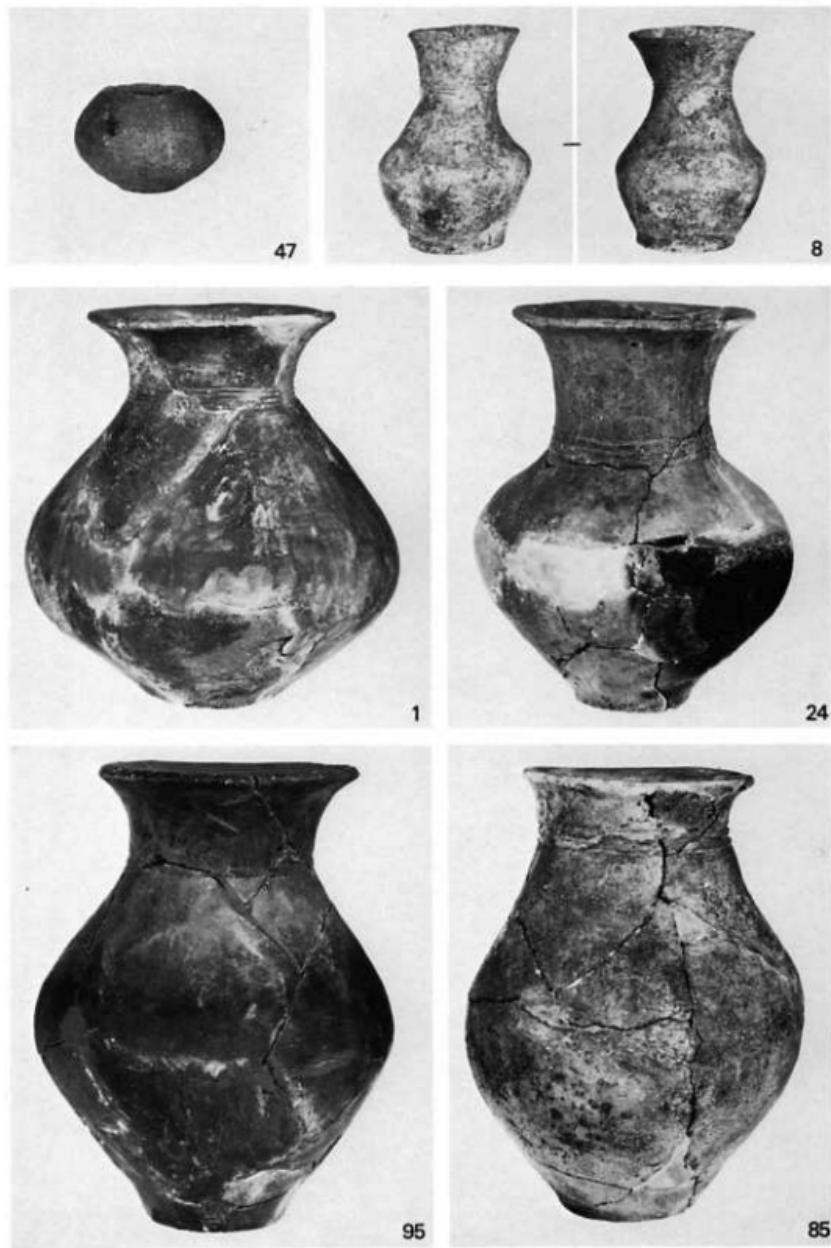
b SK3007 (南より)



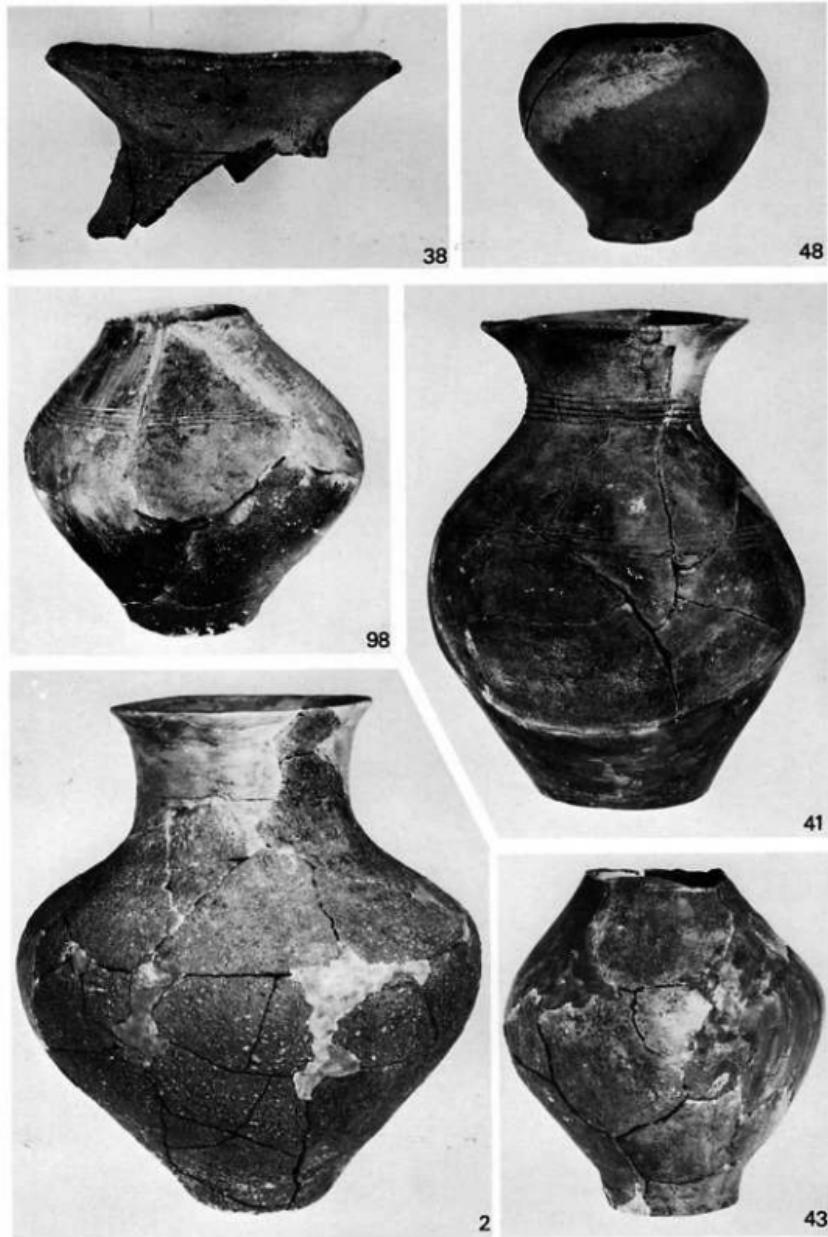
a SK 3011 (北より)



b 住居跡 (西より)



S D 001出土土器(1)



S D001出土土器(2)



185



87



90



23



89



91



42



76



66



40



170



96



97



209

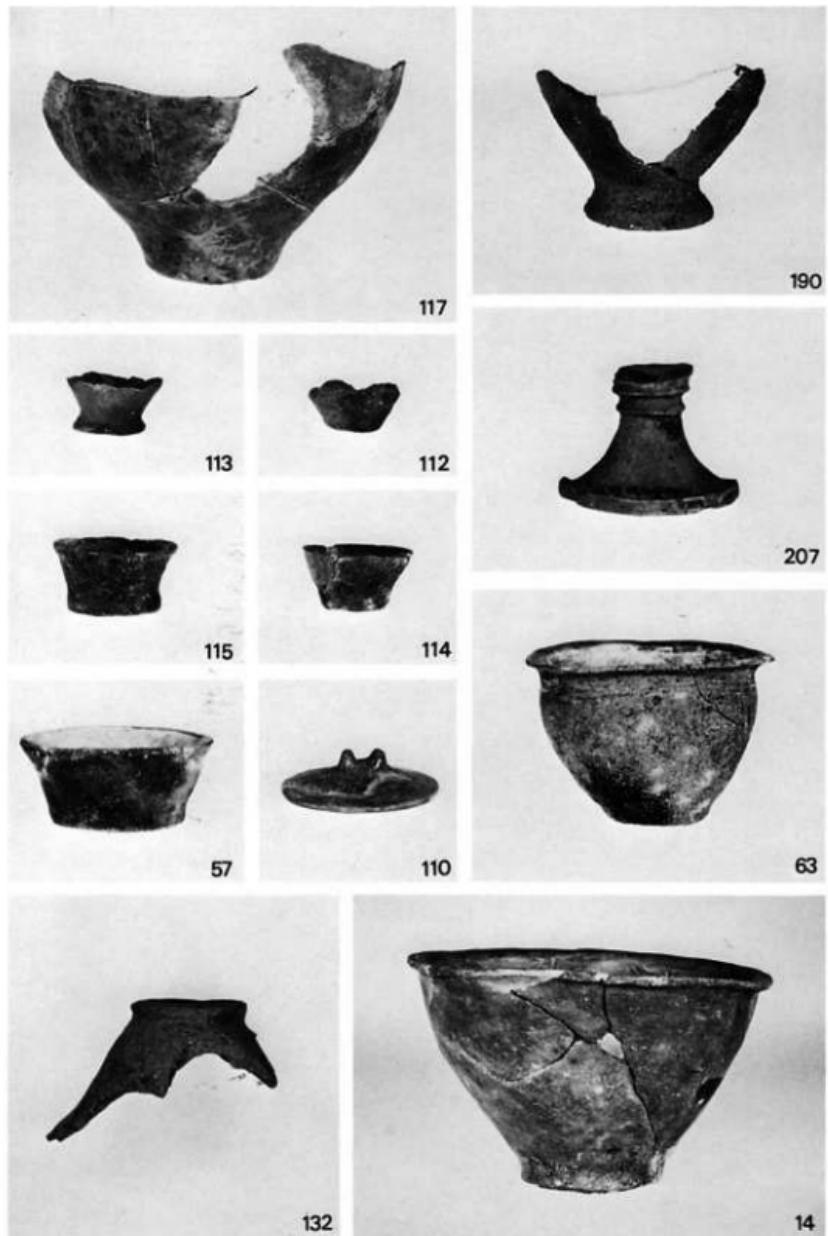


111

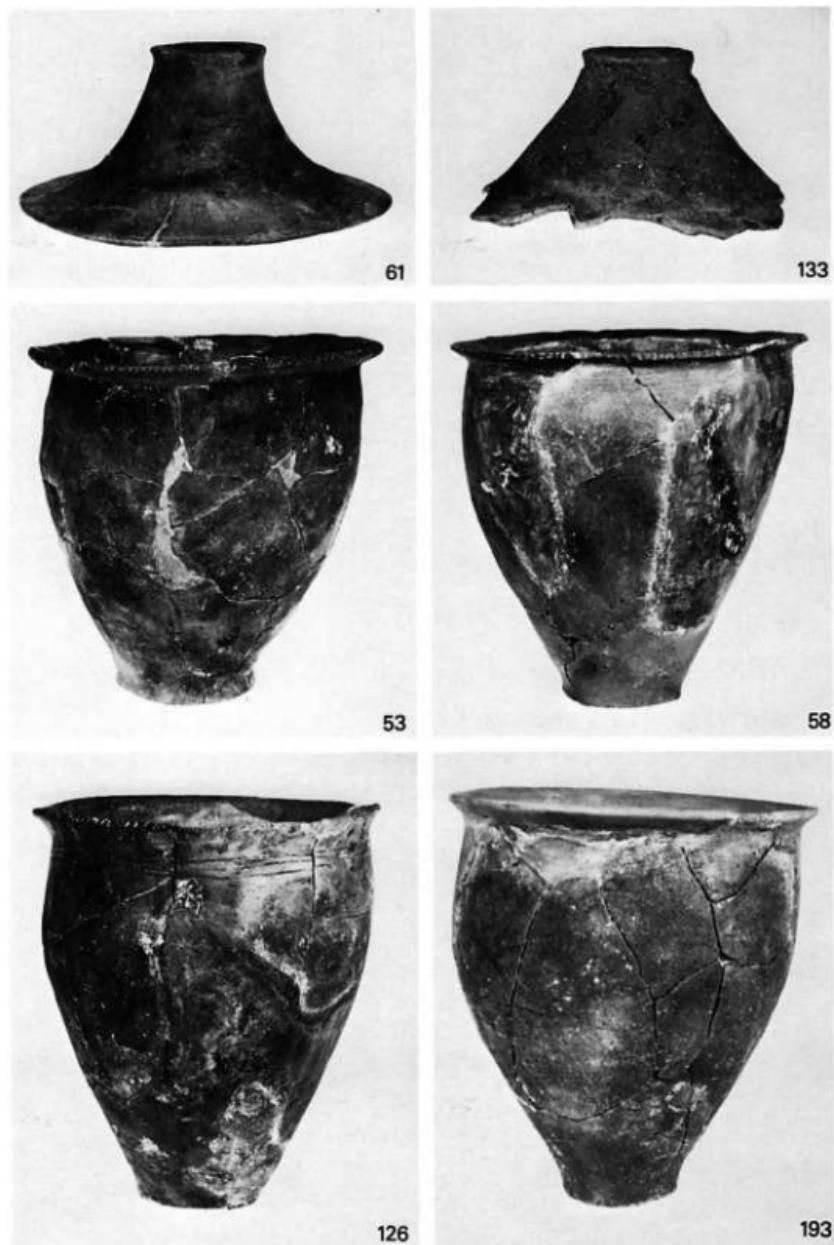


64

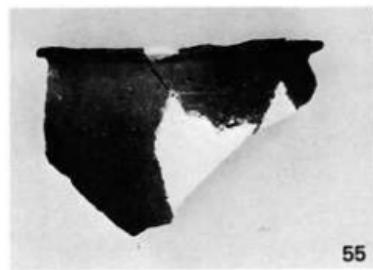
S D001, S K3008 (209) 出土土器



S D 001, S K 3007 (207) 出土土器



S D001, SK3011 (193) 出土土器



55



12



157



9



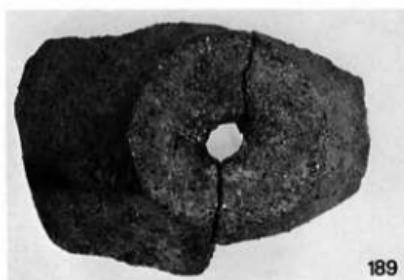
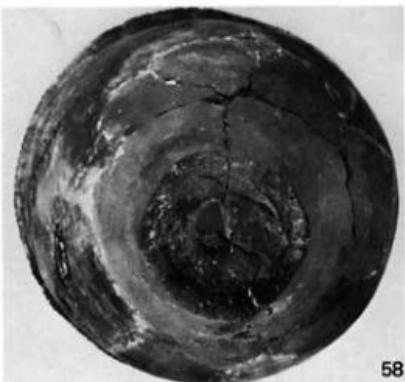
127



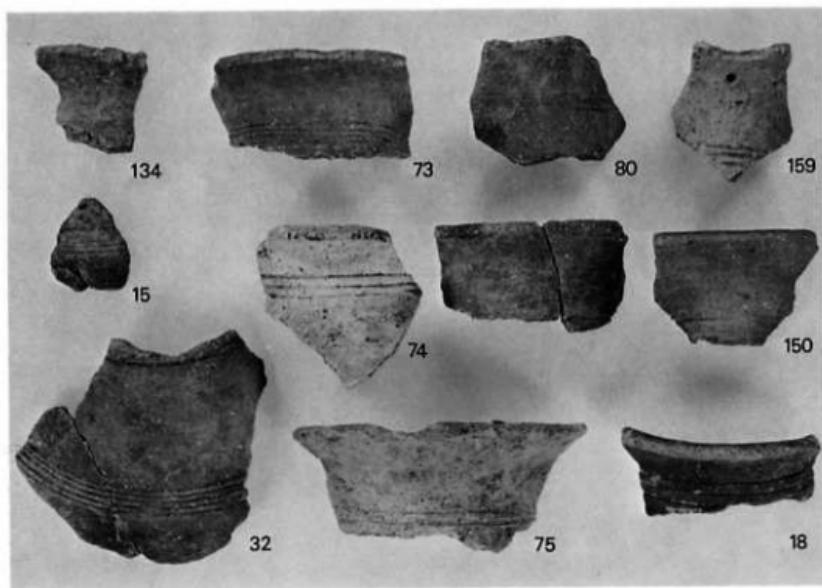
60

S D 001出土土器

図版13

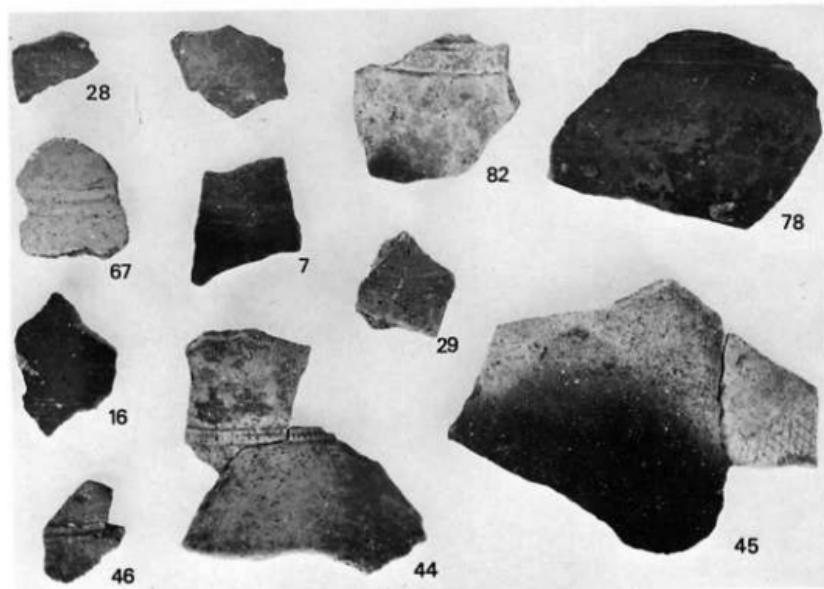


a S D 001出土土器（底部）

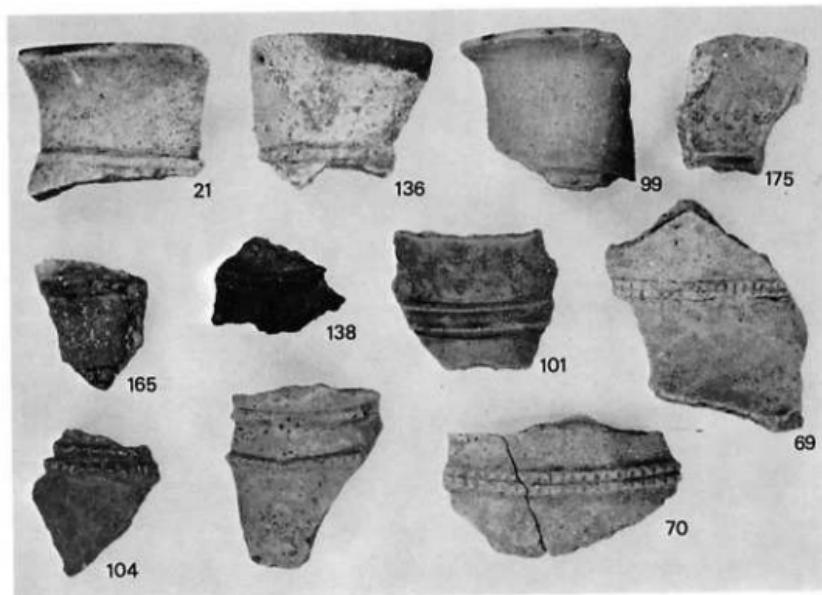


b 同上（段，削出突带，貼付突带）

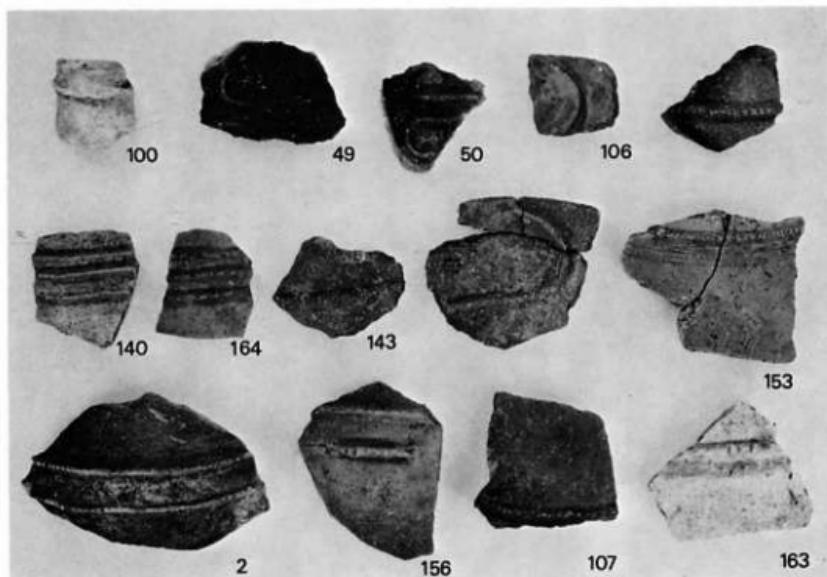
圖版14



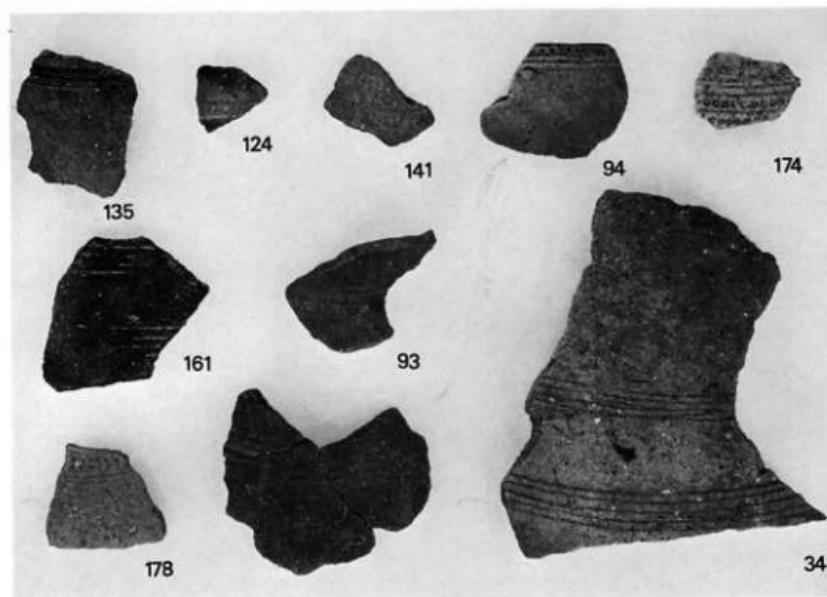
a SD 001出土土器（削出突帶）



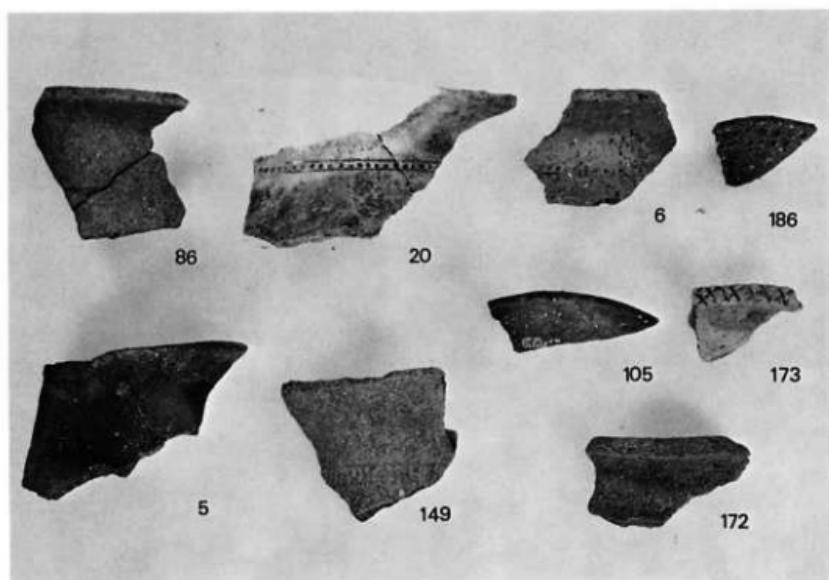
b 同上（貼付突帶）



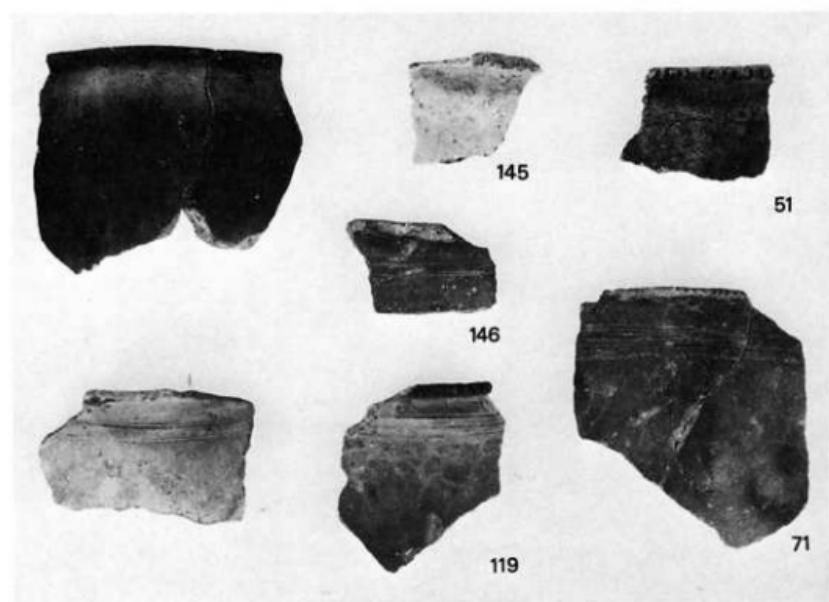
a SD 001出土土器 (貼付突帶)



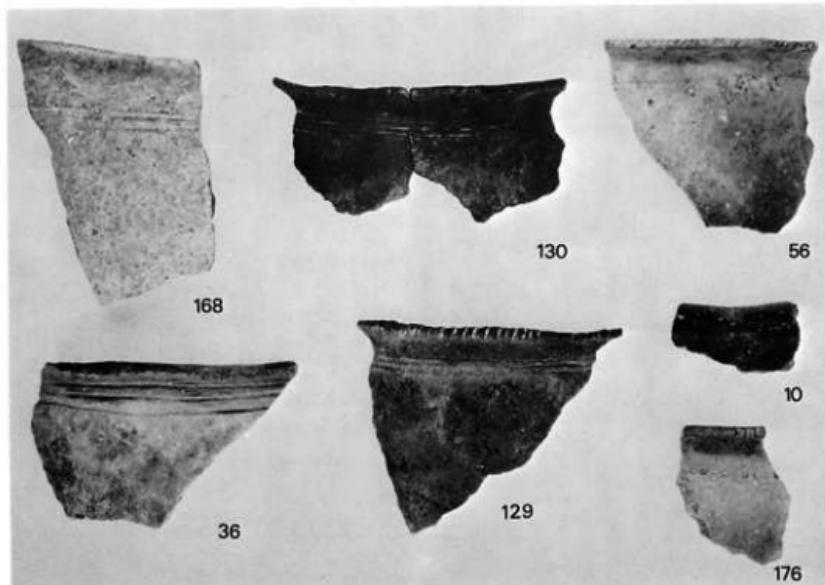
b 同上 (沈線)



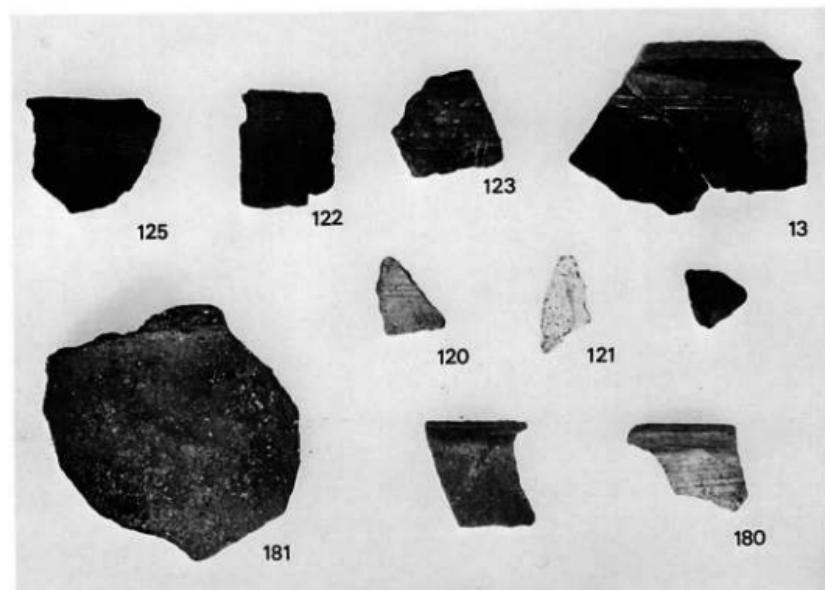
a SD001出土土器（沈線、その他）



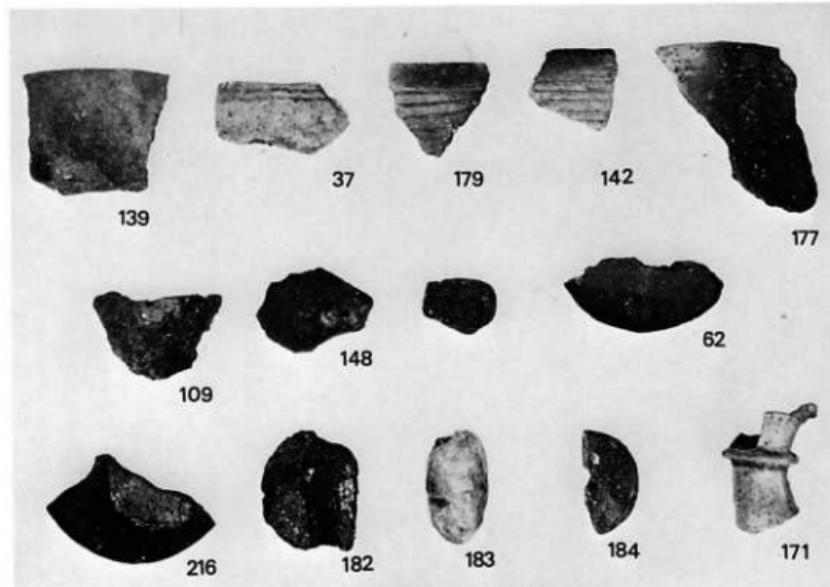
b 同上（無文、段）



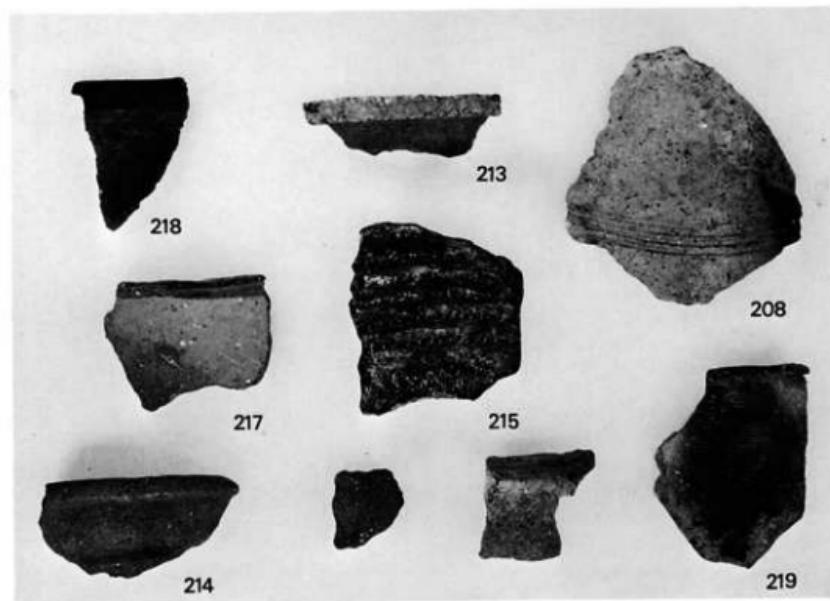
a S D001出土土器（削出突帶，沈線）



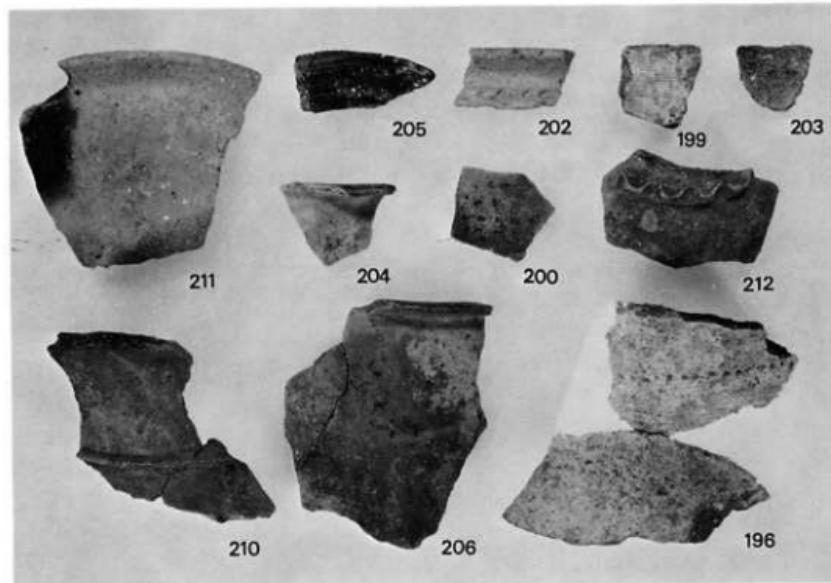
b 同上（沈線，貼付突帶，櫛描文）



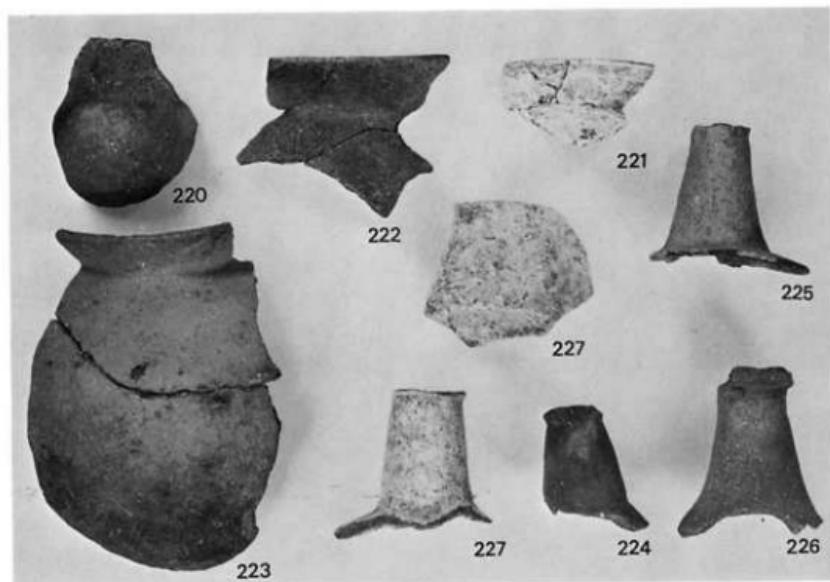
a S D 001出土土器、土製品



b 調査区出土土器



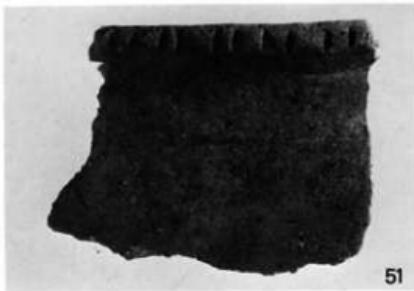
a 調査区出土土器



b 住居跡出土土器



134



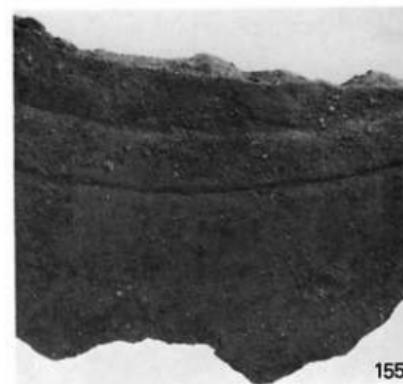
51



119



81



155



75

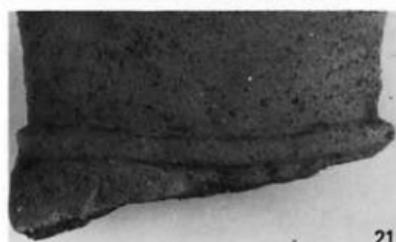
弥生土器の文様(1)



140



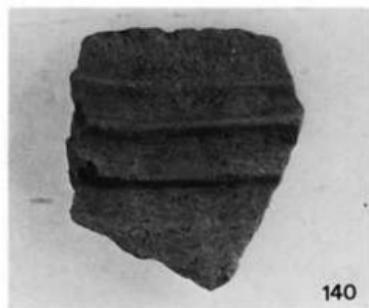
143



21



101



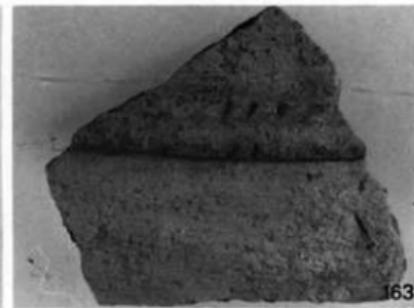
140



21



154

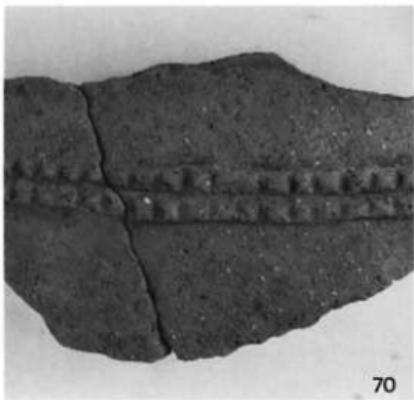


163

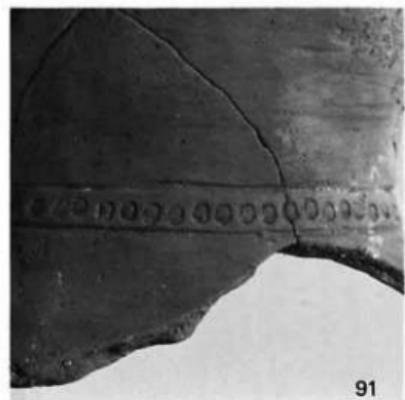
弥生土器の文様(2)



66



70



91

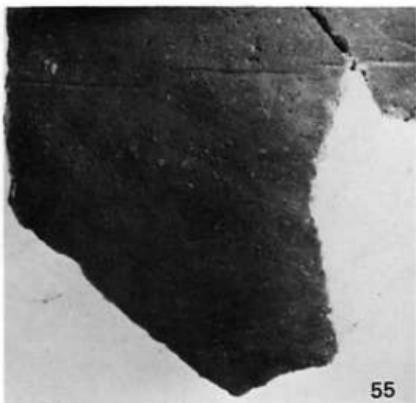


5

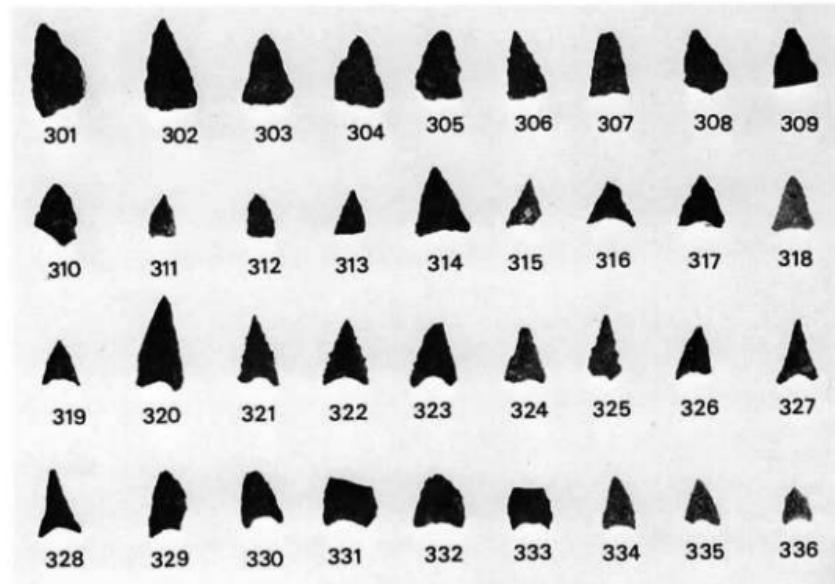


20

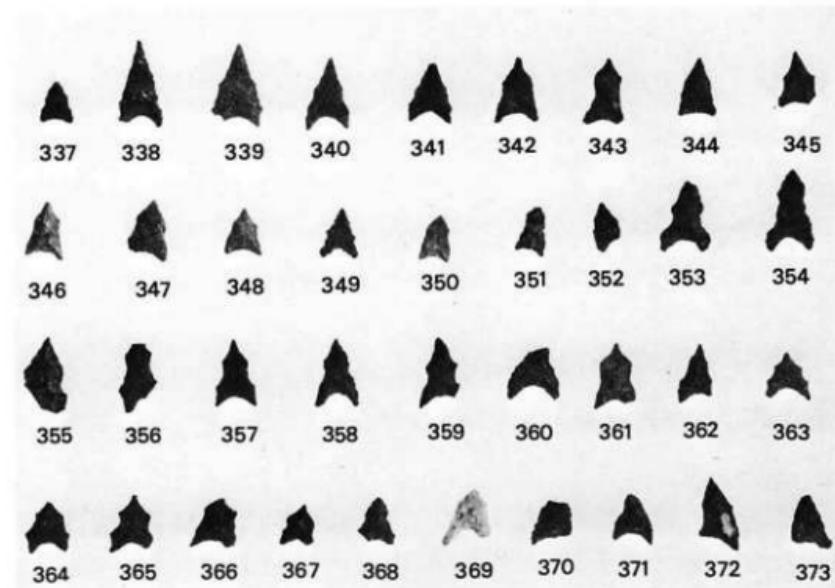
弥生土器の文様(3)



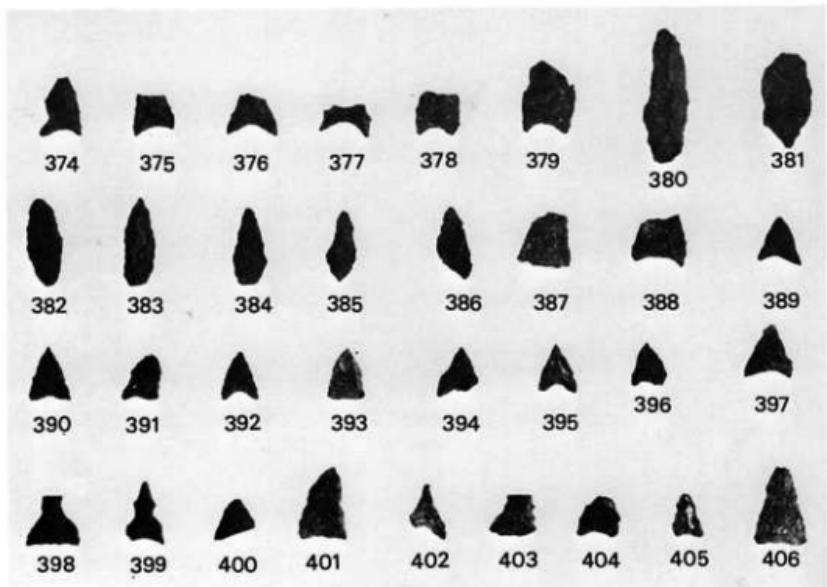
弥生土器の文様(4)と調整



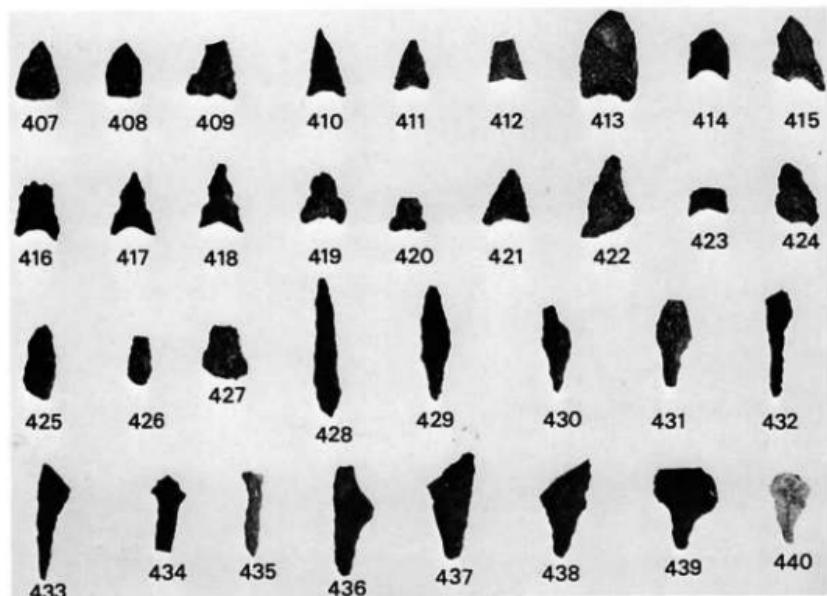
a SD001出土石鏃



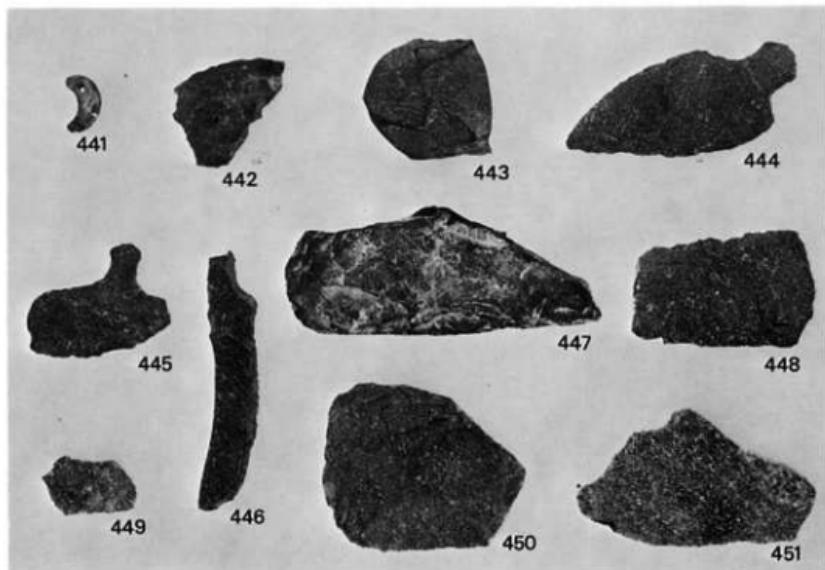
b 同上



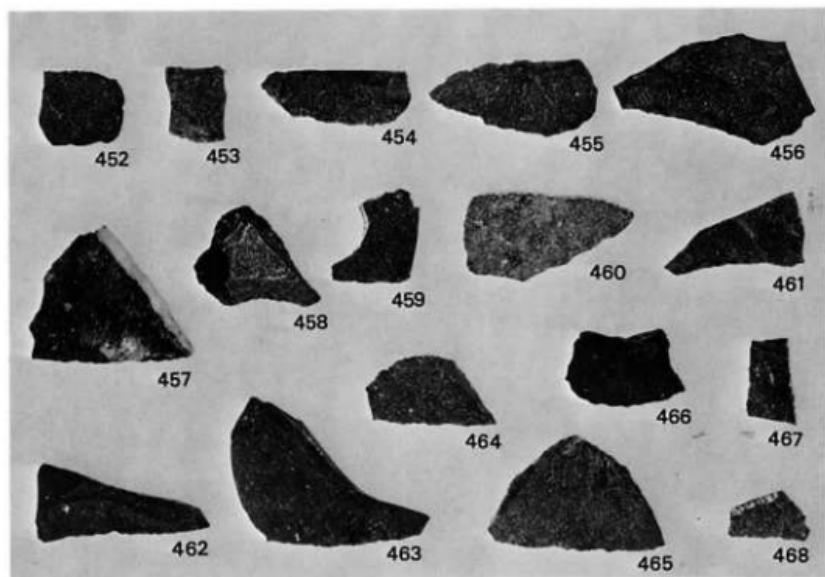
a 調査区出土石器



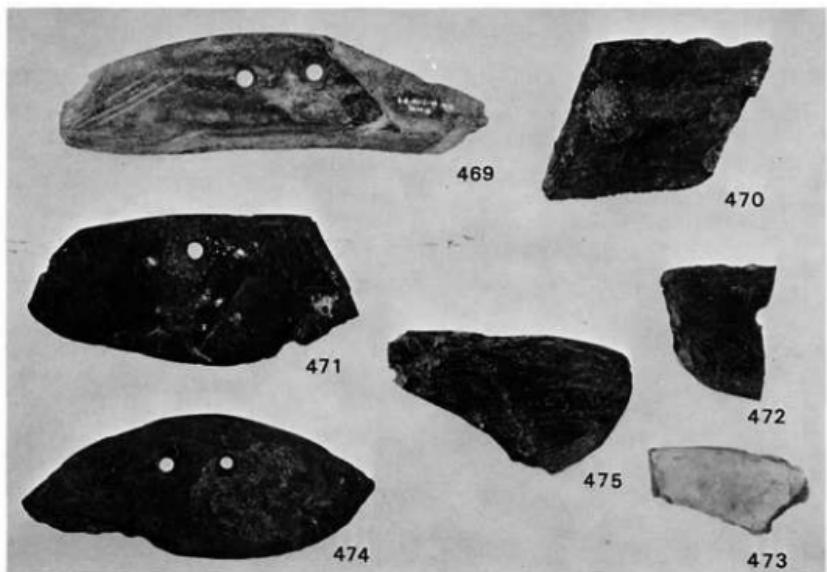
b 同上出土石器, 石錐



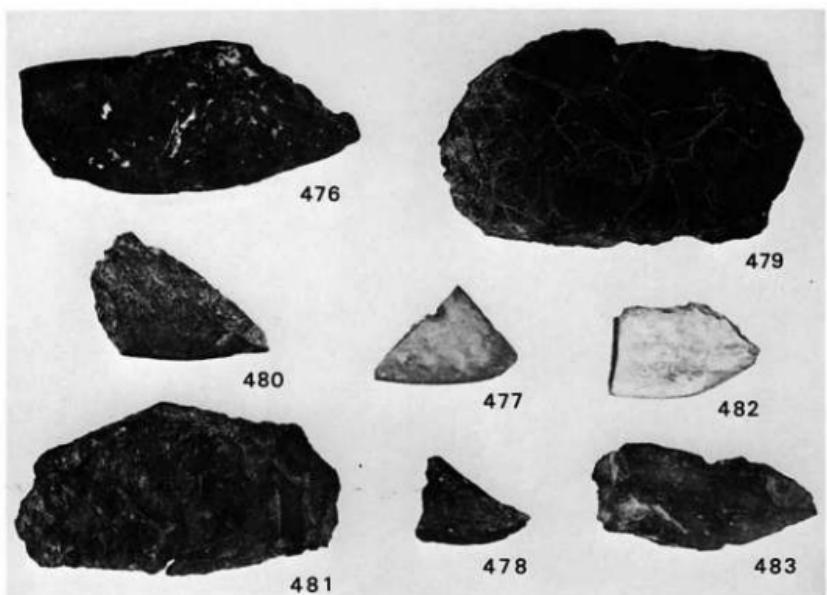
a 住居跡出土勾玉、調査区出土不整形石器



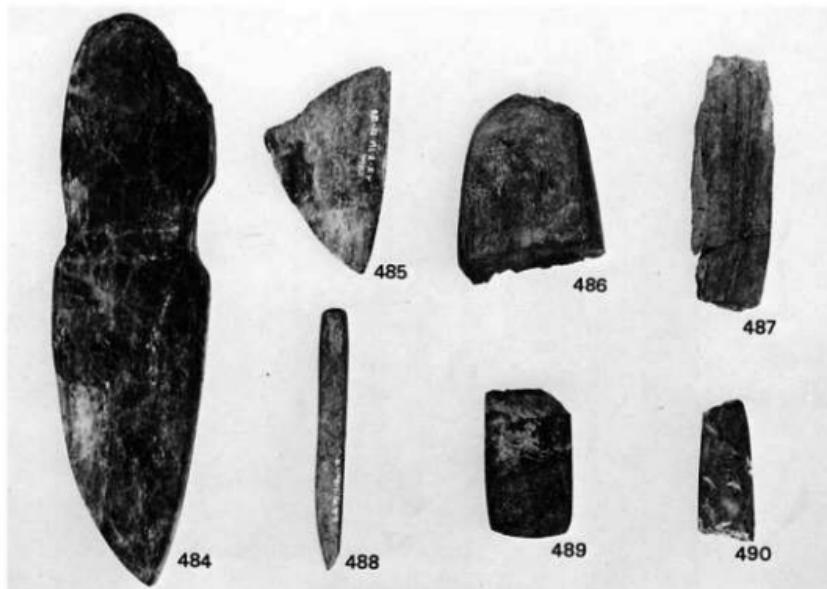
b 調査区出土不整形石器



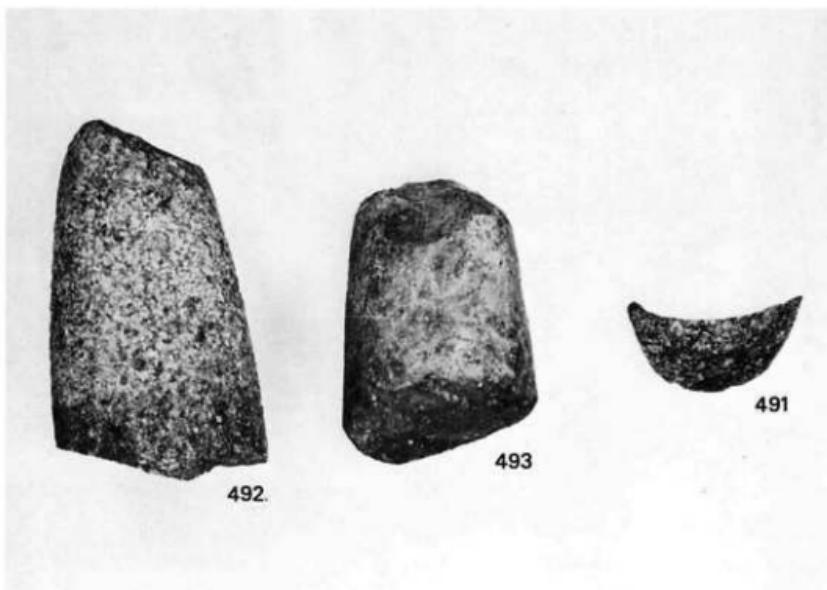
a 調査区出土石庖丁



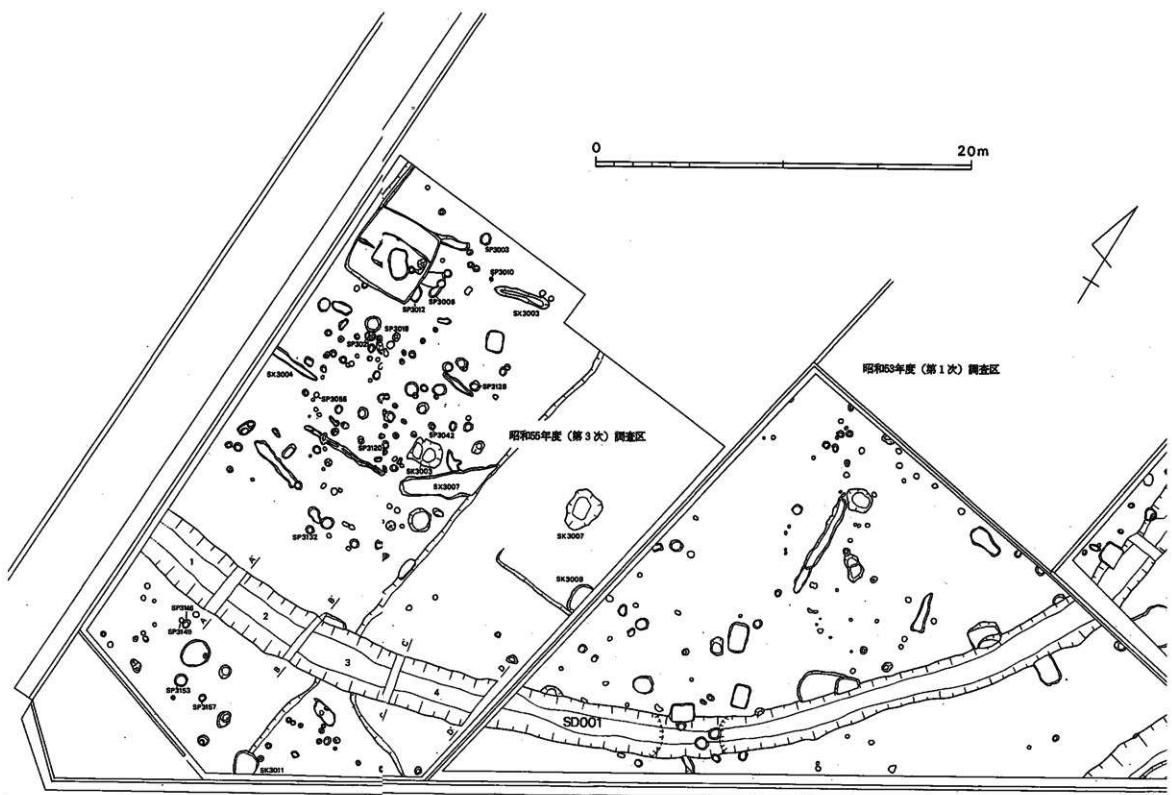
b 同上

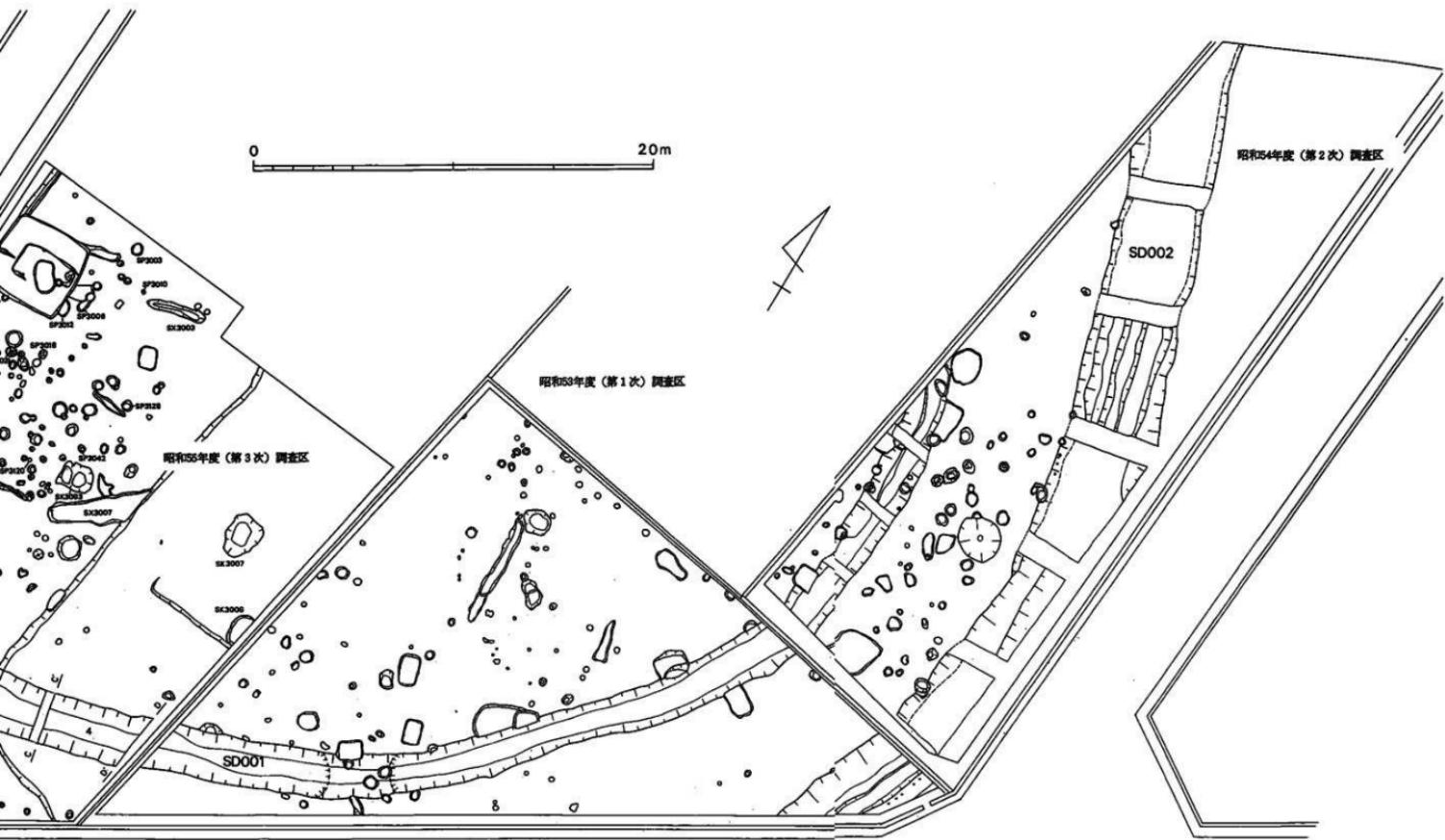


a 調査区出土石斧



b 同上





第2図 第1～3次調査区遺構配置図 (1:200)

大宮遺跡第3次発掘調査概報

昭和55年(1980)3月31日

編集・発行 広島県教育委員会

印 刷 株式会社 柳盛社印刷所